
俺とポケモンと冒険

紅東

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とポケモンと冒険

【Nコード】

N0597Y

【作者名】

紅東

【あらすじ】

10数年ぶりにポケモンをプレイし始めた青年は、気が付いたら子供の姿になってHGSSの世界に迷い込んでいた。原因を探るため、元の世界へ帰るため、子供の頃の夢を叶えるためにトレーナーとして旅立つ。ポケモンと共にのんびり冒険をする外見：子供、中身：青年の話。

この物語はHGSSの二次創作小説です。基本的にHGSSの設定や展開を踏襲していますが、ポケレンやアニメの設定の一部が融合した世界観となっています。

プロローグ 1 (前書き)

プロローグが3話もありますが、要約すると以下の2点しか書かれていません。

1. ポケモンの世界にトリップ
2. せっかくだから俺はトレーナーになることを選ぶぜ！

プロローグ 1

なんか…寝心地が悪い。背中とかチクチクして不愉快だ。違和感で意識が覚醒してゆく。

目蓋ごしにも眩しい光の中で無理やり目を開けると、俺は上半身裸で森に倒れていた。しかもなにか、体つきが幼いような…

「……………はいい？」

状況を確認してからの第一声はこれだった。だって意味分からん。なんで俺、子供の体になって見覚えのない森に転がってるの？

昨日は酒も飲まず普通に帰宅して風呂入ってベッドで寝たよ？夢？夢か？夢にしてもなんで森で半裸放置？そーゆープレイ？それともドッキリ？一文無しで1ヶ月樹海生活とか無謀な企画が始まっちゃってるの？黄金伝説よりは水曜ドーデシヨールや電波少年寄りの企画だな。

つか葉っぱが刺さって露出してる肌がイタカユイ。取り敢えず立つか。

どうすんべ、と当たりを見回すけど、木々と葉っぱと半裸の俺と細身のストールしかない。見覚えのないオシャレストールを拾い上げてみる。汚れや臭いはないな。

「裸マフラー」

なんとなく巻いてみたけど、半裸にマフラーってすごく怪しい。

あー…うん、むかーしむかし外国の盗賊は金品と女と身包みまで剥いでも、最後の情けでネクタイだけは残したって聞いたことあるな。全裸ネクタイ。

アレ？今俺まさにそんな状況？眠ってる間に強盗事件が発生して身包みまで剥がれるもストール一丁で放り出された？現代日本版情け？なら犯人は武士か？それにしたって半裸にストールってシニール過ぎだろ。いやいや強盗じゃあこの貧相な体つきの説明になってないじゃねえか。

良い感じに混乱を極める俺の意識は、ガサ、と木の葉を踏みしめる音でようやく外へ向いた。

耳を澄ましてみるけど、それきり音は聞こえない。気のせいかもしれないなあ。

ふと現在地が見知らぬ森だと言うことを思い出して心臓が早鐘を打った。焦りのまま、けれどなるべく静かに早足で移動を始める。

狐や狸ならいいけど、熊とか野犬とか猪だったら勝てる訳ない。隠れる場所のない所でじっとしてるのは危険だ。

なるべく土の露出している、裸足で踏みしめても大丈夫そうな場所を選びながら、背の高い木々の合間を抜けてゆく。隠れられそうな場所を探すけど、行けども行けども木々が覆い茂るだけで気ばかりが急ぐ。

背後に差し迫った気配はない、と思うけど、気配なんて読めないからよくわからない。

とにかく安全な場所へ、出来れば人里へ。わけわからない事だらけだけど生きてればなんとかなるっしょ。

落ち着くよう自分に言い聞かせ、滑り気味でも思考を続ける。だっと思えば思考停止したら不意の事態に対処できる確率が下がる。ぼーっと油断してるより身構えてる方がいいに決まってる。

つっても今はとにかく逃げる以外できないんだけど。ってゾンビゲームみたいだな。やべ、ゾンビものってだいたいバッドエンドだ。

思い出すんじゃないか。

無駄な思考を重ねる間にも手足は動かしている。出来る限り周りにも気を配っているつもりだったが、何かに足を取られ転倒してしまふ。そしてそれっきり金縛りのように動けなくなってしまう…

「まちなさい！…つきゃあああああ！？」

半裸にストールで地面に這いつくばっている所を可愛いお嬢さんに目撃されてしまったのだった。合掌。いや、むしろもっと見てくっつか（ヤケクソ）。

半裸で森林を駆け回る俺を取り押さえたお嬢さんはポケモンを連れ歩く不思議少女だった。そして警察に通報するどころか上着を貸してくれた上に事情を聞いてくれる優しいお嬢さんでもあった。

お嬢さん（といったらもう16よ、あなたより年上だわ。と反論された）はポケモンレンジャーと言う職業で、ポケモンを使って悪さをする悪の組織の調査中に偶然俺を見つけたそうなの。

ここまで聞いて俺はふーんとしか言いようがなく、お嬢さん改めお姉さんは呆れたようだった。

だってなあ、子供の頃にやったことあるよポケモン。通信ケーブル親にねだった世代だよ？今現在10年ぶりくらいに出戻りプレイしてるよ？でもポケモンレンジャーは名前しか知らない。

どんな組織なのかわからんし興味もなかったのに、なんだってこんな夢見るんだろ。ヤケにリアルだし。

そんな的外れな思考が顔にでていたのか、お姉さんは怖い顔をなされた。

「ちょっと君！ちゃんと聞いてたんでしょうね？」

「しっかりお伺いしました」

「じゃあ今度は君の番よ。職質させてもらいます。取り敢えず名前は何？」

「秋野諒、外見は半裸美少年ですが25才、職業は服飾販売員です」

案の定訝しげな顔でふざけないでと怒られた。しかし残念な事にふざけてないんだな、コレが。

いや美少年の下りはふざけてたけどそんなくらいは許して欲しい。だって自分でも驚いた事に頭脳は大人、体は子供、その正体は成人男

性となつてたんですよ。

うあー、バーロー超なつかし！一番最初のオープニングとか歌えちやう世代だよ俺！

お気楽な思考を神妙な顔の下に押し隠し、憤懣やるかたないといった風情のお姉さんへ話しかける。いくら夢とはいえやっぱ逮捕されたくないし。

「ふざけてませんよ。」

昨日まではそうだったんです」

懐疑的な眼差しにも負けず、真剣な顔で真面目にふざけた事実を説明する。

「家のベッドで眠ったはずだったのに、目覚めたら森に倒れていたんです。」

子供の体になって、半裸にストール一丁で」

真顔のまま緊張感のない要素を付け足すと、お姉さんは咄嗟に顔を伏せて噴き出した。やっぱ半裸ストールって破壊力高いよな。

こほんと咳払い一つ、真剣さを取り繕って顔を上げたお姉さんの雰囲気は、さっきより少しだけ和らいでいる気がした。

「わかりました。とにかく同行してもらいます」

「はい」

「さっきは逃げようとしたくせに、やけに素直ね」

だって熊かと思っただよ。なんて言うのは女性に失礼だろうな。

「野生のポケモンかと思っただですよ。丸腰だったからやばいな」

「と思つて」

丸腰どころか半裸だったじゃないと顔に書いてある。お姉さんてば結構ツッコミっぱいのに口にしないのは職務中だからだろうか。

おもちゃのトランシーバーみたいなカラフルなものでどこかに連絡を入れるお姉さん。グライガーに見張られながら待っていると（しつぽで立ってる！）、お姉さんの顔がどんどん険を帯びてゆき、何故か一瞬だけ沈痛そうな面持ちで俺を見た。嫌な予感しかしないけどまあ夢だし、とにかく聞いてみよう。

「どうしたの？」

「あなたには関係ないわ」

「仕事上の守秘義務？」

頷いてしまえばもう俺は追求できないのに、お姉さんは少しの沈黙の後、今は教えられない、と言った。

「お姉さんの様子からするに俺に関係ある事じゃないか？」

「たぶんね。でも今はだめ。とにかく下山しましょう」

その後はとにかく下山しましょうの一点張り無限ループで諦めるしかなかった。まあ後で教えて貰えるみたいだし、何より変態じみた格好が辛かったので了承した。

森じゃなく山だったんだ〜なんて呑気なことを考えていると、なにやらお姉さんが格好いいポーズ（後で聞いたらキャプチャーと言う

らしい)でその辺の野生ポケモンを捕まえてきて、俺たちはすぐに麓　ヨシノシティの病院へ向かうことになった。

暖かな春の日差しを浴びながら膝の上の温もりを撫でる。リラックスした様子でくるくると喉を鳴らすイーブイには、この1ヶ月の間ずいぶん助けられた。

「お前、今日ものんきな顔してんな。今日でお別れなのわかってんのか？」

自分の独り言で、休暇のようなものだったのに怒涛と過ぎ去った、この1ヶ月を思い出す。

フスベシテイとワカバタウンを繋ぐ45番道路、その辺りを囲む山でポケモンレンジャーのお姉さんに助けられた俺は、その日の内にヨシノシテイの森にある精神病棟に収容された。

確かに「昨日まで心身ともに25才（男性）社会人だったのに気付いたら10代の少年になって半裸で倒れていた」なんて妄言を吐く奴には相応しい処置だろう。俺もそんなこと言う奴に会ったら笑顔で黄色い救急車呼ぶわ。

だけど俺にはそれが現実であり、この入院さえも夢だと思った。

次に目覚めたらいつも通り出社して、同僚兼ポケモン仲間に変な夢見たって話しておしまい。そう思っていたのに、目覚めても目覚めても病院の白いベッドの上で、検温にやってくる看護師さんはハピナスやラッキーを連れている。

そんな日が一週間ほど続き、俺はようやくポケモンの世界に迷い込んだと言う現実を受け入れた。しかし病院側は、妄言を繰り返す身寄りも住民票もない正体不明の俺にお手上げ状態。

そりゃそうだ、異世界から来ましたなんていくらポケモンの世界でもありあえない。

けれど幸い症状は軽いと判断してくれたらしく、通院とGPS監視を条件に退院を許されたのが一週間前。そして明日にはここを旅立つ予定だ。

なんて今でこそただの事実としてこの現実を受け止められているけれど、異世界に迷い込んでしまったと気付いた時はかなり不安定になっていた。それこそ精神科にお世話になるような精神状態だ。

そんな俺に先生は病名はおろかろくな状況説明もせずただ休むように告げた。先生は患者に余計なストレスを与えないように配慮したらしいが、それこそが俺にはストレスだった。

判断力も記憶力も自分では問題ないと思うのに他人には精神病患者として扱われる。昨日までの日常は全て妄想だったと否定される。それで不安定にならない訳がない。

日に日に顔色も食欲も失くして行く俺を救ってくれたのは、イーブイとポケモンセラピストの先生だった。

最初は一日一緒に過ごしてみないかとイーブイを預けられた。どうしたらいいのか戸惑う俺の腕からするりと抜け出したイーブイは、マイペースにも院内を散策しだした。不眠と食欲不振に加え軽い運動までこなし疲れ果てた俺は、中庭の木陰で力尽きてしまった。

座り込む俺を置いて消えたイーブイを探す気力もなく。うなだれていると件のイーブイが、ペットボトルをくわえて戻ってきた。その気遣いに不覚にも涙を零してしまった俺などお構いなしに、イーブイはボトルを置くと俺の膝へ乗り上げ、のんきにも昼寝を始めた。すやすや幸せそうに眠るイーブイに乗っかられて動けなくなった俺は、暖かい日差しと膝の温もりに助けられて3日ぶりに眠ることができた。

夕方、イーブイを迎えに来たセラピスト先生に報告とお礼を告げる

と、そのままイーブイを預けてくれただけでなく、翌日から気晴らしに、とたわない話をしに来てくれるようになった。後で聞いた話だが、俺の主治医は問題のある人物なのにコネがあるから辞めさせられない、つまりヤブ医者だったらしい。

災難だったね、と悪戯っぽく笑うセラピスト先生の尽力で主治医は変わり、気が滅入る診察や事情聴取ものんきなイーブイと過ごす時間が癒やしてくれた。

なぜか首筋にバーコードらしき入れ墨が発見されたり、俺が倒れていた山に悪組織の秘密基地（荒らされ済み）があったことが判明したり、そこから子供が逃げ出した形跡があったり、明らかに逃亡した子供は俺！という証拠が上がり、俺は悪組織に捕まった子供であまりに辛い過去から記憶を捏造し逃げ出した可哀想な子、というで落ち着いた。

落ち着いたと言うのは結局事実がわからなかったからだ。記憶捏造にしては俺の記憶はしっかりしすぎているし、精神も至ってまともらしい。

俺のポケモン知識はゲームからだからちよつと現実味に欠けるもの（ポケモンの食事とか睡眠とか、生命維持行為についての知識がなかった）、バトルの相性や育成方法、遺伝技などの知識に間違いはない。対人関係にしても礼儀正しく常識的で、判断力も正常と御墨付きを頂いた。

となると、戸籍がないとは言え正常な子供を病院に閉じ込めておけない。そういうワケで幾つかの選択肢を与えられた。

里親の子供になるか、レンジャーになるか、トレーナーになるかだ。

俺は迷わずトレーナーを選んだ。

どの選択肢も戸籍の作成と最低限の生命維持の保証、移動の制限は共通している。

トレーナーの場合は輪をかけて制約が多く、行動範囲はジョウト地方に限定、GPS機器の装着、定期的な検査の受診、電話での定期報告、レンジャーや警察に協力を惜しまないなど条件をつけられたけれど25才にもなって里子はお断りだし、見知らぬ土地でポケモンだけでなく自然を守るとかそんなターザンの根性はない。それにせつかく人生をやり直すなら、子供の頃憧れたものになりたかった。

という訳で明後日、俺は新人トレーナーとしてワカバタウンから旅立つことになっている。そのために明日の朝、ここから去る。当然そんな事情をイーブイが知る訳もなく、ただ明後日にはお別れなんだとは告げてある。告げてあるけどイーブイはいつも通りのんきな様子で散歩と昼寝を楽しみリラックスしている。

うりゃ、と首のふさふさに指を突っ込んでかいてやる。心地良さそうに目を閉じて身を預ける人懐っこいイーブイをセラピスト先生はベテランだと言っていたから、別れにも慣れていいのかも知れない。

「お前にとつち俺なんて所詮その他大勢にすぎないのね…！」

うつつ、と口元を押さえて1人芝居してみるものの、イーブイは撫で続ける右手に夢中で見向きもしない。

「なんだよー付き合えよー」

ひょいと抱き上げて視線を合わせるが、もっとなでれとばかりにその丸い頭で頬をぐりぐりされた。

寂しいのは本心だったが、このイーブイを見てるとなんだか安心できる。何年たってもこいつはここにいて、変わらない気がする。目まぐるしく俺の全てが変わって行ったこの一月、まったく変わらな

かったみたいにかいつはマイペースに生きて行くんだろう。
だから診察に来るたびかいつに会えるはずだ。

その考えは、身寄りのない俺にとって暖かい感情を感じさせてくれた。寄りどころって大事だよな。

穏やかな風に乗って四時を知らせる明るい音楽が届いた。そろそろ明日の準備をしなくちゃいけない時間だ。

「言われるまでもないだろうけど、元気でやれよ」

感謝を込めて撫でながら俺は立ち上がり歩き出した。

3 (後書き)

長いプロローグを読んで下さって有り難う&お疲れ様でございます。

始まりを告げる風が吹く町、ワカバタウン 1

見送りに出てくれた先生や看護師さんたちに挨拶していると、イーブイを抱えたセラピストの先生がやってきた。

イーブイは寝坊助で朝7時じゃまだおねむもおねむ。先生の腕の中でよだれたらして寝こけている。起こさないように優しく撫でてから俺はシルバースプレー片手に歩き出した。

裸一貫どころか戸籍作成からスタートとなった俺には国から補助金が出ていた。

何枚かの着替えとトレーナー必需品であるトレーナーカード、GPSの付いたポケギアを購入したから残り5000円しかない。

けれど先生たちからお餞別という名目で、ポケギアの拡張データであるマップやランニングシューズ、寝袋、雨合羽に日持ちする携帯食などなど融通して貰えた。お陰で初めての道でも迷うことなく、3時間程で目的地を望むことができた。

近づくことに草むらを揺らす風が強くなり、俺は帽子を深くかぶり直す。

「はー、ここがワカバタウン」

さすが始まりを告げる風が吹く町というだけあって、潮の香りを含んだ気持ちのいい風が吹いている。ストールもびるびるはためきまくりだ。

ゲームよりは民家が多く見てとれたが、町というには閑散とし過ぎている。ワカバタウンに入ってまず目につくのはウツギ博士の研究所。

全国展開を唱うフレンドリーショップやポケモンセンターさえない町では、鉄筋コンクリートの大きな住宅は嫌でも目に付いた。

やっべえ、テンションあがってきた。本当に冒険の旅に出ちゃうのか俺。

インターフォンを鳴らすべく興奮気味に大股でウツギ研究所へ近付く。そうだ、その前にちよつと確認。

実はウツギ博士から御三家を貰えると聞いた時からポケモン以外にも期待してることがあった。こつそり研究所の左側を覗いてみると、赤髪の少年が研究所を覗き見しているところだった。

おお、本当にいる…さすがゲーム(?)

正直、本当に居るとは思っておらず、思わずまじまじ見つめてしまった。

覗き魔を覗くという通報されたら任意同行させられてしまいそうな状態は、少年がこちらへ気付いた事で終わった。逃げる間も視線を逸らす間もなくこつちへやってくる。

おーおー眉間の皺が物凄いいことになってるね。ブルドックみたいだよ。

大股で近寄ってきた少年は俺を突き飛ばそうとしたけれど、想定内なので一歩後ろに下がり避ける。少年はつんのめってたたらを踏んだ。

「大丈夫？」

「うるさいー！」

すかさず聞いてみたら怒鳴り返されてしまった。君の方がよっぽど煩いと言いつ返す間もなく少年は町の外へ飛び出して行く。

つておおい、ポケモンも持たずに行ったぞあの子。大丈夫なのか？あ、なんか飛び跳ねて…おおー、顔面から転んだ。………起き

上がらないな。いや、起き上がれないのか？助けを呼ぶべき？

ウツギ博士に知らせるか迷っている、背後から扉が開く音。振り返るとヒノアラシを連れだした少年が出てくるところだった。その見覚えのある姿にテンションはうなぎ登りだ。

「こんにちは。ウツギ博士に用事ですか？」

印象的な前髪の少年がにこっと笑う。白いフード付きトレーナーの上に細身の赤いジャケットを纏い、黒の七分丈パンツは大人がやるもれなく大惨事になる向こうずね見せスタイル。紛れもなくHGSの男主人公だった。なんだかにこにこしてて感じの良い子だなあ。

「初めまして、俺はリョウ。ウツギ博士にポケモンを貰いに来たんだ」

「じゃあ僕と一緒にだね」

なんだか嬉しそうに笑う男主人公の足元では、ぽかんと口を開けたヒノアラシが俺を見上げていた。

「僕はヒビキ。この町に住んでるんだ。こっちはヒノアラシだよ」

主人公にデフォルトネームあるって知らなくて適当に付けた口なんだけど修正されてんのな。ってかゲームの世界に入り込んだわけじゃないんだろうか。情報が少なすぎてわからないな。

頭の片隅で考えつつヒノアラシにもこんにちはと笑いかけたら、ぽつと背中から小さな火を出してヒビキの後ろに隠れてしまった。

「ごめんな、こいつ照れ屋ですぐ隠れちゃうんだ」

「可愛いな、めっちゃはみ出てるし」

「そうなんだ。本人は隠れてるつもりみたい」

うわぁナニソレすげえ可愛い。口には出せないけど頭足りてなくて可愛い。

「お馬鹿で可愛いだろ？」

俺がせっかく慎んだ感想を、ヒビキは輝かんばかりのイイ笑顔で言い放った。ヒノアラシがガン！とシヨックそうに見上げてるけどいいんだろつか。

「なんか和むよね」

あわあわしてるヒノアラシを見ながらの追い討ち。ヒビキって結構イイ性格してんだな。でもま、

「わかる、可愛いくて和むよな。撫でてもいい？」

「うん、いいよ〜」

しゃがんでヒノアラシに手をのばす。緊張した面もちで固まっていたけど、うりうり撫で回すとすり寄ってくれた。

「照れ屋のわりにはなつつこくないか？」

「う？うーん…まだよくわかんない」

「そっか、今日会ったばかりだもんな」

「うん。でも今日からずっと一緒だよ。な、ヒノノ」

「ひの〜」

ぽつと背中から火が出て、俺はとっさに手を引いた。ヒノアラシは照れたらしくヒビキの背に隠れてしまっ。

「大丈夫だった？」

「うん、撫でてたの頭だし」

心配そうに聞いてくるヒビキの後ろから不思議そうな顔がのぞく。火傷させそうになったとは気付いてないんだろう。

なにかある度に火を出すんじゃない、躰が大変そうだなあ。

「ところでさ、ヒビキくんたちはこれからどっか行くところ？」

たぶん今からポケモンじいさんのところへお使いなんだろうけど聞いてみる。確認は大事だ。

「うん、ちよつとヨシノシティの先までお使いなんだ」

「まじで？大変だな。結構遠いじゃん」

当たり障りのない事を口にしながらも内心はシナリオ通りの展開に喜んでいた。この後もシナリオ通りに進んでくれれば俺は頭の可笑しい人を完璧に卒業だ。

「そう、だから今日はポケモンセンターにお泊まりなんだ」

何もかもが初めての経験なんだろう。興奮と期待がない交ぜの楽しそうな笑顔にこちらまで心が弾む。

「じゃあ帰宅は明日なんだ？あのお、俺は明日ポケモン貰う予定なんだよ」

「じゃあ僕が1日だけ先輩だね」

ああ、小学生くらいの時って誕生日が1日違うだけで”俺のが年上

「なんて喜んでたっけ。なんかアレ結構鼻につくんだよな。けどはにかむヒビキからはそう言うのを感じない。っていうか微笑ましい。これはヒビキの性格のせいなのか、俺が年をとったからなのか。」

「そう、だからヒビキ先輩、帰ってきたらバトルしようぜ」

言ったとたんヒビキは少し目を見開いてフリーズしてしまった。なんか変なこと言ったかな。

「だめかな？」

「ううん！先輩って言われてびっくりしただけ」

ヒビキは再びにこーっと人好きのする笑顔を、今度は満開で見せた。

「なんか先輩っていい響き！」

子犬みたいなはしゃぎっぷりにこちらの顔も自然と緩む。今時こんなピュアな子は天然記念物だろう。俺がシヨタがバイだったら危うく恋が始まる所だった。

「ヒビキ先輩かわいい〜」

「ありがとう、よく言われる。でもね、僕男前だから。そこんとこよろしく」

「ほほう…どこらへんが？」

「全部！」

だめだ、この子犬系少年のどこに男らしさがあるのか理解できん。すっかり和んだ空気へ割り込むように、どこからか音楽が聞こえてきた。反響して不協和音になっているがフレーズに聞き覚えがある。

多分ワカバタウンのテーマだ。

「もう10時だ。そろそろ行かなくちゃ」

「ああ、今の曲って時報か。変な時間になるんだな」

「そうだよな。あと8時と4時にもなるんだ」

なるほど、その時間には思い当たる節がある。ゲームではなかった親切設計があるらしいな。

「たぶんポケモンの活動時間に合わせてじゃないか？」

はっとした後、真顔で見つめられて少し戸惑った。なんだなんだ、どうしたんだ？

「……………リョウくんって天才？」

「……………ヒビキ先輩が天然入ってるだけに一票」

この子、1人でお使いにだして大丈夫なのか？

ヒビキを見送り、今度こそウツギ博士を訪ねた俺はコトネの家へ向かっていた。

ウツギ博士いわく。

『僕トレーナーとしてはまったく才能ないんだよね。だからお隣のコトネちゃんに教わっておいで』

だそうで。そんなんでどうやって進化の研究してんだと突っ込みたかったが、博士は俺みたいな得体の知れない奴に御三家を譲ってくれる天才的なボケ…いや、奇特…もとい大変心優しい人だ。なんかこう、友情ゲッツとか育て屋さんとか大人のコネとか大人のコネとか大人のコネでなんとかしてるんだろう。

それにしてもたらい回しってどうなんすか博士。

あまりに適当な対応にちょっと遠い目になりつつ足を進める。実は研究所を出てからずっとコトネの家もヒビキの家も見えてるから迷いようもないんだ。けど、その見えてるお隣さんが軽く200mは離れてるって。さすが田舎町としか言いようがないなあ。老後を過ごしたいくらいのどかな場所だ。

ぼけーっと歩いて5分程で到着したコトネの家の呼び鈴を鳴らす。ゲームでは不法侵入が当たり前だけど、この世界でそんなことしたらだめだと思う。確認はしてないけどさ、インターフォン付いてんなら使わないとな。

リンゴーン、と教会の鐘のような音が鳴ると、中から2つの軽い足

音がパタパタパタと重なって聞こえてきた。そしてガチャリと開いた扉から青い球体が、かの有名な雑巾がスーパーボールのように飛び出してきた。

「りるる〜」

くるりと俺の周囲を一周した雑巾、もといマリルは扉を開けた主の腕に戻っていく。

「こんにちは、はじめまして。あなたがリョウさんね」

にっこりと小作りな顔が笑う。2つに結んだエクストリーム外ハネと某子猫ちゃんを彷彿とさせる帽子につい目が行ってしまいがちだけれど、コトネは文句なしの美少女だった。大きな瞳と桃色の唇、肌は淡いピンクがかった白で頬には健康的な朱色がさし、細すぎない手足がすんなり伸びている。

「そうです。はじめまして、コトネちゃんにマリル。今日はよろしくお願いします」

「あ、えっと、そんなに畏まらないで下さい。私の方が年下ですからっ」

「うん、そうだね。じゃあ改めまして。よろしくお願いします、コトネ先生」

「え、えええ？」

改める場所が違う！って言うかよけい畏まっちゃってる！

ますます困惑するコトネを見ているのは楽しいけど、いつまでもからかってちゃ話が進まない。

「冗談だよ。よろしくな、コトネちゃん」

「あ、はい！」

あらら、今度はコトネが畏まっちゃってら。

「コトネちゃんもさ、さんなんて付けなくていいよ。あんまり年変わんないだろ？」

トレーナーとしてはコトネが遥かに先輩だと言うことはあえて口にしないでおく。緊張させるだけっぽいし。

「んーと、じゃあ、リヨウ、くん？」

「うん、なあに？」

なにその恋人になつたばかりみたいな呼び方！あんまりに初々しいんで突っ込みたかったけど我慢だ我慢。

「リヨウくんはまだポケモンいないんだよね」

「ああ、借りた子はいるけど俺の子じゃない。明日譲って貰う予定だよ」

「じゃあ取り敢えずバトルと捕獲のやり方教えるね。あとは…」

「食べさせて良いものとか、お風呂の入れ方とか、トレーナーとしての常識なんかを知りたいな」

「わかつたわ。じゃ、いこっか！」

弾むみたいに雑巾、じゃねえ、マリルが腕から飛び出して町の外へ先導する。

「マリルって小さいのにすごく元気なんだな」

「私のマリルは特別元気なのよ。野生みたいにのびのび育ってるからね」

そついやウツギ博士が連れ歩きの研究はじめたのつてコトネが雑き
…マリル…ああもう雑巾でいいや。雑巾を連れ歩いてたからなんだ
よな。この世界じゃある意味原点にして頂点なのかも。
あ、でもそれ言ったらゲーフリはアニメのピカチュウ見てイエロー
作つたんだつて。で、それを元に今作の連れ歩きになつたんだよな。
やっぱ原点はレッドとサトシかなあ。

「ね、リョウくんはもう貰うポケモン決めてるの？」

「ああ、希望はチコリータなんだけど」

「そつか、よかったね。きっと希望通りになるよ」

「え？」

一瞬コトネがこの後の展開を、ワニノコが浚われるのを知ってるの
かと驚いた。が、よく考えるまでもない。ヒビキに貰われたのがヒ
ノアラシだからそれ以外なら貰えると考えたんだろう。
そつだよな、そつじゃなきゃ怖すぎる展開になるよな。

「ヒビキくんがヒノアラシ連れてつたから？」

「なんだ、もうヒビキに会つてたのね」

よかつた、ひぐらし的展開じゃなくて本当によかつた！

ワカバタウンのほど近く。俺はコトネの斜め後ろから戦況を見守っていた

「マリル、体当たり！」

でし、と重いんだか軽いんだか解らない衝突音。体当たりされたオタチが後ずさる。

しかしふるぶると首を振ると、すぐに体当たりを仕返して来た。それを受けつつ上手く後退した雑巾は、オタチから目を逸らさずにコトネの指示を待っている。

「マリル、もう一度体当たりよ」

「りるー！」

愛らしい姿からはちよつと想像つかない素早さでオタチへ向かって行く。かわすべく右へ動いたオタチに合わせて雑巾が突っ込む。確実に胴体を捉えた体当たり、オタチはたまらず這いつくばった。音だけ聞いているとまぬけなんだけど、生で見ているとなかなか迫力がある。

「こんな風に弱ったらボールを投げるのよ」

軽く放物線を描いて放られたボールはオタチに当たる寸前、ぱくりと開いて網状の白い光を発した。それがオタチをボールに引きずり込んで地面に落ちる。

まるで起き上がり小法師みたいにぐらぐらぐら、と揺れると、思わず腹筋に力が入った。オタチの捕獲しやすさっていくつだったけ？マ

ツクスじゃなかった気がするな。
じっと見守る中、三度揺れたボールは静まり、カチツと何かがロックされたような音が聞こえた。ちなみに脳内では例の音楽が鳴り響いていた。

「う、わあ、すげえ、捕まえちゃったよ！」

アホみたいな感想を口走る俺にコトネは笑う。ボールを拾い上げると、近寄ってきた雑巾の頭を撫でて労った。

「今は成功したからいいけど、失敗するとモンスターボールって二度と使えなくなるんだよ。ゴミだけどちゃんと拾って、フレンドリーショップやポケモンセンターにある指定のゴミ箱に入れてね」

「はい。でもなんで使えなくなるんだ？使い捨てだから、じゃ理由にならないよな」

苦し紛れに口にした答えは抽象的で曖昧なものだった。

「リョウくんって本当になんにも知らないのね」

「面目アリマセン。」

「教えて下さい、コトネ先生」

道中で俺のおふざけに慣れてきたコトネは苦笑いした。

「先生じゃないつつの。」

捕獲に失敗するって言うのは、ボールを壊されるからってことだから」

なるほど、そりゃ使えないわな。

「あ、じゃあ、逃がして空になったボールは？」

「それも使えないから、もったいないけどゴミ箱行きね」

「ふうん、なんで使えないんだろ」

「詳しくは私も解らないんだけど、ボールの仕様らしいの」

仕様かよ！

まさかの大人の事情に思わず突っ込みそうになったけど、コトネは悪くない。

「大人の事情か」

「大人の事情って？」

「製造会社が儲けるために使い捨てにしたのかなってこと」

「うーんとね、なんかね、ちゃんと理由があるんだよ」

「理由？」

利益追求だけじゃないのか。訊ね返すと、コトネは何かを思い出すように視線を中にさまよわせた。

「んーとね、ボールってポケモンが入るとそのポケモンの情報が書き込まれるんだよ。捕まえた人のIDと日時と捕まえられたポケモンの種類と性別、性格や特性なんて細かい所まで。

その情報をボールに記録しておくことでポケモンを拘束するから、上書きも消去もできないの。だから使い回しはできないんだって」
ふうん、なんとなくDVD-Rを思い出すなあ。DVDデッキを買った当初、上書きできないことを知らずに買ってびっくりしたことがある。DVDでは通過儀礼みたいなもんだよな。

「なるほど。それなら盗難とか防げるな」

「そうだね」

どういう原理で性格とかわかるんだって突っ込みたいけど、まあ詳しい理由なんざ解らなくてもそういう”仕様”だと知っておくのが大事だよな。

「あ、そうだ。でね、そのボールなんだけど」

先ほど捕まえたばかりのオタチのボールが差し出される。中央のボタンを押すとボールは小さくなった。

「こうやってボタンを押すと小さくなったり大きくなったりして、大きな状態じゃないとポケモンは出入りできないの。」

それから大きな状態だと、ポケモンも外の様子が判るけど、小さくしているとわからないんだって」

言いながらボールを大きくする。小さい状態はスリープモードみたいなもんだろうか。

「だからトレーナーはホルスターに大きな状態で付けておく人がおおいわ」

「戦闘の時、指示出しやすいからか？」

トレーナーの指示に従うとはいえ、戦局を把握していた方が動きやすいだろう。

「それもあるけど、単純に同じ時間を過ごしたいって人が多いよ。で、大きな状態でなげると…」

ぼん、とぐぐもった破裂音と共に捕まえたばかりのオタチが現れる。捕まったばかりだからだろうか、何うようにじっとコトネを見つめ

ている。

「はい、これがこの子のステータスよ」

「へえ、ポケギアで確認できるんだ。図鑑がないと見れないと思っ
てた」

「やだ、それじゃ困るじゃない。図鑑なんてめったに持てる物じゃ
ないんだから。」

ちなみにポケギアが普及する前はボールで確認してたのよ。

ホラ」

差し出されたボールの上部、赤い半球にコトネが触れると白い小窓
が現れる。そこにはゲームで見慣れた戦闘画面が、小窓の下方にオ
タチのHPと経験値が表示されていた。

「この上の空いてる部分にはバトル相手の情報が出るの?」

「当たり前。あと、こっやってタッチすると…」

小窓に触れる度に画面が切り替わり、詳しいステータスや性格、出
会った場所が代わる代わる表示されていく。

アニメのイメージしかなかったからこんなハイテクなもんだと思わ
なかったよモンスターボール。

「すげえ便利だな」

「うん、それも善し悪しなんだけどね」

困ったように笑うコトネが何を言いたいのかわからない。

「何か問題でもあるのか?」

「ん〜…ボールにはないんだけど。リョウくんはさ、旅にでるんだ
よね?」

「ああ、バッジを集めるつもりだよ」

言葉を探すように視線が泳ぐ。それとも言い出し辛いだけだろうか。

「なにか話辛いことでもあるのか？」

「ん〜、そう、かな」

「俺は素直なよい子だから、先輩トレーナーの忠告は有り難く拝聴しますよ？」

「え、えええ！？」

どつから突っ込んだらいいのが解らない、と困惑を浮かべながらも笑ったコトネは、なぜか吹っ切れたように言った。

「リョウくんなら心配なさそう」

「なんかわかんないけど褒められたっばい？」

「うん、誉めてる誉めてる」

「うわ、テキトー」

笑いあうとコトネにはもう元気が戻っていた。よくわかんないけど大丈夫ならいいさ。

「じゃーそろそろ戻っておやつにしようか。マリル、オタチ、帰るよー」

いつの間にかマリルと遊んでいたオタチをボールに戻し、俺たちは連れ立ってワカバへ歩き出した。

物慣れないオタチを雑巾が危なげなく誘導していく。有り余るほど元気な雑巾だけど案外面倒見がいいみたいだ。コトネは口を出すわけじゃないが、それでも2匹を気にかけている。

ゲームじゃわからなかったけど、こんな風に関係を育てるのも育成

の一つなんだろうな。

「コトネはマリルとどのくらいの付き合いなんだ？」

「生まれた時からだよ」

「トレーナーって10才以上じゃないとなれないんじゃない？」

病院にいる間に調べたトレーナーの資格は、10才以上が絶対条件のはずだったけど。

「トレーナーになったのは今年になってからだよ。でもね、家族として一緒に居るのに資格なんていらなないでしょ？」

家族、そうか、家族か。

異世界で育った俺には家族をバトルに出すという感覚はわからない。でも、コトネと雑巾…マリルの関係が家族だと言っるのは納得できた。雑談をしている内にワカバタウンの近くまで戻ってきた。潮風の匂いがする草むらを歩いていると、ふと赤い髪の少年のことが頭をよぎる。10時くらいに目撃して今はもう3時すぎだ。あれから姿を見てないけど、また窓に張り付いてたりするんだろうか。

「ねえ、リヨウくんはお夕飯どうするの？」

「ウツギ博士に誘って貰って…」

がしゃーん！と硝子の割れる音に俺たちは立ち止まった。音の出所は前方、町の方。ってというか多分研究所だ。

「今、ガラスの割れる音、したよね？」

「したね。見に行ってみる？」

「うん！」

手早くオタチを戻しながら走り出したコトネを追って俺とマリルも走りだす。思いの外足の早いコトネとそれに追いついたマリルが町へ着くのと、赤い髪の少年が飛び出してくるのは同時だった。

「きゃっ!?!」

「コトネ!」

「ぶぎゅるっ!」

ぶつかりそうになったコトネを突き飛ばして少年は駆けて行く。とっ捕まえることも出来たけど、それじゃストーリーを変えてしまいかねない。

なにより転倒したコトネと変な声を上げて潰れたマリルを助け起こすのが先だ。

「〜いたた、ごめんね、マリル」

「り、りるる…!」

コトネに手を貸して助け起こすと、下敷きになっていたマリルがちよっと涙目になりながら、よろよろ体を起こした。大丈夫?とマリルの無事を確認したコトネはマリルを膝に抱き上げ、むっと顔をしかめた。マリルも同じ顔をしている。

「もう、なんだったのよ、あいつ!」

「りるる〜!」

「ドロボウ、かな」

「へ!?!」

町の入り口から見えるウツギ研究所に目をやると、午前中に少年が張り付いていた窓ガラスが破られている。たった今ワニノコを盗ん

だところだろう。

「追いかけなきゃ！」

「おいコトネ！怪我は！？」

「してないよ、大丈夫！」

少年を追って草むらへと走り出したコトネたちを追う。手持ちのない俺は足手まといかも知れないと思ったが、放っておくのも心配だ。

しかし浅いとはいえ草むらって走り辛い。慣れた様子でざかざか進むコトネたちとは少しづつ距離が開いてしまう。おまけに町から離れるほど段差や木々に遮られて、慣れていない俺はますます離れてしまう。あまり離れると野生のポケモンに遭遇した時に困りそうだろうん、虫除けスプレーして走るべきか？でも今鞆なんか漁ってたら見失いそうだ。かと言って草むらをよけられる段差は登れるほど低くないし、結局は鉢合わせしないようお願いしかないか。

四苦八苦しながらいくつも草むらを抜けて行く。どのくらい走ったのか、いくらローラーシューズ+エアギアみたいなランニングシューズを履いているとは言え息が上がってきた頃。

視界を遮る木々を抜けると、草むらに立つ赤毛の少年へコトネが突撃して行く所が見えた。大きく踏み出して突進するように飛びかかって、って、どうやって着地する気だー！！！！

どっ！と追突された少年が宙を舞い、ズザーッと痛そうな音と共に手を着く暇もなく顔面から盛大に着地した。

うひい、痛そう！目の前で見事なタックルを目撃してしまった俺は、初めてのことに思わず足を止めていた。

わあい、初体験おめでとー！と、脳内に的を外れなコメントが浮かんでる。予想外の出来事に思考が明後日の方を向いていた。

1mは吹っ飛んだ赤毛の少年の近くからコラッタが逃げて行く。ああ、コラッタとバトルしてたから追いつけたのか。つてそうじゃない。

「コトネちゃん！大丈夫か！？」

「くくいつまで乗ってるんだ！」

「きゃっ！」

吹っ飛ばした張本人は逃がすまいと泥棒にしがみついていたけど、勢いよく跳ね起きた少年に振り払われてころりと転がる。

悲鳴と仕草は可愛いんだけど、さっきのアグレッシブすぎる行動を見た後だと、むしろ泥棒の方が心配かもしれない。顔面から行ったしね。それに女の子って案外強いもんだ。でもさ。

「女の子になにすんだ、この窃盗犯！」

起き上がるうとした体制で停止してしまったコトネに駆け寄る。その間にマリルはコトネを庇って前に出た。

「挫いたか？」

「うー、足首やっちゃったっぽい」

「間抜けな女だな」

靴下の上からじゃわからないけど痛そうだ。でもそれはフンと鼻をならして格好つけた奴も同じ。

「お前も大丈夫か？鼻血でてるけど」

「！」

「また顔面から転ぶなんて、案外トロいんだな」

ぐい、と袖で鼻を拭うが、残念ながらまだまだ鼻血が止まる気配はない。袖がガピガピになる前にティッシュあげたほうがいいかな？

「っ…自信ありそうだな。ちょうどいい、お前で試してやるぜ！」
なぜそうなる。俺のどこが自信ありそうに見えたんだ？

「俺ポケモン持ってないけど」

さらっと嘘をつく。実はピジョンがいるけど、出したところでバトルにならないからなあ。レベル高いし大人しいやつだけど、虫避けスプレーを使うために借りたポケモンだから俺の指示には従わない。

「マリルがいるだろう！」

「コトネちゃんのだ。んで当のコトネちゃんはお前のせいで負傷中だ」

コラツタに逃げられてからずっと所在なさげにしていたワニノコが、主の顔と俺たちを見比べて困り切っている。

「フンツ！戦えない奴に興味はない」

「あ、待ちなさい！」

「怪我人が無茶すんな」

ワニノコをボールに戻して逃げ出した少年。それを追おうとしたコトネを引き止める。

変わりに一声かけておこっかね。

「通報しとくからな！窃盗犯に傷害犯〜！」

急いで林の中へ逃げて行く少年を、騒ぎを聞きつけたのかいつの間にか集まっていた数人がぎよっとして見やる。コトネとマリルも同じ表情で俺を見ていた。

「これであいつも暫くは悪いことしないんじゃないかな」

脅しにはなっただろうと笑うと、理解が追いついたらしいコトネは笑った。

「あ、はははは、りよ、リヨウくん、あははははっ！周りの人すごいびっくりしてるよ〜」

「あいつと違ってやましくないから大丈夫。

さて、家まで送るよ。はい、負ぶさって」

遠慮するコトネを背負い家で治療し終わった頃には、もう空は茜色に染まり始めていた。

慣れないこと続きだった上にハードな出来事があったせいで、少々2人ともぐったり気味だ。それでもコトネは捻挫した足をテーピングで固定すると、ウツギ研究所へ向かって元気に歩き出した。

「本当に行くのか？家で休んでもいいんだよ」

「ありがと、大丈夫！犯人捕まえられなかったから、せめて報告くらいはしないとね」

俺に任せてしまえばいいのに、真面目と言つか頑固と言つか。

「せめてゆっくり歩けよ」

「りるう」

心配するマリルと俺に、コトネは気丈に笑う。

「だーいじょうぶだつて！ちゃんとテーピングしたもん」

「治ったわけじゃないんだからさ。そうだ、無理したらお姫様だったこな」

「え、ええっ!？」

お、赤くなつたら。やっぱり懂れるのかね、お姫様だったって。

「や、むりむりむり。私重いもん！」

「俺の筋力なめてもらっちゃ困るね。今すぐ証明しようか？コトネちゃんくらい軽いって」

「けっこーです！もう、からかっているでしょ、やめてよねリョウくん！」

冗談めかせたとは言え心配なのは本心だ。今はコトネの頑張りを尊重するけど、辛そうだったら問答無用で抱き上げよう。

ふと見上げた空の端は赤くなり始めていて、唐突に不安がよぎった。ヒビキは無事にライバルと遭遇できただろうか。ライバルは森の中へ踏み行ってしまったが、46番道路の方に行くにはレベル不足だから結局はヨシノシティへ向かうしかないはずだけど、泊まりがけで往復するような距離をヒビキが今日中に帰ってこられるかは解らない。

たしかライバルとの遭遇場所はヨシノシティと29番道路の境目、ウツギ博士からの呼び出しで急いで帰宅する道すがらだったよな。

「お邪魔しまーす」

埒もないことを考えている内にウツギ研究所へ到着していた。そしてインターフォンもノックも無しにどうどうと入ってくコトネとマリルに面喰らってしまった。

あー、そっぴや博士の手伝いしてるんだっけ、第2の家みたいに入り浸ってるのかもしれないな。そうじゃなくても田舎のじいちゃん家みたいに、気付いたら縁側で知らない人が日向ぼっこしてる、なあって防犯意識もなにもあったもんじゃない風潮なのかもしれない……なんにせよ、こんなだからワニノコ盗まれちゃったんじゃないだろうか。

「ん？」

「あ、警察」

「犯人は現場に戻るといふ……つまり犯人は君!？」

並んだ書棚や機材の奥、ウツギ博士と助手とヒビキを相手に警官が

迷推理披露の真つ最中だった。オイオイ、三人ともぽかんとしちや
つてるぜ、警察官さんよ。
けれどその空気に気付かないのか、警官はヒビキの腕を掴み連行す
る気満々だ。

「ちがうわ！犯人は赤毛の男の子よ！」

そこへ割って入ったのは大人じゃなくコトネで、マリルも抗議する
ようにぴよんぴよん跳ね回る。

「何！？じゃあ君が犯人か！」

ずびしいっと指さされたのは俺。ああうん、赤毛だけどさ。

「いや、俺じゃ」

「話は署で聞こう！」

素早く駆け寄り俺の腕を捕まえ、やっぱりしょっぴく気満々な警官。
空気も読めなきゃ話も聞かねえ奴だな！

「ちがうってば！目つきが悪くて」

「む、悪いな」

うん、つり目なのは認める。

「黒い服着てて」

「服か、どうにでもなるな」

ごもつとも。まあライバルはずっとあの服で通してたけどな。って
言うかそろそろ弁解しなきゃ。

「やはり犯人は君！」

「俺も犯人見てるんだけど」

「そりゃ自分の顔くらい毎朝見てるだろう。身だしなみはエチケツトだからな」

「そうじゃないってば！」

「待って、僕ヨシノシティの近くで犯人に会ってる！」

「またもや割って入ってくれたのは子供のヒビキだった。大人2人は後ろで不安そうに見守ってる。しっかりしようぜ大人〜！」

「何!？」

「赤毛で目つきが悪くて黒い服を着てワニノコを連れてる男の子に30番道路でバトルを挑まれたんだ。背は僕くらいだった」

「私が見たのもその子だわ！」

「コトネちゃんを突き飛ばして逃げたんだ。それにそいつ、午前中にウツギ研究所を覗いてたよ」

「白々と証言に加わる。ヒビキも無事ライバルに会えたみたいだし、疑われちゃ適わないから協力してやるうじゃないの。」

「本当かい、リヨウくん！」

「はい。あの時に言っておけばよかったですね。すみません」

「ちよーっと良心が痛むけど、一応事実しか言っていない。つかストーリー変える勇気はないから報告しなかったって言ったら病院戻されそうだし、ま、細けえ事は気にすんなという事でひとつ。」

「いや、いいんだ、こんなことになるなんて予想できなくて当たり前だ。仕方ないよ」

「ふむ、これだけ目撃証言があればどうにかなりそうだな。他に何か情報はあるかい？」

「あ、名前見ました。」

「見た？」

「はい、トレーナーカードを落としたから。あいつの名前はシルバ―です」

「シルバ―、か。わかった、ご協力ありがとう！では本官はモンタージユを作るのでこれで」

「あ…」

何か言いたそうなウツギ博士に気付かないまま、警官は慌ただしく去っていった。

「被害届け出していないのに…」

「まじっすか」

ヒビキとコトネは意味が解らないようだったが、俺と助手は呆れていた。

被害届けがなきゃ捜査してもしようがないだろうに、なんなんだあの警官。慌てん坊か。

「はあ、大変なことになった…」

「本当に心配ですね。せめて売り払われてなきゃいいんですが…」

「え？」

「売り払う？」

ぎょつとしたヒビキと俺とは違い、コトネとウツギ博士は顔色を変えた。コトネは青ざめたが、博士の顔には何故かシマツタと書いてあった。

「どづいつ事ですか？」

「いや、ヒビキくんがバトルしたならその心配はないと思うんだけどね」

口ごもる博士を2人+1匹で見つめると、観念したように口を開く。

「君のヒノアラシと盗まれたワニノコ、それから残ったチコリータは貴重種なんだ。絶滅したわけではないけれど、野生は捕獲できない。」

ポケモン協会からしか手に入らない珍しい種なんだよ」

御三家はどの世代でも通信交換でしか手に入らない、生息域が不明な種だったけどそういう理由があったのか。

「昔はジョウトに多くいたけど、今はいないんだ。だからジョウトでも珍しいし、カントーや他の地方ではもっと珍しい」

ついでに言うなら技も種族値もなかなか良いからな、御三家。それに対人戦なら珍しいというだけでアドバンテージを取れる。所持者が少ないってことは情報が出回っていないってことだからだ。

情報は重要だ。例えば相手が草タイプだからと炎タイプを繰り出しても、相手が地面タイプの技を出してきて負ける場合がある。もしその草タイプが地面タイプの技を覚えると事前にわかっていたら、地面タイプの技を半減させる木の実をもたせたりと対策を打てるが、それにはまずそのポケモンの情報が出回っているのが前提になる。

だから珍しくて情報が十分出回っていないポケモンは勝率が上がる。この世界でそういう、ポケモンのデータベースがどれだけ充実してるかわからないが、攻略本もゲームの解析もない世界だ。俺の世界ほどお手軽に入手できるものじゃないと思う。

となれば御三家の需要はかなりあるはずだ。

「でもヒビキさんとバトルできたって事は、もうその子の手持ちだ
って事だ。」

その子はトレーナーなんだろう？ならもう自分のIDを登録して
いるはずだから、交換は出来ても売り払ったりはできないさ」

その説明で安心した俺と違ってヒビキたちは浮かない顔だ。当たり
前だよな、どんな目にあってるか解らないんだから。

でもライバル、いや、シルバーはあほの子だけど悪いやつじゃない
はずだ。チャンピオンロードまで手持ちを変えた事はなかったし、
ウツギ博士も最後にはシルバーを認めてワニノコを譲るらしいしな。
っていうか俺的には無事ストーリーが進んで一安心です。

今日はもう解散でいいだろう。さっきから片足に重心を寄せている
コトネも限界だろうし。

「コトネちゃん、もしかして足辛くないか？」

「んー、実はちょっと辛いかも」

「え？怪我してたのかい！？」

博士がわたわたとキヤスター付きの椅子を出してくれたけど、もう
帰るからとコトネは断った。辛いくせに自力で帰ろうとした怪我人
をやや強引に背負い、俺たち二人と一匹は日が落ちかけた外へ出る。
ヒビキはお使いが終わってないから居残りだ。

「痛いなら言わなきゃダメだよ、コトネちゃん」

「うー…ごめんなさい」

「頑張るのはいいけど、無理もほどほどにな。」

…しばらくは無理しないようにマリルも見張ってあげろよ？」

「りるー！」

まだまだ元気が有り余らせているらしくぴよんぴよん飛び跳ねるマリルが、若干表情を引き締めた。ゲームなら目をキラッとさせた、とメッセージが出そうだが、まんまるボディにくりくり愛らしい目のマリルじゃ迫力ゼロだ。っていうか可愛い。

「うっし、頑張れよマリル。コトネちゃんのボディカード役だからな」

「るっ?」

「ええ?」

きよとんと見上げたマリルと同じトーンの声をコトネが上げて笑いそうになった。ペットと飼い主は似てくるって言うし、ポケモンとトレーナーもそうなんだろう。そして多分今同じ表情なんだろうな。自分の想像で吹き出しそうになったが、努めて顔を引き締める。

「コトネちゃんを守り、お転婆を止める重要な役だぞ」

「りるっ!」

わかったとばかりにマリルはひときわおおきく跳ねた。

「ひどっ!そんなお転婆じゃないよ!」?

「泥棒にタックルがますような子はお転婆って言うんです」

「りるるりるる」

全くだと言わんばかりにマリルが頷く。まあ当のマリルもやんちゃっばいんだけどな。

「無理して怪我が悪化しないように見てあげるんだからな」

「りるっ!」

「うう悔しいけど言い返せない！」

怪我を悪化させたことがあるのか、コトネは背中であんなに唸った。送り届けて後をやる気満々なマリル任せ、研究所へ引き返す途中。道の向こうからヒビキが歩いて来るのが見えた。

ひょいと手を上げるとヒビキも同じように手を上げる。

「お疲れさま」

「うん、うん？」

あ、しまった。子供に対してお疲れ様はないか。

「お使いに泥棒とのバトル、お疲れ様って。ん、あれ？ヒノアラシどうしたんだ？」

ヒノアラシもお疲れ様と言おうとして、ヒビキの足元でなんだかふらふらしているのに気付いた。

「んー？なんだろう、別に毒とかくらってないし…ヒノノ、大丈夫？」

びくつとしたヒノアラシはどこか緩慢な仕草でこっくりと頷いた。これはもしかただ眠いだけか？

「眠くなっちゃった？」

言いながら抱き上げたヒビキの腕にヒノアラシは大人しく収まる。

「ボールに戻るかい？」

「ひよ」

舌つ足らずに否定したヒノアラシは1日ですいぶん懐いたらしく、甘えるようにヒビキにすり寄った。その背中がぼんぼんと軽く叩かれる。

「抱っこしててあげるから、このまま眠っていいよ」

くありとあくびをしたヒノアラシはヒビキに寄りかかって動かなくなった。元々糸目なので分かり辛いのが、たぶん眠り始めたんだろう。

「いっぱい歩って疲れちゃったんだな」

「初めてのバトルもしたしね」

「今日は2人とも良く眠れそうだな」

「それはリヨウくんもだろ？コトネとマリル、無駄に元気だから疲れたんじゃない？」

遠慮もないけど悪意もない物言い。素直なヒビキに社交辞令は不要だろう。

「泥棒にタツクル仕掛けとは思わなかったよ」

「それで怪我したの!？」

予想外だったらしく酷く驚かれた。

「あゝ、あいつは…」

「リヨウくんは大丈夫？」

あんのお馬鹿、と顔に書いてあるのは、心配からからくる怒りのためだろう。ヒビキとコトネは仲の良い幼なじみみたいだから、家族みたいな感覚なのかもしれない。

一応フォロー入れとくか。

「なんともないよ、コトネちゃんが頑張ってくれたからさ。俺がもう少し頼りになればよかったんだけど、ごめんな」

「ううん、コトネの怪我を気遣ってくれただけで十分だよ。」

あいつ頑張りすぎるところがあるから、気にかけてくれる人がそばにいるだけで頼もしいよ」

…なんたる10歳児。俺が頼りないからコトネに無理させてしまった、不可抗力だと思わせようとしたら、俺が励まされてしまうとは。ヒビキは度量が広いんだなあ。

「そう言っただけで貰えるとは有り難いよ。なあ、今回のことはあんまり怒ってやらないでくれないか」

「ん、ん〜？」

「さらわれたワニノコとポケモンを持たない俺のことを考えたら、

コトネちゃんは頑張らざるおえなかったと思うんだ」

「コトネのことだからただの無鉄砲な気もするけど…」

あはは、確かに戦えるポケモンを持たない俺を置いて突っ走って行ったあたりは、とても冷静とは言えないだろうな。でも怪我した事で本人も反省してるだろう。

「ん、わかった。たまには何にも言わない方が、あいつもこたえるかもだし」

「…失礼かもしれないけど」

「ん？」

「ヒビキくんって、結構しっかりしてるんだな」

お見逸れしました。まさかそこまで考えてるとは。10歳児の思考

とは思えないよ。

「えへへ、もつと褒めていいんだよ？」

「うん、偉いよ。優しいし尊敬するなあ」

「ありがとー！」

今日は色々あったけど、みんな無事で良かった」

上機嫌のヒビキが言うみんなの中には俺も入ってるんだろう。そう思ったなら自然と笑顔が浮かんだ。

「ほんとだな。そうだ、ヒビキくんは無事にお使い終わったのか？」

「うん。博士に渡してきたよ」

そこでふいと視線が泳ぎ、何かを言い淀んだ。

「何か問題あったのか？」

「ううん、いや、うん。大丈夫、なんでもない。」

吹っ切るように笑うヒビキの悩み事、思い当たらないワケがない。

「ワニノコの事？」

言い当てられるとは思ってなかったのか、きよんとしたヒビキは心底不思議そうに言った。

「リョウくんってエスパー？」

「エスパーだったら泥棒も取り逃がさないよ」

「そうだよ、雑巾みたいに捻れるよね」

「内臓でるまでな。ってそれじゃ俺が犯罪者じゃねえか！」

あははと笑う様子は屈託なくて可愛いのに何故こつも怖い発言できるんだろつか。いや、屈託ないからこそ、この発言なのか？

「あんま気を落とすなよ？」

「んー。わかってるつもりだけど、ワニノコに悪いことしたかなって」

「しょうがないよ、知らなかったんだから。それにまだチャンスはあるはずだ」

「え？」

なんたつてシルバーはヒビキのライバルだからな。チャンピオンロードまで強制的に腐れ縁だ。

なんて言うわけにはいかないのでもっともらしい説明をする。

「知ってるか？ワニノコつて強くなるんだ。強いポケモンを持ったトレーナーは上を目指すと思わないか？」

「…そう言えば弱いやつに興味はないって言ってた。負けた直後に」

うん、知ってた、知ってたけど吹いてしまった。あああ、ほんとあほの子なんだなシルバー！

「あほだな」

「あほだった」

一度しか会ってないヒビキにあほと断言されるライバルつて。グリーンといいシルバーといい、ライバルはアホの法則でもあるんだろつか。

「まあそんなあほの子が強い力を持つたら目指すだろ、頂点」

「そっか、ポケモンリーグ！」

「そぞ。ヒビキくんも目指すんだろ？」
「うん！あほじゃないけどもちろん」

にこーっと笑う未来のチャンピオン。どう見ても子犬系でちょっとずれてたまに辛口なあほの子だけど、天才となんとやらは紙一重だっけ言っしこれでいいんだろ。

「なら当然必要になるものがある」

「ジムバツジだね。じゃあ旅をすればまた会うかもしれないんだ」
「そゆこと。さて、そろそろ解散しようか」

ヒビキとはもつと話したい気がしたけど、今日は互いに疲労が濃腕の中のヒノアラシなんかすっかり夢の中で、ぴいぴい鼻息が聞こえる。明日から本格的に旅立つわけだし、もう帰って休むべきだろう。

「そうだね、僕も眠くなってきちゃった。

「じゃあまた明日。おやすみ」

「ああ、ゆっくり休めよ。じゃあな」

こうしてまだ旅も始まってないのに波乱すぎる一日は幕を閉じた。

すっかり1日を終えた気分です。ウツギ研究所へ戻ると、ウツギ博士が1人で待っていた。ちなみにインターフォンを鳴らしたら、大声で入っていいよと返ってきた。盗みに入られたばかりだということに防犯意識はないのか、防犯意識は。

「お…えーつと」

とっさにお疲れ様ですと言いきりになって口ごもってしまった。子供らしい挨拶ってなんだ、記憶が遠すぎてわかんねえ。

「お疲れ様、リョウくん。悪いけどもう少し付き合ってもらって良いかい？」

「お疲れ様です。俺なら全然大丈夫ですよ」

結局お疲れ様って言っちゃったよ。悩んだ意味ねえー。ちよつと幸先に不安を覚えつつ着いて行くと、御三家のボールがあったマシンの前へと移動した。あれ？確かあほの子盗難事件後ってガラスケースに入れられてるはずじゃなかったっけ。

「本当は明日選んでもらうはずだったんだけどね。この子を貰って欲しい」

「え」

博士がボールを軽く放れば、当然チコリータが出てくる。あ、そっか、俺に渡したら残らないもん。盗難防止なんざ今更意味ないか。見上げられて咄嗟に笑顔を作ったが、チコリータは澄ました顔で興味なさげにそっぽを向いてしまった。

「最後の一体になってしまったけど、良いポケモンだよ」

「あ、いえ、俺、最初からチコリータを希望してたんで嬉しいんですけど……いいんですか？」

「なにがだい？」

「てつきり俺もお使いがあるのかと」

ゲームならチュートリアル以上の意味はないだろうけど、これは現実だ。適性とか相性とか見なくていいんだろうか。

「ん？ああ、あはははは。ヒビキくんはね、トレーナーとしてまったくの初心者だっただから。

君には必要ないだろう？」

とっさにホウオウイベント前後のことを思い出した。明言こそしてはいなかったが、博士は全て承知の上でヒビキに卵を託した人だ。いったい俺の事もどこまで知ってるのやら。

…ま、どうでもいいか。何が変わる訳でもなし。

「知識だけですけどね」

「うん、でもそれは大事だ。世話の仕方とかは教わったかい？」

「はい、コトネちゃんがしっかり教えてくれました」

「じゃあこのボールにトレーナーカードを翳して」

博士はチコリータを戻してボールを差し出してきた。言われた通りにすると、静寂の中でジジ、ジ、と微かな音がした。10秒ほどしてピピ、と電子音が鳴る。

もういいよと言われ、俺はトレーナーカードを仕舞いながら疑問を口にした。

「もしかして今ので親IDを変更したんですか？」
「そうだよ」

変更って、親IDの変更は不可なんじゃないのか？

「でも少し間違ってる。変更じゃなくて登録したんだ」
「登録ですか」

はい、と博士がボールを渡してくれた。そのボールを放ると、当然ながらチコリータが出てくる。まだトレーナーになつた実感は湧かないけど、自分のポケモンって嬉しいな。自然と顔が緩んでしまう。

「そう。どう言えば良いかな…僕はトレーナーじゃないからね、親IDは持ってないんだ。だからさっきまでのチコリータは、ボールに入っただけだけど、トレーナーのポケモンと言うよりはペットに近かった。この研究所で飼ってたようなものだよ」

黙って拝聴してる間に足元へチコリータが寄ってきてじつと見つめてくる。意識して取り繕った笑顔を向けたが無反応だ。

「ああ、そうだ。ニックネームをつけるかい？種族名の上でも問題ないけど」

「付けたいです。今すぐじゃないとダメですか？」

「うん、親IDを登録してから5分を過ぎると自動的に種族名になるよ」

タイムリミットあるなんて初耳だ。なんか焦るなあ。

「えっと、あー…そらまめ」

「ちこっ！？」

が、と本人、本ポケモンって言うのか？あーややこしいな。本人でいいか。本人はかなりショックを受けたっぽい。

そうだよな、ゲームじゃないんだから本人の意志も尊重しないとなしゃがんでそつと手を伸ばす。警戒はされてるっぽいけど、威嚇されないのをこれ幸いに大きな葉の生えた頭を撫でてみた。おー、植物の葉みたいにつるつとした感触なんだなあ。

気持ち良さそうに目を閉じたチコリータに、次の候補を上げてみる。

「アスパラ」

「ちこっ！？」

ああうん、やだよな。さっきのと大差ねえもんな。あーでも良いのがうかばねえええ。

「ほうれんそ、はっぱ、ようりよく、グリーン、ピース、おひたし、ハーブ、まめこ、みどりこ、まっちゃん、うじちゃん、りよくちゃん、いえもん、あやたか、ティハ」

「ぢっこりいいい！」

「あと3分くらいだよー」

ごるあと言わんばかりに葉っぱでぺしつと手を払われた。全部だめっすか。あーくっそ焦る！

「あらた、しんめ、はっぱたい、まめぞう、にまめ、いりまめ、えんどう、きぬさや、やさえんど、キャベツ、レタス、くさむら、ちこたん、べいたま、めがしやま…うっーん」

「あはは、あと2分だよ」

あまりな候補にチコリータは拗ねてそっぽを向いてしまった。ゲー

△中に使った名前全滅か…

「そらまめ、可愛いと思うんだけど。ダメ？」

「うんとこっちを見もしない。そらまめ可愛いのはなあ。

「リョウくん、そのチコリータはメスだよ」

「女の子？珍しいんですね」

撫でようとしたら葉っぱで手を払われた。このままじゃ最悪のファーストコンタクトだ。どうにか挽回せねばなるまい！

「おちゃ、ぐりこ、はなこ、かおるこ、かおり、つぼみ」

ちらつとこっち見た！半眼だったけどこっち見た！可愛い名前がいのか。女の子だもんな。

「ようこ、れいこ、みつこ、はなこ、って二回目か」

「一分きったよ」

「え〜…う〜…」

マズイマズイ、あすばらとそらまめとめがしやまで頭いっぱいになってきた。可愛い名前、可愛い名前だっつっつ！

「え〜…ふたば、わかば、みのり、ふじこ、さくら、なでしこ」

こちらを向いたけれどまだOKは出ない。あかーん、もうむりぽ。

「う〜つと、かぐら、ことは、……ほのか……かのこ……はづき…

…わかな」

「ちっこー！」

ぴん、と葉っぱが立ち上がる。

「わかな？わかながいいのか？」

「ちっこりー」

頷きを受けて、小さなタッチ画面に急いで入力する。えーっと、わ、わ、『ワ』、『カ』、『ナ』

最後のナを入力した瞬間、おわりを押してないのに画面が切り替わった。

「あつぶなっ！ぎりぎりセーフっ」

とってもタイムボンバーな気分だ。ものすごい達成感。

ちゃんと入力できて良かった。ワカとかでタイムアップしてたらやばかったよ。なんか殿っぽいもんな。

「うし、今日からお前はワカナだ。あ、挨拶まだだったな。俺はリヨウ。今日からよろしくな」

「ちっこ」

葉っぱを揺らして嬉しげに鳴くチコリータをなでようとしたら、葉っぱで手を叩き落とされた。機嫌なおしてくれたんじゃないのか？

「その子は意地っ張りなんだよ。さっき拗ねさせちゃったから、しばらく触れらせないともりなのかもしれないね」

「そうなんですか。可愛いなあ」

女の子で意地っ張りとか最終兵器彼女すぎる。戦力になって性格的

も可愛いなんて出来すぎだろ。それにツンデレに苦労は付き物だ。デレてくれる日を楽しみにしつつツンを堪能しよう。

「リョウくん、これはヒビキくんにもお願いしてるんだけど、君にも手持ちをなるべく連れ歩って欲しいんだ。」

「はい。研究、ですか」

うっかり研究ですよねと断定しそうになって焦った。知らないふりしとかないな。

「うん。コトネちゃんがマリルと仲良くしているのを見てね。知ってるかい？ポケモンの中には懐いてないと進化しない種も居るんだ」

わかります、エーフィやブラッキーのことですね。

「モンスターボールが普及する前は連れ歩くのが普通だったと言うし、進化以外にもどんな影響が出るのか興味があるんだ」

「わかりました。」

「じゃあ定期的にレポートとか書いた方がいいですか？」

「そうだね。レポート、とまでは言わないけど、知りたいことを表にして渡すから記録してくれるかい」

うーん新システム、いやミッション？ウツギ博士ってポケモン渡したらそれつきり放置で、おまけに研究の結論が「ポケモンとひとのかんけいには おわりがないってことさ！」だったから、思わず作文乙！と突っ込んだものだけど、やる気はちゃんとあったんだなま、研究が実るかは実施するまで判らないのかもしれないし、作文並の結論しかでない場合もあるのかもしれないけど、作文人同士の関係にだって終わりはないんだからな。

「さ、そろそろ帰ろうか。」

うちの奥さんが夕飯を用意して待ってるからね」

「はい、お邪魔します。あ、そういえばさっきモンスターボールについて聞きそびれちゃいましたけど……」

「モンスターボール？」

いじっぱりチコリータがついて来てる事を確認しつつ、出口に向かいがてら聞いてみた。が、出口についても思い出せないみたいだった。ま、重要でもないからいいんだけど。

5・5 閑話1、モンスターボールの話（前書き）

モンスターボールの設定説明です。ウツギ博士と主人公がひたすらモンスターボールの仕様について会話してます。読み飛ばして頂いて問題ない話です。

設定集みたいなもの、その1です。

5・5 閑話1、モンスターボールの話

「えーっと、ボールのIDを書き換えるんじゃなく登録したって…」
「あ、あーあ、あれか。」

あれはね、トレーナーカードが関係してるんだ。どう説明したらいいかな…

まず、ポケモンがどういう原理で捕まるか知ってるかい？」

きい、と軽く開かれた扉の外はすっかり日の暮れて、昼間は心地よかつた潮風が肌寒く感じる。それを気にした風もなく、博士はシャツに白衣だけの軽装でゆったりと歩み出す。

「わかりません」

「ポケモンは弱ると小さくなって物陰に隠れるという習性がある」

「小さくって、もしかしてモンスターボールに入れるくらいですか？」

「そう。その弱った時の本能を利用しているんだ。といっても戦闘程度では小さくならないから、ボールにポケモンを小さくする仕掛けが施してある。」

そしてその仕掛けはポケモンが小さくなる、というところからヒントを得ている」

外壁にそって設けられたら階段を博士に倣って静かに上がる。上がればすぐに玄関があるが、話の着地点は見えない。あと数十秒で終わるのか、この話。

「さつきポケモンは弱ると小さくなると言っただけど、本来なら肉体を持つものが数倍も小さく縮むことは出来ない。現に人間や他の動物にはまねできない芸等だ。」

それをなぜポケモンだけができると言つと、ポケモンが自分の体を電子のデータに変換できる生き物だからだよ」

「へええ…あ、だからパソコンでBOXに預けられるんですね」

ゲームではないこの現実の世界で生物をパソコンに送れる、という事実に回答を得られて俺はいたく納得した。

いやまあ、生物が電子データに変換されるって前提自体は正直わけわかめだけど、それは聞かないでおこう。もし相対性理論とか量子力学とか論文を引き合いに出されても、俺は絶対に理解できないからなあ。

「そう、それは応用だね。」

電子情報だから圧縮もできるし元にももどせる。

ただどいくらデータに変換できると言つても、元気な時はデータになる必要がない。小さくなる必要がなきゃ、モンスターボールに入る必要もない。それをボールに入れるためには、データへ変換するように外側から働きかけるなければいけない。

だからボールにはそのためのプログラムがプログラミングされているんだ。

ちなみに種族事にデータ変換するプログラムは違っているんだよ」

踊場に着いてしまうと博士は此方を振り返った。どうやらここで話してしまつつもりらしい。

「そい言えばコトネちゃんが言つてました。ボールに情報を書き込むことでそのボールにポケモンを拘束するって。

もしかしてあの捕獲までの間は、モンスターボールが種族を判別し、それに合ったプログラムでポケモンをデータに変換してる時間、てことですか？」

「そうだね」

うおー、なんとというオーバーテクノロジー。
てゆーか、電子のデータになれるって、デジモンみたいだなー。デ
ジモンのが後だけどさ。

「で、捕獲しデータへ変換されたポケモンは、その時にいくつかの
抑止力を課せられる。親の言うことを聞くこと、住処がボールにな
ることなんかだね。

けれどこの抑止力も含め、データに変換すると言うことは本来な
ら不自然な事なんだ」

「あの、話を聞いてると、まるで、洗脳、ですね」

ゲームなら気にならない。そう言う仕様だからと思うだけだ。でも
この世界ではポケモンは生きていて、勝手に閉じ込めるのはどうな
んだろう。

いや、現実だってペットショップで動物が売り買いされてるけど、
うーん…

「うーん、洗脳とは少し違うんだよ。

ポケモンは人よりずっと強い力を持つてる。安全に一緒に居るた
めにはどうしだって抑止力が必要になる。

捕獲は、そのための制約をお願いする行為なんだ」

「お願い、ですか？」

「うん。戦闘によって力を示し、ボールを投げることで制約を頼む。
ポケモンはそれを拒んで逃げることもできる。

ボールの捕縛率は絶対じゃないだろう？」

なるほど、モンスターボールは猛犬に着ける首輪代わりで、それを
付けて飼われるかどうかの選択の余地はポケモン側にもあるのか。

「さっきの続きだ。ポケモンの本能を利用してボールに収めていると言っただけ、実は現存するポケモンの半分以上は死にそうになっても縮んだりしないとされている。この研究は進んでないから仮説にすぎないけど、世代が進むごとに本能が薄れてるのではないかとされているんだ。」

つまり電子データになれる素質を持つことと実際にデータになることはイコールじゃない」

「あー…例えばいくら野球選手になれる素質があっても必ずなれる保証はない、みたいな感じですか」

自分で言ってもよくわからん。

「ちょっとちがうね。うーん…進化の過程で縮む機能が退化した、と言われてるんだよ。」

そうだなあ、人が猿から進化したという説は知っているかい？」

猿がペキン原人になりクロマニヨンでホモサピエンスな横スクロール画像が脳裏に浮かぶ。中学の授業だったっけか。つか、ポケモンの世界でも猿いるんだ。思考は逸れまくりだが頷く。

「人は進化の過程で色んな物が退化していった。わかりやすい例で言えば足だね。」

猿の足は木を掴むことができるほど器用だけど、人間はできなくなってる。森ではなく大地で暮らすうちに歩くことへ特化した結果、使わなくなった指先の器用さが損なわれたわけだね」

「なるほど」

そっぴや人間の足の小指の関節って人によって数が違っって聞いたことがある。だいたい人は歩くために最低限必要と思われる1つ

に退化してるけど、たまに2つある人がいるそうだ。

「話を戻すよ。さっき縮む本能が退化したと言ったけど、失われた訳じゃない。人の足が退化しても無くならないようにね。

意識して小さくなれないだけだから、外から働きかければ縮むことができる。

その縮む課程はさっきも少し言ったけど、データになり圧縮されるってことだ。そのデータ化されてる時にボールにデータを取り込み、同時にポケモンにも制約を課す。

その時、ボールを投げた人のトレーナーカードのIDが主人としてポケモンにもボールにも、変更不可の親IDとして認識される」

なんとなくわかったかなあ。

「だから主人の命令を聞くようになるけど、他人から貰ったポケモンはジムバッジがないと聞かなくなる。

これは捕獲した時に登録された親IDを持つ人間の言うことを聞くように制約がかけられている事と、盗難防止のために情報の上書きができない事、そしてポケモンの気持ちに起因している」

「気持ち、ですか？」

「うん。今チコリータが拗ねてるように、いくら言うことを聞くように制約がかけられていても、ポケモンにはちゃんと意志がある。

捕まる時だってそうだ、戦って自分が認めた人間だからこそ捕まろうと思う。

「じゃなかったら逃げることだってできるんだからね」

「ああ、つまり交換した人間の命令は制約だから聞くけど、自分が認めて付いた訳じゃないから、実力がないと判断したら言うことを聞かなくなるんですね」

「そう。そしてその目安となるのがジムバッジだ。」

ジムバッジには制約のレベルを引き上げるプログラムが組み込まれている」

へえ、そんな仕掛けがあったのか。そういや初代だと能力を引き上げる効果もあつたっけなあ。

「ん？あれ、じゃあバッジを獲得しても、実力を認めて従うって訳じゃなくて、制約だから従うだけなんですか？」

「そうとも言い切れないんだよね。」

バッジがなくても信頼関係が築かれていれば言うこと聞いてくれたりするし、性格によっては認めてなくても従ったりする。その逆もあるから難しい質問なんだ」

「ふうん…あくまで目安なんですね」

ゲームでもなつき度と命令できる権限がイコールではなかったけれど、生きてるならなおさら思い通りにはいかないよな。ゲームのようになれることと出来ないことがはっきりしてるワケないんだ。

「そうだね。さて、ここでようやくトレーナーカードの話に戻るよ。制約をかけるために欠かせない親IDはトレーナーカードに記録されていて、通常は捕獲が成功すると同時に書き込まれる。」

ここで問題だ。僕みたいなトレーナーカードを持たない人間は捕獲できると思う？」

「…制約がかかるのが捕獲の途中なら、無理じゃないでしょうか。エラーが起こりそうですね」

「そう、親IDがないと制約がかけられないから必ず失敗してしまう。そこでトレーナーカードとは別に、研究者などに与えられているマスターカードっていうのを使うんだ。」

トレーナーカードは親IDを記録した身分証明みたいなものだけど、マスターカードは全く違うものなんだ。モンスターボールのプ

プログラムの一部にアクセスしてプログラムをいじれる、言わばマスターキーみたいなものなんだよ。

だから目的別に制約の度合いや親IDの登録の不可を設定できる。そして今回盗まれたワニノコを含めた3体は君とヒビキくんに渡す予定だったから、親IDの登録を許可していたんだ」

「ああ、それで変更も上書きもできないモンスターボールに親IDを登録できたんですね」

「そういう事だね」

「…ん？あれ？じゃあ、盗まれたワニノコは…」

「うーん、そうなんだよね…泥棒が交換してくれるとも思えないし、奪えば僕らが泥棒になっちゃうからねえ。困ったね」

軽っ！そんなんでいいのかよ。

「一応、登録を取り消す方法はあるけど、ま、泥棒が捕まってから考えるしかないね」

ふと思ったが、ここまで管理体制が整っているのなら、追跡は可能じゃないだろうか。例えばポケモンセンターを利用したり、ジョウト以外の地域へ行くこうとしたなら、どうしたってトレーナーカードを使わなきゃいけない。あ、でも偽造カードを使用している可能性もあるか。うーん、シルバーと言う名前も本名じゃないのかもしれないな。

「…とにかく、見かけたらなるべく取り戻す努力はしますね」

「うん、よろしく頼むよ」

俺にストーリーを変える気はない。従って取り戻す気もない。とんだ茶番だと思いつつも必要なだと自分に言い聞かせる。病院に戻る気はないんだ。

ウツギ家にお世話になった翌朝。

またいらっしやい、兄ちゃんまたポケモンの話しような！なんて有り難い言葉をいただき、何度も頭を下げながら外へ出た。社交辞令だとしても有り難いよ。

ウツギ博士は一足先に階下の研究所へ出勤している。連れ歩きレポート用のプログラムを準備しているはずだ。

「失礼しまーす。あ、おはようございます」

「はい、おはようございます」

「おはよー。ってなんで敬語？」

「いや、助手さんがいたから」

「ひのー」

「ちこ」

ヒノアラシが短い手をあげ、それに答えるようにチコリータが葉っぱを揺らす。挨拶が終わるとヒノアラシがチコリータを追いかけ始めた。テーブルやイスの間をちまちま抜けて楽しそうだ。

助手がいるのは当然として、ヒビキの存在にちよっとばかり面食らってしまった。トゲピーのタマゴイベントは確かキキョウだ。ここで会うとは思ってなかったよ。

「ヒビキくんはどうしたんだ？ウツギ博士に用事？」

なんかイベントあったっけ？

「ううん、リョウウくんに用事。昨日約束したじゃん」

あ、バトルの約束か。そういや今日っただけで、時間も場所も決めてなかったんだっけ。

「悪い、待たせちゃったな」

「うっん、ちょうど来たところだったよ。タイミングばっちり」

「なら良かった。次からは時間や場所きめとくか」

「そうだね。だったらポケギアの番号交換しようよ」

「おー。そーだな」

記念すべき登録第一トレーナーが主人公かあ。なんか豪勢な気分。手慣れた仕草で登録するヒビキと違い、俺がもたもたしてる間にウツギ博士が奥から顔を出した。

「リョウくん、準備できたよ。おや、ヒビキくんにヒノアラシじゃないか、おはよう。」

「そうだ、丁度良かった。2人ともおいで」

二人と二匹でそろそろ奥へ向かうと、ポケギアに記録用プログラムをインストールしてくれた。レベルと種族の欄に幾つかのチェック項目、それから備考欄のついた簡易なものは、その日連れ歩いた子の記録をするものだ。

因みにデータを送るのは週一間隔で良いらしい。ここで驚きの事実が発覚した。ポケギアにはメールと写メの機能がついていたのだ。教えてくれてありがとう、ヒビキに博士。ゲームじゃメールついでやボールに付けるものだから、危うく知らずに旅立つ所だったよ。

ウツギ研究所の前、芝が途切れた固い地面の上で俺たちは対峙していた。少し離れた場所にはウツギ博士、助手、ウツギ夫人に息子さん、それからコトネにヒビキのお母さんまでいる。バトルを見られるのは恥ずかしいんだけど、ほぼ負けが確定しているから気負いはあまりない。

チコリータは頼もしいことにやる気十分で頭の葉をぶんぶん振り回し、レベルでも相性でも有利なヒノアラシの方がちよつと引け腰だった。研究所仲間とバトルすることへの戸惑いか、ウツギ研究所でのチコリータとヒノアラシの力関係か。引つ込み思案なほど照れ屋のヒノアラシはどっちも、いじっぱりチコリータは後者だろうか。なんて考えてる俺もチコリータには逆らえていない。用意した朝ご飯は食べてくれたしバトルに出てくれるあたり決定的に嫌われたわけじゃないんだらうけど、撫でたり抱き上げたりはさせて貰ってない。

少しずつでもいいから距離を縮められるよう、頑張らないとなあ。

ぼんやりしているとウツギ博士の息子さんが一步前に出た。きらきらした顔で審判を買って出てくれたので頼んだのだ。駆け出し同士の野良試合に審判もなにもないけど、あんなに嬉しそうにされると頼んで良かったと思う。

「ルールは1対1、どちらかが倒れるまで」

張り上げられた幼い声は意外と様になってる。ポケモンバトル番組が好きだと言っていたし、普段からごっこ遊びでもしてるのだらうか。

「準備はいいですか？」

「うん、いいよ」

「いけるか、ワカナ？」
「ちっこ！」

任せとけ！とばかりに威勢のいい返事が響いたのを合図に、少年が手を振り下ろした。

「バトル開始！」
「ワカナ、体当たりだ！」
「こっちも体当たり！」

動き出したチコリータから少しだけ目をそらしてポケギアを確認する。ヒノアラシのレベルは9。火の粉を出されたらひとたまりもなかったが、ひとまずセーフだ。

しかし走り出したのはチコリータの方が先だったというのにあつと言う間に距離を詰められて、うまく反応できない間に体当たりされてしまう。やっぱり素早さの種族値はひっくり返せないんだな。

ボールに表示された体力がぐぐつと減り、ほぼ半分持つてかれた。努力値無振りではぼ2倍のレベル差があるにしては良く耐えたなあ。

「がんばれワカナ、体当たり仕返してやれ！」
「ちっこ！」

チコリータの攻撃力はさほど高くないが、防御やHPが低めのヒノアラシ相手なら、急所に2回入れれば勝てる、かもしれない。ま、そうそう上手く行くわけないだろうけど。

なんて思ってたなら、一発入れられて逆に奮起したらしいチコリータがヒノアラシを吹っ飛ばすほどの体当たりを見せた。軽く宙を舞ったヒノアラシにあっけにとられつつもポケギアを確認すると、ヒノアラシの体力は半分近く削れている。

いくらヒノアラシの防御とHPが低かろうがこれだけのレベル差だ、

たぶん急所に入ったのだろう。

「ナイスワカナ！いいぞ、その調子だ！」

「ヒノノ、体当たり！」

「よけてくれ、ワカナ！」

体当たりの命中率は意外なことに100パーセントじゃない。変なところで外してくれる95パーセントだ。そしてなんと今回は95パーセントクオリティが発動し、見事にチコリータは攻撃をかわしてくれた。この勝負、わからなくなってきたか？

「いいぞ、その調子で体当たりだ！」

「ヒノノ！慌てずに受け止めて、体当たり仕返すんだ！」

かわした勢いを殺さずにチコリータが体当たりを繰り返す。体制を整えたヒノアラシは堂々と正面から受け止めた。そのせいか立て続けに急所という幸運は訪れず、ヒノアラシのHPはイエローゾーンに入って少しで止まった。

急所に入っても削りきれるか微妙なラインだ。急所で乱数一発つてところだろうか。運任せだな。

いや、今はそれよりもう一度攻撃の機会を得るために、再びの95パーセントクオリティを願うのが先だ。なんとという運ゲタイム。

「頼むワカナ、よけてくれ！」

「ひーのっ！」

べち！という音とともにチコリータが転がって、俺は思わず叫んだ。

「ワカナ！」

「…ち、ちこ…」

かろうじて立ち上がったチコリータは、聞いたことがないような弱々しさで鳴いた。これが瀕死か!?とポケギアを見やればリアル襷が発動していた。まさかの残りHP1だ。まだ終わってない!

「ワカナ、体当たりだ!いけるか?」

「ちっこー!」

馬鹿にすんじゃないわよ!とばかりにチコリータが走り出す。目を見開いたヒビキが慌てて指示を出した。

「煙幕だ、ヒノノ!」

「ひ、の〜」

いくら素早いヒノアラシでも立て続けに攻撃は繰り返せない。その前にチコリータが体当たりを決める。それを受け止めたヒノアラシのHPがレッドゾーンへ突入する。

普通に考えればこのターンでヒノアラシが体当たりを決めておしまいなのだが、ヒビキが命令を訂正する間もなくヒノアラシが煙幕を張ってしまう。

煙幕は命中を1ランク下げる技。この状態だと命中100パーセントの技は75パーセントになる。単純に考えて、今の体当たりの命中率は70パーセントくらいか?低めだけどやるべきことは一つしかない。

「うつすらと影が見えてるところへ、迷わず体当たりするんだ!」

「ちっこー!」

力強くチコリータが大地を蹴りつける。煙幕を抜けて一直線に突っ

込んで行く。

しかし聞こえてきたのはヒビキの声だった。

「ヒノノ、体当たりだ」

薄れて行く煙幕の中、どつとぶつかり合うが聞こえた。

ポケギアを確認するまでもない。煙幕が晴れるのを待たずに踏み入ると、薄れゆく煙幕の中でチコリータが倒れていた。

「ワカナ、大丈夫か？」

気絶したらしく返事がない。口元に手をやると息はしている。モンスターボールに戻すのは気が引けて、俺はそつとチコリータを抱き上げた。

「あ、このバトル、ヒビキさんの勝ち！」

少年がヒビキ側の手を上げた。審判頼んだのすっかり忘れてた。

「ありがとう、ヒノノ」

「ひのー」

「リヨウくん、チコリータは大丈夫？」

「のびちゃってるけど、これが瀕死状態なんだよな？」

「そうだよ。回復マシンに入らなくても少ししたら気がつくから、そんな顔しなくても大丈夫！」

いつの間にか近くに来ていたコトネが、元氣付けるように明るく笑う。

バトルに慣れていないポケモンは瀕死状態になると大抵は気を失うと聞いていたのに、いざ目の前になるとすごく不安になる。それは

ヒノアラシも一緒みたいで、ない首を懸命に伸ばしてチコリータの様子をうかがっていた。

「ウツギ博士が回復マシンの準備してくれてるから、行く?」

「ああ」

ウツギ博士にチコリータたちを任せ、俺たち3人+1匹は研究所の一角を占拠していた。研究員より部外者の数が多いって、よく考えたらとんだ零細研究所だよなあ。

「ヒビキくん」

「ん、なに?」

「バトルしてくれてありがとう。少し度胸がついた気がするよ」

ヒビキは人好きのする笑顔を見せる。

「どういたしまして。楽しかったよ!」

「俺だよ。ほぼ体当たりの応酬だったのにな」

「そうなんだけど、すごいハラハラしたよ!

リョウくんもワカナも初バトルだなんて思えないほど堂々としてたからかな?」

俺は中身と外見の年齢が釣り合っていないからそう見えるんだろうが、チコリータは意地っ張りだから弱みを見せないようにしたんじゃないだろうか。わかんないけど。

「ありがとう。でも勝負がいいところまでいったのは手加減してもらったからだよ」

最初に火の粉を使われてたら一撃で勝負が決まっていた。

炎技は草タイプのチコリータにとって弱点だからダメージ2倍、技とポケモンのタイプが一致するとダメージは1.5倍。ヒノアラシと火の粉は炎タイプだから、つまりダメージは3倍になって、しかも命中率は100パーセントだ。勝てる訳がない。

「え？手加減なんかしてないよ？」

「え？だって火の粉使わなかっただろ？」

「ひのこ？覚えてないよ？」

「まじで？」

「まじまじ」

…そついやさつき煙幕使ってたな。

「もしかしてヒノアラシが6レベルで覚えたの、煙幕？」

「うん、そーだよ」

「リョウくん、なにか勘違いしてたみたいね」

「そつみたい」

チコリータがレベル6で覚えるのは葉っぱカッターだ。てつきりヒノアラシも火の粉覚えてるとばかり…

なんとなく御三家は技を覚えるレベルとかその威力とか一緒だと思っただけ、よくよく考えたら進化のレベルとか違うし、同じレベルで同じような技を覚えるわけではないんだな。

バトル中で焦りがあったとは言え、うわあ、ハズカシイ。

「ねえ、リョウくんってどのレベルで技を覚えるとか把握してるの

「？」

「いや全然。自分が興味ある奴だけ、なんとなく知ってる程度」

初代からの復帰組である俺は10年のブランクがあつて『性別？ニ
ドラン だけじゃないの？性格？なにそれ萌要素？特性？いまい
ちわからん。努力値？あー、なんか不思議な飴とかでレベル上げる
よりちゃんと経験値入れた方が強くなるって噂があつたなあ』な人
だったのでネットで調べまくつた。

ついでにバトルフロンティアやバトルボにも手を出し始めて、結果、
自分が気になつたポケモンの種族値や技をなんとなく把握するに至
つたわけで。

「すごいね、僕さつぱりだよ」

「やつぱりリョウくんって勉強家なのね」

「そう？ありがとう」

ただの廃人（初級レベル）です。という言葉は飲み込んで、素直に
誉められておく。ヒビキとコトネは純粹に誉めてくれてるだろうか
らね。

「常識に疎いからわからないんだけど、技習得のレベルとか種族値
つてあんまり知られてないの？」

「種族値ってなに？」

しまった、もしかして概念そのものがないのか？

焦る俺とは対照的にのほほんと聞き返すヒビキ。言葉に詰まつた俺
に苦笑いのコトネが助け船を出してくれた。

「新米トレーナーの間ではあんまり知られてないと思うよ。ポケモ
ン塾に通つてたなら別だけど」

よかった、知られてはいるんだな。しかしポケモン塾って何教えて
るのか謎だったけど、そう言うこと教えてるのか。

「ま、実地で覚えるのが一番身につくだろうし、数値化されたもの
がすべてじゃないよな」

「そうよ！知識が全部じゃないの。ポケモンは生きてるんだもの、
数値だけじゃわからないのよ！」

「りるりるる！」

ぐっと拳をにぎったコトネは、まるで水を得た魚のように力説した。
マリルもびよんびよん飛び回る。やけに力が入ってて口を挟めない
秀囲気だ。廃人となにかあったのか？

見慣れた風景なのか、ヒビキは苦笑気味にそれを見ている。

「リヨウくん！」

「りる！」

「はい？」

あまりの力のこもり具合に、思わず姿勢を正してしまった。仰け反
らなかつた事を誉めてほしいくらい熱意がほとばしってる。

「私、リヨウくんを応援するわ！」

バトルの知識を持つこととポケモンを大事にすることは両立でき
るよね！」

うん、あの、えーっと…

「そうだね、やっぱり信頼関係がないとダメだと思うよ」

「だよね！愛情を持って育てれば自然と応えてくれるものだよね！」

「じゃなきゃ弱いつて言われてたポケモンがチャンピオンの手持ちなワケないもの」

「りる〜」

「弱いポケモン？HGSSのチャンピオンってチートドラゴン使いのワタルのはずだけど…」

「レッドさんのピカチュウとグリーンさんのイーブイ、本当に強いよな。」

「ポケモンのレベルの高さとトレーナーの腕前はもちろんだけど、あそこまで実力を発揮できるのは信頼関係があつてこそだつて思うよな」

「そーだよねヒビキくん！」

きらきらと瞳を輝かせた幼なじみーズがガシツと手を握り合つて、ねーっと小首を傾げ合う。その周りをマリルが跳ね回る。仲良きことは美しきかな。

「いや、どつちかつてーと可愛い。子犬が3匹じゃれ合つてるみたいだ。」

「つつかチャンピオンつて前と前々チャンピオンの事か。まあドラゴン族は全体的に優秀だから弱いわけないもんな。」

「グリーンつてイーブイ使つてたっけ？」

「え？知らないの？」

「コトネは心底驚いたらしく瞳がこぼれそうだ。ヒビキも驚いたようだけど、すぐにいつものこにこ笑顔に戻ると説明してくれた。」

「そうだよ、グリーンさんとレッドさんは最初のポケモンを進化させてないんだ。」

イーブイは進化するとステータスが変わるから、イーブイ用に調整したステータスで進化させるよりそのままにすることを選んだんだって」

「へええ…そのイーブイの性格と特性ってわかる？」

「覚えてる？」

「んーっとね、たしか、陽気な性格で、適応力だと思うけど」

イーブイの種族値は特攻より攻撃が高く、陽気な性格は素早さが上がって特攻が下がるという補正がかかる。適応力はポケモンのタイプと技タイプが一致してる場合に威力が2倍になる特性だ。

だから素早さと攻撃に努力値を振って強化したんだろう。努力値は進化しても受け継がれるから、進化先は限られる。

初代のイーブイの進化先のうちシャワーズとサンダーは特攻が高めだ。つまり特殊技向きのステータスだから却下。唯一攻撃が高く物理技向きのブースターは素早さが低い上に低威力の物理技しか覚えれない。イーブイだって素早くはないが、じたばたや恩返しをタイプ一致で撃てるのは強みだ。

…ん？初代ってじたばたと恩返しあったっけ？つうか特性なかったよな？性格もなかったよな？

世代を重ねるほどに変更されてきたゲームの仕様がどんな風に反映されているのかわからない。そういう知識をどこまで出していいのか。訊ねあぐねているとウツギ博士から声がかかった。回復が終わったらしい。

「いけない！けっこう話し込んでしまった。私そろそろ行くね！」

「うん、いつてらっしゃい」

「いつてきまーす。2人とも頑張っただね！」

「りる〜」

楽しそうなコトネとマリルは跳ねるように研究所を出て行く。元気
いっぱいだ。あれが若さというものだろうか。

なんとなく公園のベンチでお孫さんを眺めてるご高齢者さんな気分
になりつつ博士の元へ向かう。御三家のボールが置かれていた装置
が回復マシンでもあり、今はチコリータとヒノアラシが乗っていた。

「ひの〜」

「おかえり」

ヒビキは足にすりよるヒノアラシを撫でた。俺はとりあえずチコリ
ータに視線を合わせようとしゃがむ。そっぽを向かれてしまった。
でも今までと違って、ツンケンと言うより元気がない感じた。

「おかえり、ワカナ。痛いところとか、疲れたとかないか？」

ぷるぷると首を振るけど、心なしか頭の葉がしよげてるような…

「本当に大丈夫か？具合悪くないか？」

やはりぷるぷると首を振って否定するものの威勢が悪すぎる。そっ
と頭や背中を撫でてみてもされるがままだ。うん、間違いなくしよ
げてるね。負けたのがそんなにショックだったのか？

「ワカナ、大丈夫？」

「たぶんだけど、さっきの勝負が堪えてるのかも」

「ひのの」

「ぺちっ」

「「あ」「」

チコリータの顔を覗き込んだヒノアラシは頭の葉でペしりと打たれてしまった。軽くだったので痛くはないだろうが、びっくりしたのかヒノアラシは尻餅をついてしまっている。それに向かってちっこ！と一声鳴いて、チコリータはずんずん歩き出してしまった。って俺を置いて行くなよ！

「うわ、ごめんな、ヒノノ」

「ひのー」

大丈夫だよ、と言うように片手を上げて鳴いたヒノアラシに、気にした様子はない。慣れてんのかなー。

「ワカナ、ちょっと待って、一人で行っちゃだめだよ」

「あはは。負けた相手に心配されたのが悔しかったのかもね」

のほほんと笑うウツギ博士をチコリータが振り返って睨んだ。凶星だったんだな。

「ウツギ博士、色々とお世話になりました。慌ただしくてすみませんけど、出発します」

「どういたしまして。気を付けて行ってくるんだよ、リョウくん」

「はい、ありがとうございます。ヒビキくんもまたな！」

「うん、またね」

研究所の出入り口を開けられずにぷりぷりしてるチコリータの元へ急ぐと、はよ開けれ！とばかりに俺を見上げて来た。はいはいだいま喜んで！

チコリータは意気揚々と進む。時折立ち止まっては段差を飛び降りてみたり、草むらでごろごろしたり、木に止まった虫を眺めたりと興味の赴くままに行動している。立ち止まったチコリータの隣に立てば、そこには必ず発見があった。

「どうした、ワカナ？」

「ちこー」

道の端、木々の合間を覗いていたチコリータは、視線の先へ首もとから蔓を伸ばした。緑の葉と赤茶の蔦が絡む茂みから出てきた蔓の先には、赤く小さな木の実がある。

「いいもん見つけたな、木苺かな？」

「ちこー」

ふんふん匂いをかいだチコリータはそれを俺に差し出してきた。

「え？くれるの？」

「ちこっ」

あれ？ものくれるようになるのって、もっと懐き度が上がってからじゃなかったっけ？しかも木苺なんてなかったよな。つうかまず木苺の存在にびっくりだ。苺モチーフの木の実あるから、てっきり存在しないのかと思ってた。

「ちこー」

「ありがとう、ワカナ」

「ちこっ」

頷いたチコリータから木苺を受け取って頭をなでると、チコリータはむず痒そうにして、また蔓を伸ばした。

別に急ぎの旅じゃない。それに29番道路は迷うような場所じゃないし、トレーナーもいないからのんびりしても問題ないな。

そう思っただけでチコリータの隣にしゃがんでいたら、両手に小山ができるほど集まった。大収穫だ。今日のおやつだな。ホクホクした気分です。木苺の小山を見ると、チコリータは物言いたげな視線を寄せ寄せてきた。

「なに？どうかしたか？」

「ちーちこ」

何を訴えているのかさっぱりわからない。疑問符ばかり浮かべる俺に向かってチコリータは何度も鳴いて、通じないとわかるとむっとした顔でずんずん進み始めてしまった。って待ってくれ、両手が塞がってちや歩き辛いだろ！

「ワカナ、ちょっとまって…ってうわっ！？」

やせいのポツポが とびだしてきた！

リヨウは きいちごを おとしそうに なった！

少し離れた草むらから飛び上がってホバリングするポツポに、思わず脳内でテロップが流れた。アツブネ、せっかくチコリータがくれたものを落つことすこだったよ。ってこのまま戦闘に入るのかよ！？

「ちこっ」

「ワカナ！」

こちらが驚いて硬直していてもポツポは待つちゃくれない。体当たりされたチコリータはころりと転がった。

わああまずいまずい！飛行タイプとかやばい！ウチのチコリータさんは若葉マークピツカピカの5レベルですよ！うっかりで死ねる！

「大丈夫か、ワカナ！？」

「ちこっ」

すぐに立ち上がったチコリータの頭の葉が、気合いを入れるように一回転した。よし、大丈夫だな？

「体当たり仕返してやれ！」

「ちこっ！」

草むらを揺らしながら低空をホバリングするポツポに、チコリータは勢い良く突っ込んで行く。レベル5では一撃で仕留められるわけもなく、空中で体制を立て直したポツポがまた突っ込んでくる。

両手が塞がってるせいで相手のレベルもHPも確認できないのが怖い。素早く立ち上がったチコリータの様子からするに、こちらにはあまりダメージ入ってないと思うけど。

「もう一度体当たり！」

「ちこっ」

バシッと軽快な音がして、ポツポが地に落ちる。こちらを睨みつける目はやる気に満ちているが、襲ってくる様子はない。

何だろう？ポツポって気合い溜めとか覚ええないよな？

指示を仰ぐようにチコリータが少しだけこちらを見るけど、戦意のない相手を倒すのはなあ…いや、そんなこと言ってたらレベル上げ

できないか？

考え事をしている内に、草むらからポツポがもう一体でてきた。すわダブルバトルか！？と焦ったものの、入れ替わりで最初のポツポが下がって行く。

なにこれ、無限沸き？ポケモンはそういうシステムじゃないだろー？わけわかんねえ。

「よし。ワカナ、逃げるぞ！」

「ちこっ！？」

「行くぞー」

とりあえず今は逃走しとけ！

ポツポとエンカウントした場所から少し離れた草むら。

羽音に振り向いたら、さっきの個体らしいポツポが1羽、近くの木に向かって飛んで行くところだった。追撃してくる様子もないので立ち止まり、しゃがんでチコリータの様子を窺う。

「お疲れさま、ワカナ。痛いところないか？」

「ちこー」

少し不満そうなたコリータがぶんぶんと頭の葉を振り回す。ジーパン越しにぺちぺち当たって痛い。元気そうでなによりです。

「怪我なくて良かったよ。

でもな、1人で先に行っちゃだめだぞー！

この辺はさつきみたいに飛行タイプが出るし、素早いやつもいるから危ないよ」

「ちこっ」

むっとしたチコリータは、自分はそんなに弱くないと言いたそうだ。

「心配なんだよ、だから一緒に行こう？な？」

「…ちこ」

ちよつとまだご機嫌斜めだけど、とりあえず納得してくれたようで
お兄さんは安心しました。

「よし、じゃあこの木苺しまっちゃうから。ちよつと待っててな」

「ちこ！？」

「ん？どうした？今食べたいのか？」

「ちーちこちこちー」

「ごめん、さっぱりわからない。」

「この辺は危ないし、食べるならせめて草むらを抜けてからにしよう？？」

「ちっこ」

ようやく頷いてくれたので、ビニール袋に入れてから鞆にしまっ
ついでにポケギアでステータス確認だ。

「あれ？経験値入ってる」

「ちー？」

わからないとは思っけど、首を傾げるチコリータにポケギアを見せ
て説明してあげる。

「…この、この青くなってるバー、経験値って言うってお前がポケモ

ンを倒すたびに増えるんだ。さっきのポツポ、気絶はしてなかったけど倒してみたいだ」

チコリータは説明がわからなかったのか、首を傾げた。

「んーとなあ、これはワカナが頑張ったって証拠なんだよ。有り難うな」

「ちー」

ぱつと顔を輝かせたチコリータを撫でる。拒まれなかったので抱き上げてみようとしたら、ぱん！と頭の葉で手を払われた。痛いです。羽音が聞こえて顔をあげると、さっきエンカウトした場所からまたポツポが飛び立ったところだった。先に飛んで行ったポツポと同じ木の影に入って行く。

ふと、もしかしたらあそこに巣があつて、俺たちが近付いたから襲ってきたのかな、と思った。

「だとしたら、倒したはずなのに睨みつけてきた理由もわかるよな…」

「ちこ？」

首を傾げたチコリータに何でもない、と言って、俺たちは再びヨシノシティへ向かって歩き出した。

ヨシノシティのポケモンセンター。

回復が終わったチコリータはご機嫌だ。草タイプのさがなのか、町

中から花が香るヨシノシティをお気に召したらしい。

それに加え連続エンカウントのポツポから逃げた以外は連戦連勝、レベルも上がって葉っぱカッターを覚えた。気分は上々ってところだろう。

「お疲れさま、ワカナ。遅くなったけどご飯にしようか」

「ちこー！」

ポケモンは基本的にポケモンフードを食べる。人間の飯も食べられるけど、味付けが濃すぎてあまり体に良くないらしい。その辺は動物と変わらないんだな。

ウツギ博士が研究所であげていたフードをくれたので、しばらくはそれを食べさせるつもりだ。

ポケモンセンターはゲームで見るよりずっと広くて、アニメみたいに無料の宿泊施設が併設されてる。

ちらりと覗いた食堂は昼時を過ぎたのにまだ混んでいた。まあ今日はウツギ夫人が持たせてくれたバゲットがある。談話室で空いてるソファを見繕いますか。

「ちょっと待っててな」

席に鞆を置いて、まずはチコリータの前へフードと水を用意してやる。さらにもうひと組準備したフードと水は、借り物のピジョンの分だ。

「おいで、ピジョン」

「ピジョー」

ぱさりと伸びをするように翼を広げたピジョンは、さっそくフード

をつつき始める。チコリータは気丈に振る舞っているが、苦手なタイプのためか少し緊張してるみたいだ。昨夜も今朝もこんな調子だった。

苦笑しながらチコリータを撫でる。

「大丈夫、ピジョンはいいやつだよ」

「ちこっ」

ぷるぷる首を振って手を払いのけたチコリータは気にしてなんかない！と言ってるらしかったが、明らかにピジョンを意識していた。ピジョンは本当に気にしてないようだが、なんだか双方が気の毒に思える。

セラピスト先生から借りたピジョンはすごく大人しいんだけど、レベル差やタイプ相性が心理的圧迫になっているみたいだ。

あまりチコリータを待たせると可哀想なので、考え事を追いやってバゲットを取り出す。俺の肩掛け鞆はトレーナー御用達で、なんと自転車まで入る四次元鞆だ。おかげでバゲットもふっくらそのまま持ち運べた。

談話室の端に設置してあるレンジを操作して、持参したコップに水を注ぐ。温めたバゲットを手に席へ戻ると、チコリータがそわそわしていた。

「よし、じゃあいただきます」

「ちこりー」

俺の後に続いてチコリータもいただきますをした。ポケモンの言語なんてわからないけど、この意識は間違っていないと思う。

「おいしいか？」

「ちこっ」

頭の葉を嬉しげに揺らしながらチコリータは応える。こういう、会話が成り立っているような返事をするところがとても人間くさい。猫や犬だと食べるのに夢中で、返答はあまり期待できないからなあ。俺も具沢山のバゲットを頬張る。鶏肉とチーズがやや重たいけど、トマトの酸味が利いていて食欲が刺激される。

お腹もすいてたし、あっと言う間に2本のバゲットを平らげてしまった。

「満足したか？」

「ちこー」

口の周りを舐めとっているチコリータもご満悦で、体力気力ともに十分のようだ。一足先にピジョンを戻したこともあってくつろいでる。休憩を挟んだらすぐにでも出発できそうだな。

とはいえ今日中に30番道路を突破するのは難しいだろうなあ。ジヨイさんに聞いた限り、距離的には問題ない。でもあそこはポツポに加えて虫タイプが出るし、トレーナーも待ち構えてるはずだ。もたついて夜にさしかかれば危険はさらに増す。夜は視界が利き辛くなると教わったし、体力だって無限にあるわけじゃない。

どの道この先は草タイプのチコリータには少々荷が重い場所だ、慎重に行かなきゃだめだろう。2倍以上のレベル差があれば危なげなく行けるんだけど、あいにくチコリータのレベルは6。まだまだ心許ない。

うーん、最初のジムは飛行タイプだし、戦力を強化した方がいいんだよな。でもむやみに増やしたくない。

一応チコリータの他にも手持ちが居るにはいるけど借り物だ。セラピスト先生に無断でバトルするわけには行かない。っていうかそれ

以前にまず言うこと聞かないしな。

片付けをしながら今後について考えるが答えはでない。ま、そういう時は出来ることから片付けるべきだよな。

「ワカナ、午後はちょっと寄り道するよ」

「ちこ？」

首を傾げたチコリータを撫でる。今朝のヒビキとのバトルからチコリータは俺を受け入れ始めてくれてるようだ。むざむざ瀕死にさせるようなことは避けたいな。

「今から次の町はちょっと辛いから、フレンドリーショップに行って寄り道して、今日はここにお泊まりしような」

わかっていないのかいなのか。首を傾げたチコリータを連れて俺はポケモンセンターを後にした。

フレンドリーショップへ向かう途中、問答無用で案内爺さんに捕まった。

ゲームではランニングシューズをくれるありがたい爺さんんだけど、すっかり忘れていたからすぐ驚いた。しかももうランニングシューズ持つてるし。

「付き合ってくれたお礼にランニングシューズをあげよう。わしのぬぎたてホヤホヤじゃ」

「わーありがとうございます！ほんのり生暖かくて微妙な気分になれますね！」

「む、なかなかやるな少年。そんな少年にはこれもおまけじゃ」

ポケにポケを被せたらなんかの木の実くれた。チコリータが興味津々なのでしゃがんで見せてやると、ふんふん匂いを嗅ぐ。食べたりすんなよー？

「ありがとうございます。じゃ、おまけだけありがとう」

「ほっほっほ、ちゃんと新品のランニングシューズも用意してあるよ」

「すみません、実はもう持ってるんです」

「なんと！ただで爺に付き合うとは良い心がけじゃ。」

どれ、ランニングシューズの代わりになるかはわからんが、これも持つておゆきなさい」

「ありがとうございます、助かります」

さらに木の実を貰ったけど何かはわからない。さすがに木の実の外見なんて少ししか覚えてないよ。

うーん、スターとかカムラじゃないのは確かなんだけど、どっかで調べないとなあ。

ポケモン大事に頑張れよと見送ってくれた案内じいさんに手を振り返し、今度こそフレンドリーショップへ。

ポケモンセンターに入った時もだったけど、初めての場所に興奮気味のチコリータはきよるきよるしてる。

「ワカナはフレンドリーショップ初めてか？」

こくこく頷くものの視線は棚に釘付けだ。聞いているかわからない。

一応説明はしとくか。

「ここはお金と物を交換するところだから、買わないものはさわっちゃだめだよ」

「ちこ」

首を傾げたチコリータに言い聞かせる。

「今日は美味しい水と手みやげを見に來ただけだから、それ以外は手にとっちゃだめ。わかった？」

「ちこー」

生活雑貨も自分で賄わなきゃいけないから財政は厳しい。傷薬はいくつか博士に貰ったけど、回復量20で300円の傷薬と50で200円の美味しい水（人間も飲用可）だったら、後者を求めるのは当たり前だろう。

「ワカナ、はぐれないように手を繋ごうか」

「ちこ？」

「蔓だして」

「ちこー？」

首を傾げながらチコリータは、首の両端から蔓を伸ばす。

「片方だけでいいよ、右だけ」

右首から伸びる蔓を軽く握る。手を繋ぐっていうか、犬のリードみたいになってしまった。

「こうしてたら、お互い迷子にならないだろ？」

「…ちー」
「あいてっ」

べしんつと蔓で手を叩かれた。手加減されても蔓の鞭は痛いよ。縄跳びに失敗してすねとかにぶつけたみたいなの痛さがある。

「手繋ぐの嫌なら、はぐれないよう気を付けような」
「ちこっ」

フレンドリーショップが初めてなのは俺も一緒。2人でひとしきり店内を回って、最後にポケモン印の菓子棚の前で足を止めた。

「24枚入りでいいかなあ」

大きめの箱を手にとると、チコリータが蔓でつんと手を引いてきた。

「なんだ？」
「ちこー」

クッキーを持つ手を軽く引かれて、ようやく見せてくれと言ってることに気付いた。

「見たいのか？」
「ちこっ！」

「いいけどお前、好みは辛いやつだろ？これ甘いやつだよ」

意地っ張りな性格のポケモンは辛い味を好む。そこはゲームと変わらない。実際、わけてもらったフードも辛い味だ。しゃがんで差し出してやると、匂いを嗅いで首を傾げた。

「はは、パッケージの上からじゃ匂いなんてわかんないだろー」
「ちー」

まだ首を傾げてるチコリータに棚から違う菓子を取ってあげる。1
00円くらいなら無駄使いしてもいいだろう。

「ワカナはこっち、辛いやつな」

「ちこ？」

「これはお前のおやつってこと。ほれ、持ってくれ」

首の両端から伸びる蔓で抱えたのを確認してレジへ向かう。店員の後ろに見える壁掛け時計は、すでに3時半を回ってる。ゆっくりしすぎたみたいだ。急いで行きますかね。

緩やかに曲線を描きながら森の合間を貫く道は、整備されていて野生のポケモンはでない。コンクリートの道が珍しいのか、チコリータはしきりに足元を気にしながら歩いていた。

この道はヨシノ総合病院へと、俺が昨日まで入院していた場所へ続いている。

隔離されるような立地なのは精神科の隔離病棟があるゆえなのかとか、昨日の今日だけどイーブイは元気かなとか、貧乏とはいえ手土産がやすいお菓子ってマズったかな、なんて考えてるうちに着いてしまった。

広大な庭を持つ大きな病院は、白くて綺麗で開放感がある。けどその周りは生け垣や高い柵で囲われていて、どこか息苦しい。ただ建物を見上げてぽかんと口を開けるチコリータを見るにつけ、たぶん収容されたことがある者だけの感想なんだろうけど。

「ワカナ、ここじゃはぐれたり騒がないように気を付けるんだよ」
「ちこ？」

「ここは病院だから、具合が悪くて入院してる人がいる。そういう人に迷惑をかけちゃだめだ」

すぐ頷いてくれると思ったのに、チコリータはただ俺を見つめるだけだった。

「ワカナ？わからなかったか？」
「ちーちこちこ、ちこー」

うんごめんわかんない。どう説明したもんかと悩んでいると、チコ

リータは蔓をのばして俺の手を引っ張った。ちびっこいクセになかなか力が強くて、たたらをふんでしまう。

「とっとなっとなっ、危ない危ないって、ワカナ！」

「ちーこー」

ぐいぐいと力を込めて引っ張るチコリータの力に逆らいきれない。すげーパワーだな！

「まってまって、転んじゃうよ！」

「ちこっ」

はっとしたチコリータは引っ張るのを止めた。でも蔓は絡んだままだ。

「いきなりどうした？病院が怖いのか？」

「ちこ」

「怖い人でもいたか？」

「ちこ」

どちらの問いも答えはNOで、弱ってしまった。なんでそんなに嫌がるんだ？

「大丈夫、ここはワカナの嫌がるようなことをする場所じゃないよ」

「ちーちこっ？」

不安そうに見つめられても困惑が募るだけだ。何がそんなに不安がらせているんだろう？

「嫌ならボールに入ってくればいいよ」

「ちこー！」

「うおっ」

ぶんぶんと首を振ったチコリータは、今度はぺたりとくっついて来た。なんだよ、かわいいな。

「どうしたんだよ、ワカナ？」

「どしたんだい？」

突然の第三者の声に思いつきり肩が跳ねた。ポケモンに話しかけるとこ見られた！はっず！

「いや、ちよつと病院に用事なんですけど」

「ん？君は昨日出発した子じゃないか？」

「え？あ、昨日の警備員さん！」

振り向いた先で優しげに笑う、年配にさしかかった警備員には見覚えがあった。昨日の朝、門に詰めていて先生たちと一緒に見送ってくれた人だ。

「なにがあつたんだい？」

ほっと安心するような笑みの警備員を見上げ、チコリータは動きを止めた。今なら簡単にボールに戻せるけど、このままボールに戻すのは良くないだろう。

「先生にお借りしたピジョンを返しにきたんですけど、ワカナがむずがっちゃって」

「そうなのかい。ワカナちゃんは病院は嫌いかい？」

病院好きなやつなんて相当な物好きだけだろー。と内心つつこんだが、チコリータは首を振った。物好きさんだったのか。

「お兄さんはここに用事があるんだって。入るのが嫌ならおじさんと待つてるかい？」

「ちこ…」

チコリータは首をふって、俺をつかむ蔓に少し力を入れた。警備員が微笑ましそつに笑う。

「大丈夫だよ、ここはお兄さんに痛いことをするところじゃないからね」

「ちこ？」

「本当だよ。お兄さんは借りたポケモンを返しにきただけなんだって」

会話が成立したことにあっけに取られていたが、チコリータが不安そつに見上げてきたので慌てて肯定する。

「そう、ピジョンを返しに来ただけだよ。ピジョンはこの先生から借りていたから」

「ちこ」

ほっとした様子ですると蔓を収納していくのに、思わずおじさんをまじまじと見つめてしまった。

「よくわかりましたね？」

「ははは、トレーナー歴だけならもう30年になるからねえ」

継続は力なりって言うけど、なかなかこんな風にはなれないような気がする。初対面のポケモンの気持ちを察するなんてエスパーみたいだ。

そついやこの世界ってエスパーいるんだっけ。えーとなんだっけ、心読むのって…

「サイコメトリ?」

「ん? ああ、ははは。私は超能力者なんかじゃないよ。

さ、ワカナちゃんも納得したみたいだし、中に入りなさい」

「ありがとうございます。行こうか、ワカナ」

「ちっこ」

俺の隣にちよこんと座ったチコリータは、きよろきよろと視線を移していた。受付前の広い待合所は午後の診察ぶんの人で溢れているから、田舎の研究所育ちには珍しい光景として映っているのだろう。名前を呼ばれたのでチコリータを伴って奥へ進む。

「ワカナ、歩きづらくないか? 抱っこしようか?」

「ちーちこ」

人が多いので抱っこしようとしたら嫌がられた。ちえっ。

エレベーターや廊下ですれ違う人に、チコリータが忙しなく首を回す。ここの精神科はジョウトで一番大きく、ベッド数もさることながら最新の治療法を求めて通院する人も多い。だから必然的に院内は人で溢れているのだ。

通されたのは診察室じゃなく、ポケモンセラピストの先生達の準備

室。そこには一人の先生と一匹のイーブイだけが居た。他の先生やポケモンたちは出払っているのだろうか。

「一昨日ぶりです、先生、イーブイ」

「ぶいー」

ふかふかの尾をふりふりと振りながら、イーブイが足にすり寄る。しゃがんで撫でると相変わらずの人懐っこさで出迎えてくれた。

「いらっしやい、順調に行ってるみたいだね？」

「はい。ワカナ、この人はこの病院の先生だよ」

セラピストをどう説明したら解ってもらえるのか。それが解らなくていい加減な説明をすると、先生は笑い声をあげた。

「先生だなんて大げさな。僕はここで退屈してる人の話し相手だよ。いらっしやい、ワカナちゃん。お茶でも飲むかい？」

「ちこりー」

ぴんと葉っぱを立てて挨拶する。お行儀がいいねと笑って、先生はローズヒップのハーブティーを出してくれた。

「ピジョン、ありがとうございました」

「どういたしまして。お帰り、ピジョン」

「ぴじょー」

モンスターボールから出たピジョンはばさりと羽を伸ばすと、先生の隣へ寄り添った。先生がカキカキと喉を掻いてやる。

「ぞうぞ、これみんなで食べてください」

「おや、ありがとう。でも次からはこんな気遣いはいらないよ、もつと気軽に訪ねておいで」

クッキーの詰め合わせをにこにここと受け取ってくれた先生は、早速封をきり、棚から取り出した饅頭や煎餅とともに勧めてくれた。アムバランスだけどせつかく出してくれたものだ。一つくらい手をつけるのが礼儀だろう。

チコリータのために煎餅を砕いてあげてから、自分の分の饅頭を取る。と、イーブイが俺の手にじゃれついてきた。くれとねだっているのだ。

「あげてもいいですか？」

「かまわないよ」

一応聞いてみればすぐに肯定が返る。この部屋にあるものは大抵がポケモンも食べられるものだし、俺が持ってきたクッキーも同じだ。千切った饅頭を手のひらに載せて差し出すと、イーブイはさりさりと舐めるように口にした。少し手のひらがくすぐりたい。その様子を見詰めていたチコリータにも千切って差し出す。

「はい、ワカナもどうぞ」

「ちこ…」

ふんふんと匂いを嗅いだが、微妙な表情ですぐに首を引っ込めてしまふ。

「饅頭は嫌いか？」

「ちこ」

首を振って否定はしたが、口にしようとはしない。すると自分のぶ

んを食べ終えたイーブイが、膝に乗り上げて俺の手を引いた。食いしん坊だ。

チコリータがいらぬなら、とイーブイに差し出す。チコリータはテーブルに飛び移ってお茶を口にした。そっちが良かったのか。

「そんなに順調でもないようだね？」

「え？」

「ワカナちゃん、拗ねてるみたいだよ」

「え、え？」

疑問符を浮かべた俺に先生は苦笑した。

「ワカナちゃんは意地っ張りなんじゃないかな？」

「えーと、そう言うのって見ただけでわかるもんですか？」

警備員といい先生といい、なぜこつも言い当てられるんだ？

「今回はね、わかりやすいから。君がポケモンに慣れてないのはわかるけど、大切にしていけないと」

大切、かあ。

「無碍にしてるつもりはないんですが…」

「簡単だよ、もっと構ってあげればいい。ワカナちゃんは君のパートナーだろう？」

「はい」

構う、構うね。って言っても抱っこや撫で回されるのは好きじゃないみたいだし、構い過ぎて嫌われたら本末転倒だよな。

「ワカナ、クッキー食べる？これは甘さ控えめだから美味しと思うよ」

とりあえず餌付けだ、とクッキーを割って差し出すけど、こちらを見向きもしない。イーブイがまた袖を引いた。それを見ていた先生は大笑いしだした。

「あっはっは、どうやらワカナちゃんはイーブイに嫉妬してるみたいだね」

嫉妬？と口に出す前にチコリータが先生に飛びかかって行った。つてコラ！

「ちこー！」

どーんと体当たりしたチコリータを先生は軽く受け止める。

「なにやってんだワカナ！イーブイ、ちょっと降りてくれ」

「ぶいー」

「いいんだよ、リョウくん」

「ちこーっ！」

ひよいとイーブイをのけて、葉っぱでペチペチ先生を叩くチコリータを持ち上げる。

「だめだろ、先生叩いちゃ」

「ちこーっ！」

「あいたっ」

ペーンとほっぺを叩かれた。結構痛かったぞ！

「ワカナ、暴れるなって、落ちちゃうって、ああー」

べちつと、落下とも着地ともつかない音を立てて床に降りたチコリータは、距離を取ると俺に向かって威嚇した。

「ワカナ？」

「ちーっ！」

困惑して問いかけたが、ぶんぶかぶんぶか、頭の葉っぱを振り回しながらの威嚇が返答だった。当たったらなかなか痛そうなスピードだ。

「なに何怒ってるんだよ？」

「ちーっ！」

「威嚇されてもわかんないよ」

「ちーこちこっ」

ごめん、説明されてもわからなかった。

どうしたもんかと動きあぐねていると、チコリータはぶいっつとそっぽを向いてドアに向かってしまった。が、当然開けられないし開かない。

「ちーちこーっ！」

「だーめだって、まだ帰らないよ。それに病院を1人でうろろしちやダメだ」

べちつと扉を叩いて催促されたが、まだ開けるわけにはいかない。最初はピジョンを返すことだけが目的だったけど、今は尋ねたいことができてしまった。

「どれ、じゃあ僕と散歩に行こうか」

席を立つたセラピスト先生が、チコリータに視線を合わせるためにしゃがみ込む。

「日向ぼっこするには遅いけど、ここの中庭は緑が溢れてて綺麗なんだ。君も気に入ると思うよ」

ね、と笑う先生にチコリータは頷いた。優しく頭を撫でた先生が、抱っこしようか、と言って抱き上げると、大人しく腕に収まる。直前まであんなにイライラしてたのに……これもトレーナー歴の差なんだろうか。

「ぶいー」

「うお、なに登ってるんだよ？」

微妙にへこんでる俺などお構いなしに、イーブイは器用にズボンを登ってくる。若干爪が刺さって痛いんですけど。

落ちないように抱き上げてやれば、イーブイはもぞもぞと動いて居心地の良い体勢で落ち着いた。

「お前も抱っこしてほしかっただけかよ」

答えは満足そうに鳴らされる喉でわかる。本当に人懐こいよなあ。

「しょうがないトレーナーだね、ワカナちゃん」

「あ」

苦笑する先生の腕の中でチコリータが丸まっていた。丸まるなんて

覚えないだろー、お前。なんてからかつちやいけないのはさすがに
わかったが、なんつうか後の祭だよな。

デリカシーないんだろつか、俺。

うん、たぶんないんだろつか、俺はもちろん、喉を鳴らし続けるイ
ーブイにも。

緑溢れる中庭に移動するとチコリータは機嫌を少し直したようで、ちまちまと探索し始めた。

「ワカナはその花が好きなのか？」

花壇を覗き込んでいたチコリータは俺を無視して行ってしまふ。地味にへこむぞ、これ。

そんな俺に苦笑して先生がチコリータに話しかけると、嬉しそうな返答がある。

「ピンク色が好きなのかい？」

「ちこー」

切ねえー。手持ちに無視されるとか、まして最初のポケモンに無視されるなんて悲しすぎるだろ！

「ぶいー」

のんきに蝶々を追いかけるイーブイが通り過ぎていく。なんか無性にやるせない。

思わず苦笑いしていると、足元へイーブイがやってきた。得意げに喉を鳴らすその口元に、さっきのモンシロチョウさんが。

「う、わーおばかちゃん！虫なんかくわえちゃだめだって！ほら、ぺっ！ぺっしなさい！お前虫なんか食べないだろ！？」

吐き出させるにはどうしたらいいんだ！？蝶の羽って結構脆いから、

無理やり口を開けたらまずいだる。

イーブイの口元に手を持って行った状態で固まってる、イーブイは俺の手にモンシロチョウをおいた。これ幸いとばかりに、慌ててモンシロチョウが飛び立ってゆく。

それを追うでもなくただ俺に向かってにこにこ笑うイーブイは、まったく悪気なくてむしろ得意げだ。

「ぶいー」

もしかこれは、猫とかがやると言う獲物自慢だったんだろうか？

「捕まえたから見せびらかしにきたのか？」

「ぶい」

こつくり頷いたイーブイを撫でてやる。悪気ないんじゃない強く出れない。

「そうか、見せてくれてありがとうな。でも虫はとっちゃだめだぞ、結構脆いんだからな」

「ぶいー」

聞いているんだか聞いてないんだか、イーブイは撫でられてご満悦の様子。もつとなでれとよじ登ってきたイーブイの口の周りが僅かに白くなっていて、俺は思わずのけぞった。

「こら、やめろっ！お前鱗粉ついてんじゃない、ぎゃー」

その口を顔に寄せるな、と叫ぶ前にぐりぐり擦り付けられた。

「あーもーお前、ははは、しょうがないなあ」

「ぶーいー」

思わず笑いながら、嫌がるイーブイの口を手で拭って自分の頬も拭う。マイペースでおぼかちゃんだけど憎めないんだよなあ。

「きゅっ」

「うえっ!？」

俺の腕から吹っ飛んだイーブイが、鳴きながら空を舞う。突如として体当たりしてきたチコリータに飛ばされたのだ。俺の上に着地したチコリータは俺を蹴りつけ、地面に転がったイーブイへと飛びかかっていった。

「え、ちょ、ワカナさん? いやいや、ダメだつて、喧嘩はだめ!」

べっちゃんばっちゃん! 頭の葉でビンタしまくるチコリータを慌てて抱き上げると、イーブイはびっくりして固まっていた。

「大丈夫か、イーブイ?」

「ちこー!」

「いたっ! 痛い痛い、痛いよワカナ」

「ちこちこちこー!」

暴れまくるチコリータを落とさないよう必死に抱えていると、葉っぱだけでなく頭が顎にごちんとクリティカルヒットした。思わずチコリータを抱えたままうずくまる。

言葉もなく悶絶する俺をチコリータが振り返った。

「大丈夫かい、リョウくん?」

「は、はい」

とは言ったものの涙目になってる自信があった。顎の下なんてモロ人体の急所に不意打ちで入ったのだ、痛くないわけがない。

「ぶいー？」

「大丈夫大丈夫。イーブイは大丈夫か？」

「ぶい」

顎をさすりながら問う。にっこり笑ったイーブイは平気そうだ。チコリータも本気じゃなかったんだろう。当のチコリータはそっぽを向いてしまったけど、流石にバツがわるそうだ。

「チコリータは大丈夫か？どこも痛くしてないか？」

無言の頷きが返る。取りあえず俺を無視するのは止めてくれたらしい。

「みんな怪我なくて良かったな」

「ぶいー」

一番の被害者だと言うのに、気にする素振りもなくイーブイが笑う。と、チコリータはちらりとそちらを見やった。

向かい合うよう、チコリータを抱え直す。

「ワカナ」

ぴくつと反応はあったものの顔を上げない。別に頭ごなしに叱ろうってワケじゃないんだけどな…その意志表示のためにそつと頭を撫でてみる。

「俺がイーブイばかり構うのが嫌だったのか？」
「…ちこ」

小さな声はしよげ返っていた。しょうがない、これは俺が悪かった。

「ごめん。ごめんな、仲直りしてくれるか？」

「ちこ」

「そうか、ありがとうな」

頷いたチコリータをぐしゃりと撫でてから、そつと地面に下ろす。
見上げてくる顔に「っただけ言わなきゃいけない。」

「俺はいいけど、イーブイには謝るんだぞ。いきなり喧嘩仕掛けたんだから」

「ちこっ!？」

ええっ!?!とびっくりしたチコリータに、だめだ、喧嘩両成敗。と言え、膨れながらもイーブイに向かって鳴いた。

「ちこち」

「ぶいー」

イーブイがチコリータに笑いかける。仲直りはできたみたいだ。

「すみません先生、こんなところで喧嘩はじめちゃって」

「いいよ、青春だねえ。仲良きことは美しきかな」

蚊帳の外だった先生は、なんだかにやにやと見守る体勢だった。そのことには気付かない振りをしておいた。だつてつっいたらやぶ蛇だろ、絶対。

「ねえ、リョウくん」

「はい？」

「ワカナちゃんとイーブイも仲良くなれたことだし、イーブイを連れて行つてくれないかな」

「え？」

イーブイを連れて行ってくつて、手持ちにすんの？俺はいいよ、イーブイ好きだし、気心知れてるから一緒に行けるのは嬉しい。けどさ、問題あるんだよね。

「俺、交換できるポケモン居ませんよ」

「大丈夫、譲るから」

「や、でも、イーブイは先生のポケモンでしょう？」

「今はね。でもポケモンセラピストはポケモンを譲ることもあるんだよ。ね、イーブイ」

「ぶい」

こつくり頷くイーブイ。ここから出て行ったポケモンを見たことがあるのだから。

「イーブイは君を気に入ってるし、頼りになるから連れて行ってごらん」

「ええと、じゃあイーブイ、お前は？お前は、俺について来てくれるか？一緒に行きたい？」

「ぶいー」

しゃがんで尋ねると、にっこり笑って頷ぎいたイーブイが、俺の手に頭をこすりつけた。

「ほんとにいいのか？先生とお別れしたら、寂しいだろう？」

よじ登ってきた体を抱き上げる。上機嫌にぺろぺろと顔を舐められる。たぶん、俺を選んでくれた。そう思ったら俺の心がぶわっと暖かくなった。

懐いてくれてるのは知ってたし、俺も気軽に接してたけど、まさかついて来てくれるとは思ってなかった。

「君は変なところで遠慮しいというか、考え過ぎな所があるから、その子ののんきさは助けになるはずだよ」

…病院を出てから初対面の人ばかりで、1人になれる時間もあまりなかったから、被った猫を下ろす暇なかったんだよな…つまるどころ気が休まる暇がなかったことに、今更気付いた。つうか気付かされた。

先生とイーブイはお見通しだったんだらうか？

「ワカナ、今夜も3人でご飯になるよ」

「ちー！？」

俺達のやりとりをただ見つめていたチコリータを抱き寄せる。少し暴れても気にしない。

「有り難う…有り難うございます。イーブイ、しっかりお預かりします」

「うん。」

ワカナちゃん、悪いけど男2人の面倒を見てやってね。2人ともマイペースなところがあるから」

「ち、ちこっ？」

もう決定なの？と言う風にチコリータが目を見開いた。

「ワカナは、嫌か？」

「……」

「ぶいー」

「ちーっ!？」

「ぶっ」

問いには沈黙が返った。しかしにこにこ上機嫌なイーブイは、よろしく、とでも言うようにチコリータの顔を舐めて、驚いたチコリータがぴんと頭の葉を立てて、それが俺の顔にヒットする。

「ちーちこちこちー!」

「ぶいぶいー」

「ちこーっ!」

「痛い痛い痛い、膝の上で暴れないで」

のんきに笑うイーブイに怒鳴って、チコリータはまたぺしぺしと叩き出した。イーブイが逃げ出し、それをチコリータが追う。喧嘩というよりはじゃれあいに見えた。

「うん、なかなかいいチームなんじゃないかな」

「今のやりとりのどこを見たらその結論が出るんですか」

「君は以外と警戒心が強いし、ワカナちゃんは意地っ張りだから。」

「コミュニケーション不足になりがちじゃないかい？」

「コミュニケーション不足、ねえ。」

「自覚ないって顔だね」

「はあ、警戒心が強い自覚はあるんですが…」

「コミュニケーション不足ってわけじゃなくて、まだお互い距離を測りかねてるだけだと思うんです」

「そうだねえ。だから、イーブイがいい緩衝材になってくれるよ」

チコリータは、まだ俺を見極めているのだと思う。

俺だって初対面から仲良くってのは、猫を被ってないと難しい。となれば本性を出せるようになるまで、どこかしら他人行儀な関係になっってしまう。

そんな俺でもものきなイーブイにはすぐ打ち解けられた。だからチコリータもイーブイにはすぐに打ち解けて、その波及効果で俺達の関係も良くなるんじゃないか、と言うことだろう。

「そうですね」

「そつだよ」

先生は笑って俺の頭を撫でた。やめて、俺もあんたも成人男性なんだからやめて。撫でられるなら女の子がいいよ！

キキヨウシテイへ 1

草むらの朝露を弾きながら、尻尾をふりふりイーブイが進んで行く。好奇心のままにあっちへこっちへ。きよるきよる目を輝かせる様子は、病院では見られなかった姿だ。

「あんま遠く行くなよー。野生のポケモン出るからなー」

きゅー、と甲高い鳴き声は気もそぞろな様子で、走り出しては急に足を止め、また走りだす。おかげで俺はいつ見失うかはらはらっぱなしだ。それでも止めないのは病院の窮屈さが頭を過ぎるからなんだけど。

ま、これから外の世界で生きて行くんだ。多少は冒険して痛い目みて、自分で学習するしかないからな。本当に危ない時はボールに戻せばいいわけだし。

「きゅっ!?!」

「なんだ!?!」

つい心配し過ぎてしまう自分を諫めていたところに、イーブイの悲鳴が届く。飛び上がった、という表現がぴったりな勢いで後ろ足立ちになったイーブイに駆け寄る。逆毛を立てるイーブイのすぐ傍に横倒しになったトランセルがいた。イーブイはこれを踏んづけてしまったらしい。

トランセルは目を閉じて微動だにしない。ただの屍のようだ。いやポケモンは瀕死になろうとも死には…ってそれはバトルオンリーの話だよ。寿命とか病気とかで、ってのは当然あるわけで。

小学生の頃、学校の裏庭にあった雑木林に埋めてやった金魚が頭をよぎった。もしもの場合は埋めてやった方がいいのか？

…トランセルって、確か硬くなるしかしないよな…
攻撃されないだろうとは思っても引け腰になるのは止められない。
子供の頃はカマキリだろうとオニヤンマだろうとセミだろうと躊躇
なく捕まえられたけど、田舎を離れて大人になるうちに接し方を忘
れて怯えが先立つようになっていた。カミキリムシに指の皮切られ
たのが決定打になったと思う。
でも確認しないと。よし。

「……動かねえ」

つんとつついても反応はない。マジで死んでたりしないだろう…？

「ノックしてもしもし、トランセルさん？」

うーん。なあ、これ生きてると思う？」

つんつんしながら聞く俺に、イーブイは首を傾げた。お前にもわか
んないかあ。

「取り敢えず、端っこに避けてやるか」

「ぶいー」

生死はわからないが、ここは草むらのど真ん中。いつまた誰かが踏
んづけるとも知れない場所だ。

このあたりのポケモンのレベルは低くて、駆け出しトレーナーの狩
り場だと言うから、物慣れないトレーナーが走り回って事故ったら
スプラッタになるかも知れない。トランセルの中身は非常に柔いら
しいしな。っていうか、もしやこれは狩られた後なのかね？

そう思って運ぶ途中、いきなりトランセルが動いた。

「うおおっ!?!」

「きゅっ」

思わず落としてしまったトランセルは、身をよじって器用に距離を稼いでいく。硬直から立ち直った俺たちの視界からトランセルが外れるより、俺たちが歩いて去る方が早いような速度だけど。

えっちらおっちら、なんてかけ声が聞こえそうな必死さだが、返ってそれが滑稽…いや、微笑ましいとおこづ。どちらにせよ、トランセルに失礼な表現かもしれないが。

しゃがみ込んでしばらく見守った後、俺はトランセルに声をかけた。

「強く生きるよー」

「ぶいー」

聞いているかいないのかはわからないが、ま、無事ならいいや。

「行こうか」

「ぶい」

立ち上がって進むべき方向へ向き直った俺は、短パン小僧と虫取り少年がばつと視線を逸らしたのを見た。

…おおう。

近付いて見れば肩がぶるぶる震えている。短パン小僧の足下からコラッタが、2人をきよとんと見上げていた。

「見てた？」

「う」

野生のポケモンに話しかけるといって、独り言じみた行動を。

言外にそう問いかければ、ぐうと喉の奥で呻いた短パン小僧が我慢しきれずにぶはつと吹き出した。すると釣られたらしい虫取り少年

も吹き出した。俺は恥ずかしいのを笑ってごまかす。
イーブイとコラツタが揃って不思議そうに首を傾げた。

「お前も珍しいの連れてるなあ」

しばらくして笑いが収まった短パン小僧は、イーブイを見て言った。

「お前もって？」

「昨日はヒノアラシ、一昨日はワニノコを連れた奴が通ったんだよ」

昨日ヒビキが通ったってことは、一昨日は寄り道しないで真っ直ぐポケモン爺さんとこ行ったんだな。偉いね、良い子だ。…ん？こっつてまだキキョウシテイとポケモン爺さん家への分岐点じゃないよな。トレーナーが待ち構えてるのはキキョウシテイへ向かう道の方で、このあたりは短パン小僧だか虫取り少年が1人いるだけだったよな…

2人の後ろにボングリの木を庭に生やした民家が見えているから、場所に間違いはないと思う。でもまあ、ゲームみたいにも同じ場所に同じ人がいるとは限らないよな。

自問自答して納得すると、今度はライバルに脱力を覚えた。なんつうか、ずいぶん堂々とした逃走だ。痕跡残しまくりじゃん。こんな調子じゃ俺が口を噤んだところで、シナリオクリア前にお縄なんじやねえの？

「うん、君なら勝てそうだな。勝負だ！」

「いいけど…ワニノコとヒノアラシには負けたんだ？」

「ポツポとコラッタにもだよな」

30番道路で負け続けでコラッタ、という情報から一つの名前が浮かんだ。

お前ゴロウか。コラッタ自慢がうざいけど、再戦するとマックスアツプくれるんだよなあ。たった一個じゃあんまり難みないと思ってたけど、現実なら美味しいよな。なんたって一個9800円のアイテムプラス賞金、しめて1万オーバーをぼんとくれるわけだ。気前いいー！

「だから鍛えてるんだよ！いけっ！コラッタ！」

「らった！」

虫取り少年の茶々を掻き消す勢いでゴロウがびしっと指を指し、コラッタも応える。熱いなあ。

「モチヅキ、行ってみるか？」

「ぶいー」

とことことイーブイが前に進み出たので、ポケギアをいじってバトルの画面に切り替えた。コラッタとイーブイの簡易なデータが表示される。これ、どういう風にバトル相手を認識してるのかな。

「氣い抜けるなあ、早くしろよ」

と言われても、負ける気しないから緊張感に欠けるんだよなあ。

「なあ」

「なんだよ？」

「どのタイミングで始めたらいいんだ？」

「はあ？」

少し離れて観戦の体勢に入っていた虫取り少年が、にやにやと口の端を歪めた。俺、まじめに聞いたんですけど。

「タイミングって…そんなの適当だよ、てきとう！」

「それがわかんないんだよ。合図とかしないの？」

ゴロウが変なものを見たという顔をして、視界の端では虫取り少年が歯を見せて笑ってる。そんなにおかしい事聞いたか？

「お前、ヘンなヤツだな」

それは承知の上です。でも初心者が格好付けてもしようがないだろ。若葉マークな今の内に、なるべく疑問は解消しておきたいんだよね。

「路上のバトル初めてなんだよ」

「まじで！」

おいおい、あからさまにカモネギ来たーって顔すんじゃないよ。そんな油断しいだから3連敗しちまうんだよ。

「君おもしろいねー。僕が合図だしてあげるよ。それでいいだろ？」

「俺はいつでも構わないぜ！」

「らーった！」

ゴロウの勢いに乗るように、コラッタが雄叫びっぽいものをあげた。ただの秘伝要員だと思ってたけど、こうして見ると可愛いな、コラッタ。

「君は？」
「いつでもいいよ」

笑顔で言えば、ほんと氣い抜けるなーとゴロウがぼやいた。余裕があると言つて欲しいね。

「じゃあ行くよー。試合開始！」

「電光石火だ！」

「あくび！」

風を切つてコラッタが飛び出す。ラッタ系と言えば電光石火と必殺前歯と怒りの前歯だよな。レベル6つて、どんな技覚えてたっけ？大あくびをしたイーブイの口から出た、ほわほわとした白い煙りを突つ切るようにコラッタが襲いかかる。ばしんとい音を立てて、右斜めから素早いタツクルが入った。レベル10のイーブイは十分な余裕を残して持ちこたえる。もう2発は余裕だな。…急所こなくて良かった！

一方コラッタと言えば、欠伸が当たったのにちつともよろついた感じはない。命中100パーセントだから当たつてははずだけど。

「モチツキ、交代だ」

「あつ！控えいんのかよ！ずっけー！」

ずっけーですと？モンスターボールにだってバトル画面出るんだから、控えの有無くらい確認しとけよ。

「待ったナシだかな。頼む、ワカナ！」

「ちっこりー！」

今朝ぶりに外へ出たチコリータはやる氣十分、たしん！と足を踏み

しめる。

「くっそー、もう一度電光石火だ！」

「耐えてくれよっ！」

交代したターンは、こちらは何も出来ない。コラッタの一方的な攻撃でチコリータのHPが半分近く削られた。

それで勢いづいたらしいゴロウが勇ましく次の指示を出す。

「電光石火！」

ん？コラッタ？」

「悪いね。」

ワカナ、葉っぱカッターだ」

先制攻撃を指示したのに動かないコラッタにゴロウが様子を伺う。交代で1ターン消費した間にコラッタはとうとうと始めていた。欠伸は技を出してから1ターン経過すると、そのターンの終わりに必ず眠らせる技だからな。

しかし眠り状態と言っても、完全に寝るわけじゃないらしい。ま、どっちにせよ行動不能に変わりはないさそうだ。

ぺたんと座り込んだコラッタに葉っぱカッターが命中する。ポケギアに表示された相手のHPバーは3分の1を切ってレッドゾーンで止まった。同じレベルだったのに思ったより削れたなあ。葉っぱカッターの急所補正きたか？

「しっかりとコラッタ！起きてくれ！」

起きるなよー。昔とは違って、眠り状態が1ターンで解けてしまうご時世だ。祈らずにはいられない。電光石火怖いよ、タイプ一致先制技怖いよ。

「もう一度、葉っぱカッターだ！」
「ちいっこー！」

ぶん、と頭の葉が振り回されて、その軌跡を追うようにふわりと葉が浮かぶ。そうして現れた葉は次々とコラッタに命中した。見事HPを削りきったところで、船を漕いでいたコラッタはパタンと仰向けに倒れる。よっしゃ！

「ああっ！コラッター！」

「ナイスワカナ！偉いぞっ！」

「ちっこー！」

「いたいいたい、首がいたいですワカナさん」

思わず抱き上げてぎゅうと抱きしめたら、蔓で顔を押しやられた。そんな嫌がらなくてもいいじゃないか…

ゴロウが悔しそうに唇を尖らせる。

「くっそー、やっぱり1匹じゃダメかあ」

「そんなことないだろ。」

素早いし必殺前歯とタイプ一致電光石火は強いよな。怒りの前歯だつて覚えるし」

「え？」

「え？」

コラッタをボールに戻したゴロウと俺は、顔を突き合わせてきよんとしてしまった。

「必殺前歯つてなに？」

虫取り少年の問いに頷くゴロウ。知らないでコラッタ育成してたのかよ。

あーでも、最初はそんなもんか。俺だつて小学生の頃はひどかった。フシギバナに葉っぱカッターと蔓の鞭とソーラービーム覚えさせてたもんなあ。攻撃技を草タイプばかり3つとか、今なら考えられない。

「必殺前歯は怯みの追加効果がある技だよ。コラッタは素早いから先制攻撃できるだろ？」

怯みが発動したら相手は1ターン無駄にすることになる」

それを見越して先制技や交代も有り得るから、一概には言えないけどな。怯み率もたったの1割と、決して高くはないし。

「お前、もしかして塾生？」

「いや、塾は行ってないけど…調べたらわかるだろ？」

昨晩、ポケモンセンターに泊まった時に談話室で聞いた話によると、ポケモンのデータは出回っているとのことだ。ネットで無料とはいかないが、書店にはトレーナー向けの参考書という形で攻略本みたいなものがあるらしい。

「弱そうに見えたのに、ずっけーよー」

「あはは、見た目で判断すんなってことだよ。あ、忘れるところだった。賞金」

「わかってるよ、ほらー！」

互いのトレーナーカードを近付ける。賞金は勝負がついた後、トレーナーカードで通信してやり取りする。カードと言っても少し厚みがあるそれは、中に精密機器が入っていて、両面が液晶のタッチ画面になっている。DSもびっくりの技術だ。

このトレーナーカードを作ると同時に口座が作られて、勝負の際にはその預金の半分を動かすのだ。初回は必ず1000円入れてなきゃいけないから、俺が負けたら500円払うことになる。本当はヒビキに負けたから残金500円になってなきゃいけないんだけど、初バトルと旅立ちに興奮していて渡すのをすっかり忘れていた。次にあつたら直接渡すつもりだ。

本当にうっかりだったんだけど、踏み倒してしまった事実が心にし掛かってたりする。たぶん、ヒビキはそんなこと気にしないんだろうけど。

後ろめたさを振り払って、ゴロウからの賞金を確認する。

「…うわあ」

「うわあってなんだよ!」

そのまんまの意味だよ。32円だぞ、32円。32円でお前。もっかい言っちゃうぞ、32円。

「あちゃあ」

「あちゃあって言うなよ!」

「ひえー」

「なんだよもう!」

「いやあ、返そうか?」

「いらねーよ!勝負は勝負だ、もってけドロボー!」

「なんかカツアゲしちゃった気分なんだけど」

32円で。給料日前のサラリーマンといい勝負、にはならないか。俺は所持金0円になった奴を知ってる。どっちにしる底辺だが、大人なのにすっからかんになった奴の方へ軍配は上がるだろう。ダメな方向に。

「あはは、負け込んでるからなー」

「うっせーやい!なあ君、番号交換しよーぜ」

なに、なんで呼び方がお前から君になったの?どんな心境の変化?

「番号って、ポケギアの?」

「当たり前だろー。携帯なんか高くて持てないよ」

この世界にも携帯電話はあるし定額制だ。でもトレーナー割りが適用されるポケギアの方が、トレーナーにとっては格段にお得だったりする。特にトレーナーカードを作ってから1年は、余計なことに

使わなきゃ月々980円で済む。余計なことってのは無料通話分才
ーバーってことだ。つうわけで。

「謹んでご遠慮させていただきます」

「え、ええっ！？なんでだよ？」

「だってお前、無駄電話してきそっだし」

「無駄電話なんかしないよ」

「そうか？コラツタが必殺前歯覚えたら嬉しくて電話すんじゃない
の？」

ゴロウは言葉を詰まらせ、ぴくりと右手を動かした。右の腰のモン
スターボールホルダーにはコラツタがいる。
うん、沈黙は時に雄弁だよな。

「じゃ、そういうことで」

「わーまってまって、番号登録してくれよ！な？」

「いやぶー」

「いやぶー！？」

ゴロウはぎゃわぎゃわ騒ぎながも、しっかりと服を掴んでくれちゃ
つてる。強行突破はもちろん、不意打ちで逃げることも叶わない状
態だ。

まったく、シャツの端を握っているのは可愛い女の子といたいけな
幼児だけだっつーの！

「俺からかければいいだろ？」

「出られなかった時にかけ直すはめになるのがヤダ」

「ワン切りはしないし、ちゃんと留守伝残すよ」

そこまで言われても気持ちは否定的で、だから俺は気付いてしまっ

た。
なんかもう通話料金の問題じゃなく、ゴロウの相手が面倒になってきてる。こねるやつは相手なんて給料貰わないとやってられんわ。今すぐ鼻くそほじり始めちゃうぞ、コラ。

「用事がある時は取らないけど？」

「わかったって。どうしても話したかったら、ちゃんとかけ直すよ」
相手にかけさせるのはケチ臭いと思うが、背に腹は返られない。俺は生活保護を受ける身だからな。
にしても面倒だなー面倒だなー面倒だなーあ。

「そうだ、もし無駄電話してきたら、すっからかんになるまで叩きのめすか、なんかしらカツアゲしにくるからな」

「か、カツアゲっ？」

ひっくり返った声に、唇の端をにやりと上げてみせる。

「お互いに持つてるトレーナー用品賭けて勝負ってことだ。ま、負けるつもりは毛頭ないけどな？」

うむ、いい提案をした。

自分でもわかるくらい満面の笑みが浮かんでいる。絶句してしまつたゴロウの肩を、虫取り少年が可笑しそうに笑いながらぼんと叩いた。

「君って本当に変わってるんだな」

「そうか？」

「うん。連れてるポケモンもだけど。チコリータとイーブイなんて、どこで捕まえたの？」

「どつちも人から譲って貰ったんだ」
「だから強いのか」

人から貰ったポケモンは経験値を多めに貰えるから、レベルが上がりやすい。しかし俺の手持ちは違う。

「いや、親は俺だよ」

「タマゴで貰ったの？」

「そんな感じ」

本当は違う。チコリータはウツギ博士からだし、昨日から新しく入ったイーブイはセラピスト先生から託された子だ。

ポケモンセラピストってのは、ポケモンと患者の気が合えば譲ることもあるため、親IDを空欄のままポケモンを持つことができる。

と知ったのは昨日の事なんだけど、そういうわけでイーブイの親は俺だった。その時に付けたニックネームがモチヅキだ。

ふんもつふとかマフモフとか提案したら、さすがののんき者にも嫌がられた。ので、将来の進化先を加味してモチヅキ、つまり満月と名付けた。

イーブイの性格はのんき。防御が上がって素早さが下がる性格だ。それを生かせる進化先はブラッキーかシャワーズ。

グレイシアも足は遅いけど、ジョウトでは進化できないし、後攻型にするにはHPが心許ない。同じ鈍足なら、攻撃範囲が被りかつHPが豊富なシャワーズの方がいいだろう。しかしそうすると今度はチコリータと攻撃範囲が被る。相性のバランスを考えるならブラッキーがいいんだよな。

ジョウトに悪タイプは少ないし、ゴーストタイプとエスパータイプを受けられるのは強みだ。火力不足なのは否めないが、幸いこのイーブイはタマゴ遺伝で優秀な補助技を覚えてる。あくびと願ひ事、

便利だよなー。

「気前のいい知り合いだね」

「本当だよ」

チコリータはもちろん、遺伝技持ちのイーブイなんて出来すぎていて怖い。当面の運は使い切った気がするのが本当に怖いです。

「そっいや、君はバトルしないのか？」

「僕はいいよ。負けるのが目に見えてるからね」

苦笑する虫取り少年はいたって軽装だ。まだ春先だったのに半袖に虫取り籠で、その軽装のどこにモンスターボールをしまっているのかわからない。

「そっか。じゃあ俺、そろそろ行くな。今日中にキキョウシティへ着きたいから」

「頑張つて」

「あ！番号交換！」

「諦めたんじゃないのかよ！」

またもやシャツの端を掴まれて、思わず叫んでしまった。

「いい加減諦めろん！」

「めろん!?!」

3 (前書き)

今回は少々暴力的な描写があります。

冗談めかしつつも簡潔にお断りしてやったのに、結局諦めたのは俺だった。あんだけ拒まれたのによくやるよ。根性は認めるさ。でもなあ。

「人生つてままならないなあ」

早速の着信履歴（もちろん無視した）に溜め息をつくど、イーブイが気にすんなよとも言うように鳴いた。うん、気持ち切り替えてこうか。かけ直し？するわきゃねー。

只今30番道路突破中。なんだけど、ゴロウを叩きのめした張本人のアキラを下してから、人にもポケモンにも会っていない。虫除けスプレーしたっけ？つてくらい見事にエンカウントなしだ。

昨日までだったら有り難かったけど、今はイーブイもいるからな。経験値入らない方が痛い。

「ちよつと走ってみるか。モチヅキ、追いかけてこしよげ」

「ぶいー」

示し合わせたように同時に飛び出す。病院に居た頃は走りながらフリスビー投げたり、鬼ごっこして遊んだっけ。しかし病院に居た頃とは違い、今の俺にはランニングシューズがある。

思いっきり突き放してから振り返れば、慌ててスピードを上げるイーブイが居た。

ランニングシューズで走り回ると音を聞きつけてポケモンやトレーナーが寄ってくる。とは虫取り少年が別れ際に教えてくれた話だ。レベル上げは次の街の近くでと考えていたから歩いて草むら突っ

切っていたんだけど、もうすぐ31番道路だつてのにレベルは一切上がっていない。

確かにエンカウント率は下がってる筈だけど、さすがにこれはないだろ。1時間エンカウント無しとか、時間の無駄使いな気がする。

がさがさと草むらを踏みしめる音とは別に、ランニングシューズの低い駆動音が聞こえる。走り出すと加重の具合を感知して内臓されたモーターが回りだし、草むらもでこぼこ道もスケートリンクみたいにすいすい滑走できるようになる。

つつても小石とかそれなりの障害物があると躓くんだけどな。そのあたりは自分で回避しなきゃいけない。

しばらく走ってから速度を落とすと、イーブイは息一つ乱さず横に並んできた。やりおるな。

「元気だなあ。疲れないか？」

「ぶーい」

元気な返事にじゃあもう一走り、と言い終わる前にイーブイがフライングで駆け出した。って早っ！もうすぐ曲がり角だ、見失っちゃかなわない。

そう思つて駆け出したんだけど、イーブイは暗闇の洞窟の前で足を止めて中を覗き込んでいた。

「なんか居たか？」

目を凝らしても真つ暗で何も見えない。イーブイは何か感じてるんだらうか。

あ、居たつて言えばこの洞窟前に人が居るはずなんだよな。フラッシュあれば中を探索してやるのにつて言ってるやつ。居ないつてことは中に入れたのか、諦めたのか。

「本当に真つ暗だな。こりゃ中へは入らない方がいいだろ」
「ぶいー」

ゲームなら小さなダンジョンだけど、ここはワカバタウンからヨシノシティまで3時間はかかるような世界だ。洞窟の規模だって推して知るべしつてもんだらう。

どおん、とどこからか爆発するような音が聞こえて、突然のことに肩が跳ねてしまった。慌てて見回すが異変はない。空耳でないのはイーブイの視線が物語っていた。

「あつちなのか？」

「ぶいっ」

そうだ、ポケモン。この世界にはポケモンがいるんだ。俺の常識で言うなら爆発音イコール事故か事件だけど、ただのバトルかもしれないんだよな。

「見に行こう。ん？どうした？」

イーブイは耳をぴくりとそよがせて空を見上げる。直後に鳥の羽ばたく音が聞こえた。イーブイの視線に釣られて森の上空を見上げると、赤く巨大な炎が空ではせる所だった。思わず目を奪われる。

中から現れたのは炎の翼を持つ巨大な鳥。シロガネ山に居るはずの伝説の火炎ポケモン、ファイヤー。

クリーム色のはずの体が、炎を照り返して赤みを帯びた淡い金に輝く。翼や尾の付け根から端へ炎が薄くたなびくほど、鮮紅から橙へグラデーションして美しく揺らめいている。

その燃え盛る翼が力強く羽ばたくたび、羽毛が降るように小さな灯

火のような炎が舞う。それは地面に落ちることなく、すうつと青い空に溶けて消えてゆく。そしてファイヤー自身も吸い込まれるように、あつという間に蒼穹の彼方へ消えて行った。赤と橙と青の鮮烈なコントラストを残して。

ただただぼかんと見上げていた俺は、図鑑の説明文に“見とれるほど美しい”と書かれていたことにいたく納得した。図鑑では目つきの悪い鳥って印象だったけど、実物は全然違う。ありゃー釘付けにもなるわ。思わず感嘆のため息も洩れるってもんだ。

「はあー。こんなところでお目にかかるとはなあ」

「ぶーい？」

「あれはカントーの伝説のポケモン、ファイヤーだよ。

ジョウトとカントーのジムバッジを16個集めてやっと行ける洞窟に居るはずなんだ。今見れてラッキーだったな」

寿命伸びたかもな、と笑いかけたが、イーブイはファイヤーが飛び出して来た方を見やって、それきりじつと固まってしまふ。その様子は何かを警戒しているようだった。

まだなんかあるのかと身構えるが、特に変わったようには…いや、そーいや1時間以上エンカウントしてないんだよな。おかしいって言やおかしいような…でもなー、ゲームでもエンカウントしない時は本当にしないしなー。

「行ってみるか？」

無言のまま見上げてくるイーブイを、なあ、と促して走り出す。

実は一つの期待に心を踊らせていた。ホウオウの居た場所からは聖なる灰、ギラティナの居た場所からは白金玉が拾える。ならばファイヤーの飛び去った跡でも、なんか拾えるかもしれない。

即物的とは言うなけれ。どちらかと言えばポケモンの神秘的な部分に触れられるかもしれないことに心を踊らせていたのだ。例えば遺跡を探検するような、化石を発掘しに行くような、そんなわくわくとした気持ち。昔から世界の不思議図鑑とか大好きだったが、いくつになってもこの手のものに俺は弱かった。

31番道路を森に沿って走る。無闇に立ち入って迷わないよう、獣道を探すためだ。

程なくして細い獣道を見つけた。うん、これなら迷わずに入れそうだ。入ろうとするとイーブイが前に出て、長い耳で様子を伺いながら俺を先導してくれた。下生えが踏みつけられて少しだけ歩きやすくなっている道を辿る内に遠くでどん！という衝突音が聞こえるようになっていた。明らかに争ってる音だ。

森の中でもバトルつてするんだなあ。当たり前か、野生のポケモンが暮らしてるんだから。

「どうした？」

「ぶいつ」

突然足を止めたイーブイは、振り返ると小声で鳴いた。

「なにかいるんだな？」

静かな首肯に俺も頷き返すと、またイーブイは走り出した。音はまだ遠いけどまだなにかあるらしい。

進むにつれて異臭が鼻腔をつくようになってきた。たぶんこれは何かが焦げる臭いだ。ファイヤーさんてばレッツファイヤーしちゃったの？森の中で？火の気を見つけたら即通報だな。

及び腰の俺などお構いなくイーブイは走る。人間よりずっと鋭い感

覚をもつポケモンが平気そうなんだ、たぶん大丈夫なんだろう。やがて木々に遮られながらも人影が見えてきた。黒ずくめの人影に嫌な予感がする。

こちらへ歩いてくる男は、胸にでかかどRの文字を掲げていた。こんなところでロケット団かよ。ファイヤーといいロケット団といい、ずいぶん早いおでしたな。

「モチツキ、なるべく接近しろ！」

立ち止まって出した指示は反射的なものだった。獣道は一本道だから相手には気付かかれているし、道の先に進みたい気持ちもある。だから今はまだ逃走しない。

しかしイーブイの攻撃手段は接近して使う物理技だけだ。だから相手がどんなポケモンで来ようと、距離を詰めておいた方がいいと思っただのだ。

しかしロケット団はゴルバットを繰り出してきた。ということは最低でもレベル22以上、力でも速さでもかなわない。なーんでこんな序盤からゴルバットとか出してくんだよ！馬鹿か！

「こらえるー！」

早速逃げ出したい気持ちに駆られていたが、最初の指示が裏目に出ていた。いまさら反転したところで後ろから攻撃されるだけだろう。

「ゴルバット、かみついでやれ」

ずぶりと牙がイーブイの体に突き立てられる。ひええ、電光石火とかよらずつと痛そう！イーブイは、ぐう、と小さく呻きながらも耐えてくれたが、正直なところ後がない。

どうする、トレーナーにリアルファイト仕掛けるか？

「もう一度だ！」

「堪えてくれ！」

がぶりともう一度噛みつかれる。俺が迷った一瞬で勝敗は決まった。いくら技の優先度が高くても指示が遅ければ意味がないんだ。

倒れたイーブイをボールに戻して、でもチコリータを出すのは躊躇してしまふ。無駄に傷付けるくらいなら降参した方がいいんじゃないか？

「もう終わりか？煩わしいガキめ」

素早く大きな手に首を掴まれ、咄嗟に外そうと首元へ手をやる。しかし引き剥がそうにも指をかける隙間がない。

怯むことを期待して蹴ろうと思えば押し倒され、そのまま首を締め付けられた。まずい、あつと言う間に力が入らなくなってきた…

「ちこっ！」

「かみつく」

「ぎっ」

いつの間にかボールから飛び出していたチコリータが、視界の端で男に向かって体当たりしようとした。けれどゴルバットに噛みつかれ、ぶんつとそのまま振り回されてしまい、聞いたことのないような悲鳴を上げて茂みの中へ消えた。

助けに行きたいのに首から手が外れない。視界が白く染まって意識が遠退く。

死ぬのか？こんなのは、いやだ…

頬に何かがあたって、俺は意識を取り戻した。視界いっぱいにはチコリータの顔が映っていて、思わず飛び起きる。

「ちっっ」

「チコリータ：ワカナ！無事だな！？」

「ちこ」

ふらふらしているチコリータを抱き上げて、慌ててポケギアでステータスを確認する。ああ、やっぱり瀕死だ。

「今回復してやるから、少し待ってくれ」

靴を漁って元気の欠片を取り出す。セラピスト先生が持たせてくれた饞別の一つなのだけど、まさかこんなに早く使うはめになるとは思わなかった。

「ほら、飲んで」

「ちい…」

チコリータを優しく膝に乗っけて、その口元に元気の欠片を持って行ってやる。今にも倒れそうな弱々しさで鳴いたけど、ゆっくりと元気の欠片を咀嚼し始める。ごくりと飲み込む音がすると、チコリータはみるみるうちに元気を取り戻した。

「もう大丈夫か？」

「ちっこ」

「良かった。じゃあ次はイーブイだな」

チコリータはさっきの様子とは打って変わり、元気に膝から降りる。効果てきめんすぎだろ、元気の欠片。人間じゃありえねえわ。便利だからいいけどさ。

もう一つ取り出した元気の欠片を片手にイーブイのボールを探る。両方を手にするとボールの小窓に使いますか？と言うメッセージが出た。もしかしてこのままでも使えるんだろうか？

試しにはいを選んでみると、ボールの開閉スイッチのあたりから緑の光が伸びて、ボールに元気の欠片が引きずり込まれていった。すると見る間にイーブイのHPが半分まで戻る。へええ、ボール越してこうやって使うのか。

「あ…ロケット団、いないよな…？」

2匹の回復が終わるとようやく周囲に気が回るようになり、気を失う寸前のことを思い出して辺りを見回したが静かなものだ。同じく見回したチコリータが肯定するように頷いた。

「ちこ」

「うっし、じゃあ先に行くか」

「ちこ！？ちこちこちこ！？」

え、何？わかんないよ。

「えーっと、怖いならボール戻る？」

「ちこちこー、ちっこりー！」

このやりとりにはすごくデジャヴュを感じる。イーブイの言うことはなんとなく解るけど、チコリータの訴えはさ

つぱりなんだよな…

「ええと、俺は先に進もうと思う。火事がないかとか確かめに行きたいんだよ。」

もし何かあったら、ここに住んでるポケモンも大変だろ？」

「ちこ…ちこち、ちこー」

ぶるぶると首を振ってからまた何か訴えてくるがわからない。

必死に訴える顔と困惑した顔を突き合わせて居ると、腰に戻したボールから勝手にイーブイが出てきた。

「ぶいー。ぶいぶい、ぶーい」

「ちーちこー！」

イーブイが何かを話すとチコリータが俺の鞆に蔓を伸ばし、そして躊躇なく逆さまにした。

「えっ…えええええええー？」

唐突であまりの意味の解らなさに、俺は啞然とするしかない。

何事なんだと固まる俺の目の前でチコリータは散らばった鞆の中身の一つに蔓を絡ませ、俺に差し出してきた。それはさっきチコリータとイーブイに使ったアイテム、元気の欠片だ。

「…もしかして、飲めって？」

「ちこっ」

「ぶいっ」

あ、あー、なるほど。わかったかもしれない。ポケモンは瀕死になると気を失うから、同じように気を失った俺を心配してくれてたっ

てわけか！
やっべ、顔がにやけちまう。

「ありがとう、俺は大丈夫だよ。みんな無事で良かった」
「ちこ？」

心配してくれた2匹を抱き寄せると大人しく腕の中へ収まってくれた。しかし見上げてくる2対の目はまだ心配そうで、安心させるために言葉を重ねる。

「本当に大丈夫だよ。」

人間はポケモンと違って気を失っても瀕死になるわけじゃないから

「ちこー」

「ぶーい、ぶいぶいー」

「ちーちこ？」

「ぶい」

俺の言葉だけではまだ心配そうなチコリータだったが、イーブイと話すとなんからしく安心したように笑った。俺も安心させるように2匹の頭を撫でる。

「ありがとうな、2人とも」

「ぶーい」

「ちこ」

「いてっ！今のって叩く場面か？」

お礼を言っただけなのになぜ叩かれたんだ！？

静まり返った森を急ぐ。相変わらず焦げた臭いはするけど、それ以外変わった様子はないし、チコリータも気にしていない。たぶん安全なんだろう。

音につられたのか、時折木の上なんかポケモンの姿が見えるようになっていた。バトルしてる場合じゃないから、いったん立ち止まって虫除けスプレーをする。チコリータが不思議そうに匂いを嗅いで顔をしかめた。ヤな臭いだったらしい。ごめんな、我慢してくれよ。

獣道の終わりにあったのは、ぼつかりと青空を仰げる空間だった。真新しい切り株のある広場は下生えや周りの木が焦げている。その広場の端、傷だらけのピジョットがこちらを威嚇している。

なにこれ、どういうこと？さっきのロケット団がこのピジョットを攻撃したのか？周囲が焦げてるのはなんで？原因はファイヤーじゃないの？

理解が追いつかない。呆氣にとられてただ見つめていると、ピジョットの後ろに人工的な青色があるのに気付いた。たぶん人だ。ピジョットがそれを守ってるのは想像に難くない。

「お前の後ろにいるの、トレーナーか？ロケット団にやられたのか？手当が必要なら手を貸すよ。ああ、お前も回復しなきゃだめか」

少し歩み寄っただけでピジョットはけたたましい雄叫びを上げて睨み付けてきた。俺の隣でチコリータが固まっている。無理無理、俺ムツゴロウさんじゃないもん。こんな警戒心の塊に近付けるわけないわ。

つつても傷薬を投げて渡すわけにもいかない。ポケモンは人の作っ

た道具を使えない。あ、そうだ。

「これならお前も使えるだろう？オボンの実だよ」

鞆から取り出した木の実を、良く見えるように掲げてやる。ヨシノの案内爺さんから貰った2種の木の実の片方だ。オボンの実は最大HPの3分の1の量を回復してくれる。

転がすように投げてやると、上手い具合にピジヨットの近くで止まった。こちらを警戒しながら木の実を見詰めたピジヨットは、再び顔を上げると緩慢な動作で横にずれた。

「信用してくれた、のか？」

「ちこっ」

チコリータが頷く。いいのか、こんな簡単に信用しちゃって。そう思わなくはないが、そんな疑問は後回しだ。倒れてる人を助けないと。

倒れ伏した人は青い髪に青い羽織り、短く詰められた袴を纏った和服ながら活動的そうな青年だった。この格好にピジヨットつつたら思いあたる人物は1人しかない。

「キキヨウジムのハヤトさんか？」

座り込んだピジヨットが頷く。ビンゴ、キキヨウジムのジムリーダー、チートピジョン使いのハヤトだ。ロケット団とやり合ったんだろうか。

とりあえず抱え起こして息を確認する。してるな。煤けているけど、目立った外傷はない。

「怪我はないみたいだけど、頭ぶついたりしたか？」

ピジョットは緩慢な仕草で頭を振る。医者じゃないからわからないけど、たぶん大丈夫だろ。大丈夫じゃなかったとしてもどうにもできないけども！

「お前は？なにか状態異常とかあってないか？」

訪ねながらハヤトの腰を探る。袴に取り付けられたボールホルダーに収まったボールは5つ、表示はすべて瀕死を示す赤。そう、ピジョットのボールも赤だった。

「お前、瀕死じゃないか！」

気力だけで立つてたらしいピジョットは、今は座り込んで動かない。チコリータが心配そうに少しだけ近付いて様子を伺う。俺は慌てて元気の欠片を使ってやった。

「大丈夫か？オボンの実も食べるか？」

先ほど地面に転がしたのとは別の、新しいのを差し出す、それには見向きもせず翼を翻した。ぱつと白い羽毛が散る。が、それは地面に触れる前に全て中空へ消えた。チコリータがぼかんと見つめる。それが飛行タイプの回復技、羽休めだと気付くのに数瞬の間を要した。羽休めは最大HPの半分を回復する。すでに元気の欠片で半分回復してたから全快のはず。モンスターボールを見れば思った通り。羽休め優秀だな。つんつん、とピジョットがポケギアをつつく。

「あ、そうだ、病院に電話

…あれ？電波がない？」

ポケギアの通話画面の電波状況を示すアンテナは一本も立っていない。試しにかけても電波がないとのアナウンスが流れただけだった。俺の様子に首を傾げたチコリータに向かって、ピジヨットが何事かと問う様に鳴き、それから俺とチコリータの顔を交互に見やった。たぶんどちらもよくわからない、という顔をしていたと思う。ごめんな、なんで電波ないのか、本当にわからないんだ。うーん、どうすんべ。

「あ、そうだ！ピジヨット、キキヨウシテイまで行って人を呼んできてくれるか？」

「じょ」

ピジヨットはハヤトに寄り添った。置いていきたくないのだろう。

「心配か」

「じょっと」

「だよなあ。よし、もう2体元気になつてもらうか。たしか…」

まだ近辺にロケット団がいるかも知れない状況で、俺の駆け出しパ―ティだけじゃハヤトを守れない。しかし元気の欠片はあと2つしかない。

再びハヤトのボールを探る。さつき見たハヤトの手持ちは強化版だったから、とりあえず羽休めと催眠術を持つヨルノズク、あと電磁波を持つてるドンカラスを回復させる。

アタッカーを選ばなかったのは逃走の際に役に立たないと思ったからだ。攻撃は最大の防御だと言っけど、こいつら俺の指示なんか聞かないだろうし、相手を倒すのが目的じゃないからな。

ボールから出すと3羽は何やら話し合っている様子だったが、やがてピジヨットが飛び立った。って待て待て！

「ちょっと待て。ピジョット！これ持ってけ！」

瀕死のオオスバメの入ったボールを投げると、ピジョットは器用に空中でキャッチした。

「そのボールにメール付けたから、ジョーイさんに見せればすぐ助けに来てくれるはずだ！」

「ジョーット！」

たぶん理解してくれたのだろう。そのままピジョットは飛び去って行った。

見送り終わるとヨルノズクとドンカラスも飛び上がり、獣道の手前まで行ってからこちらを振り向いた。

チコリータは反射的にびくっと身をすくませた。苦手タイプばかりだもんなあ。

「え？着いて来いってこと？」

「ど」

「ハヤトさん背負って？」

「ど」

「怪我人は無闇に動かさない方がいいんじゃない？」

「ずくっ」

戻ってきたヨルノズクが袖を引く。わかりましたわかりました、背負えって言うんだろ。まあ、こんな森の中じゃタンカもはいれないだろうしな、道に出た方がいいかもしれない。

「問題は、距離が結構あるってことなんだよな」

自分より大きい青年を見詰めて、俺はついたため息を吐いてしまった。

ハヤトを背負って獣道を戻る途中、タンカを背負った救急隊員たちに会って俺はお役御免となった。気を失ったままのハヤトは救急車に乗せられ、ついでだからとご厚意で、付き添いと言う名目の元に俺も乗せて貰った。

町と町を繋ぐ道は草むらと段差ばかりで、車が走ることを想定したとは思えない作りだ。しかし救急車は障害をもともせず、キキヨウシティへ着いた。滑るような、高級車でアスファルトの道路を走るような乗り心地に、どんな技術が使われてるのか気になった。聞けるような状況ではなかったのでまたの機会にお預けだ。

なんて余裕をかましていられるのは全員が無事だったからに他ならない。ハヤトは入院になったけど数日で退院できるらしいし、キキヨウジムのお弟子さんが付いているから大丈夫だろう。ポケモンたちは言うに及ばず、早々に体調を回復している。

病院の外。自販機もある広場（というには小さい）のベンチに腰掛け、ミネラルウォーター片手にほっと一息つく。ずーっと水分を取ってなかった体に、水は染み入るようでこの上なく美味しく感じられる。それはポケモンも同じようで、チコリータとイーブイも一心不乱に水を飲んで（舐めて？）いた。

肌寒い風に西の空を見上げれば日は落ち始めて、空は薄い水色になり始めていた。簡易だが取り調べを受けたから、それなりに時間を食っていたんだろう。

直に見事な夕焼けが見られそうなほど晴れているが、そうなる前にポケモンセンターに向かいたい。今日は疲れた。

何とはなしにポケギアで時刻を確認しようとしたら、ゴロウからの着信履歴で埋まっていた。メッセージも満杯で、メールまで来てる。

無駄使いすんよ！と怒り任せに電話をかけ直すと、速攻でゴロウが出て、開口一番繋がったー！と叫んだ。耳元でうっせーよ！

「うっさつ！叫ぶなよ」

『死んだかと思っただぞ！無事なんだな！？』

んー？なに？なんかあったの？いや、俺はありまくったけど。

「無事だけど、なんかあったのか」

『留守電聞いてないのかよ！』

お前がキキヨウシテイに向かったあと、あのあたり立ち入り禁止になって、大変だったんだぞ！』

「まじ？」

『まじだよ。ポケギアからなくなるし、かかったと思ったら留守電になるし、心配したんだからな！』

「そりゃ悪いことしたな。元気だよ。お前らは？」

『こっちは大丈夫』

「じゃあ切るわ」

『え、ちよつ』

気にせず通話を終わらせる。無事ならいいよ。話すこともうないよ。チコリータたちの水飲み皿を片付けて立ち上がる。昼飯食いそびれたせいで腹ぺこだ。

「よし、飯食いにいくかー」

「ちっこー！」

「ぶいー！」

「リヨウくん」

「はい？あれ、君は…」

「久し振りね。覚えてるかしら」

自分の名を呼ばれて振り向けば、見覚えのある顔にぶち当たった。気の強そうな顔つきの、ポケモンレンジャーの少女。出会った日には茶髪だったが、今は鮮やかな水色の髪が目を引きいた。うーん、人違いじゃないよ、な？

「覚えてますとも。ヨシノシティではお世話になりました」

「あら、ご丁寧にどうも。私だってよく解ったわね」

この世界で始めて会った人はにっこり笑った。ちよつと自信がなかったことはおくびにも出さない。だって失礼だろ。

「そりゃあもう、お姉さんには助けて頂いたんですから。」

あの時は本当に助かりました」

「どういたしまして。」

ちよつと時間を貰ってもいいかしら？」

「ぶいっ？」

大人しくお姉さんを見上げていたイーブイが目を見開き、てそわそわしだした。その様子に触発されたのか、チコリータも落ち着きを無くして視線をきよろきよろとさまよわせる。多分チコリータには時間を貰うが解らず、イーブイには解ってしまったんだろう。昼飯を食いつぱぐれたまま夕方を迎えていた俺たち、そのご飯の時間がまた伸びそうになった事が。

「悪いけど後にして貰えないかな」

「もう夕方なのにか用事？」

「俺たち昼飯食いつぱぐれててさ」

「なるほど」

イーブイの様子に気付いていたのか、お姉さんはあっさりと納得してくれた。

「んー、じゃあ歩きながらじゃ駄目かしら」

「俺は構わないよ。お前たちもいいだろ？」

一応2匹にも聞いてみると、頷くなりさつさと歩き出した。その背中には飯はよ！と書いてあるように見える。お姉さんが微笑ましそうに笑った。

冷えた風がイーブイの首の周りの長い毛をなびかせる。日中は散歩にちょうど良い気温だが、夕方にさしかかればまだまだ冷え込む。チコリータはボールに戻した。ジヨウトでは連れ歩きキャンペーンをやっているから、ほとんどの場所にポケモンを伴って入れる。けれどそれは1匹が上限だった。ドラクエみたいにたくさん連れ歩いても楽しそうなもんだけどなー。

「歩きながらで悪いけど」

「いいえ、突然押しかけてごめんなさいね」

「気にしないで。」

連絡先知らないんだから、しょうがないですよ」

「そうね」

しばし無言が落ちる。言葉を探すように視線をさまよわせるお姉さんを横目に、ポケギアをいじって病院からポケモンセンターへの地図を確認する。

「ポケモンレンジャーの仕事は知ってるわよね」

幾分、声量を落とされた声に顔をあげた。あんま聞かれない話

だったのだろうか。悪いことしたな。

「今日のこと、お礼を言うわ。有り難う」

「今日の？」

「私達も森にいたのよ」

なんと。ハヤトだけじゃなかったのか！

「ただ、私たちは足を引っ張ってしまつて」

抜けた主語は“ハヤトの”だろう。

お姉さんがレンジャーなことと昼間のことを合わせて考えると、なんとなく想像が出来た。

たぶんだけど、あそこでポケモンが危機にあつた。それはジムリーダーのハヤトと協力体制を敷くような規模だった。

ポケモンレンジャーは手持ちを持たず、現地のポケモンの力を借りる事を考えれば、あの時エンカウントしなかったのは、作為的に森周辺のポケモンが遠ざけられていたんじゃないかな。もしくは自分たちの身の危険を感じて逃げ出したか。

ロケット団との遭遇したあたり、作為を感じる。けど、人為的にポケモンを広範囲に渡って遠ざけるってできるのかな。

「あの時、あのあたりは立ち入り禁止になつてて、ポケギアもモバイルも通信が使えなくて。

誰にも連絡できない状態で…

あなたが見つけてくれなきゃ、危なかったと思う。だから有り難う」

「いや、偶然だから気にしないで。助かって良かったな」

すべて偶然の産物だ。

立ち入り禁止になっていたなんて俺は知らず、探検気分で森に踏み入り、ロケット団には1人しか会わず、気を失っただけで済んだ。運が良かったただけだ。

俺はそのくらいにしか思わなかったけど、お姉さんは違うみたいで、横目で窺った横顔は沈んでいる。

仕事で失敗、しかも人を危険に晒したことで、後悔してるんだろうか。

「お姉さんたちが頑張ったから、神様がちょっとだけ手助けしてくれた。そうなんじゃない？」

「え？」

「仕事頑張ってるんでしょ？そういう人のところって、幸運も悪運も舞い込みやすいと思う。」

「ちょっと聞くけど、お姉さんたちも必死に応戦してたんじゃない？」

「え、ええ。できる限り注意は引き付けてたけど……」

俺が1人として遭遇しなかったのは、お姉さんたちの頑張った結果だったわけだ。

「お姉さんたちが頑張ってくれたから、俺は森に入ることができた。もし何人にも会ってたら、きっと俺、進むの諦めてたよ。」

「つつか殺される危険もあったわけ。うん、お姉さんたちががっつり仕事してくれて命拾いしたな。」

「だから、みんなが助かったのは、お姉さんたちが頑張った結果だよ。」

「あらやだお姉さんてばこんなトコで目え潤ませちゃって。やっぱ歩

きながらする話じゃなかったね！

「ほい、ティッシュ」

「ありがとう」

ずびーずびーと、なるべく静かに、何回かにわけて鼻をかんだお姉さんへ、ごみ袋用のビニール袋を差し出す。放り込んでから顔を上げると、男のクセに準備良いわね、と笑った。

「お姉さんみたいな子を慰める時は必須ですから。いてっ」

ぱしっと叩かれた背中がじんじんする。力強いな！

「生意気！

有り難う。私、もう行くわね」

「おー。気を付けて行ってらっしゃーい」

「あなたもあまり無茶しないのよ。夜の外出も控えなさいな」

「あー、はい」

ぴつと人差し指を立てて注意してきた。少し面食らって歯切れの悪い返事をする、呆れたような顔をされて、弁解する間もなく諭された。

「危ない目に会いたくなかったら気を付けるの。」

「ちゃんと自衛しないと大変なことになるの、わかるでしょ？」

「はい、わかりました」

「わかったならいいわ。じゃあまたね」

若干相互の認識にずれがあったと思うが、まあ危ないことに首を突っ込むつもりはなかったので頷く。

少しだけ目を赤くしたまま、お姉さんは肩で風を切るように去っていった。堂々と歩く背中ではキャリアウーマンみたいで格好良い。ぼんやり見送っている、いつの間にか隣に並んでいたイーブイが足に体当たりをかましてきた。

「ぶいーっ」

「おわわ、危ないよ。なに？」

「ぶいーい」

「ああ、早くってことか。はいはい」

走り出したイーブイを追って、少し迷子になったのは「愛嬌だ。

「お前に釣られて走っちゃったけど、ここどこよ？」

「ぶいー」

「あ、こら！良い匂いするからって民家に侵入すんな！

ほら、抱っこしてやるからもうちょい我慢しろ」

「ぶーう」

「ぶーじゃない。元はと言えば、お前が適当に走るから…」

「ぶーう」

「お前…尻尾でぺしぺしすんのやめろよ」

ぺしぺしと不満そうな尻尾に叩かれながら、俺はポケモンセンターを探してしばらくさまよったのだった。

懐かしい香りのする街、キキョウシティ 1 (後書き)

次から2話はヒビキ祭りです。

この時期、ヨシノからヒワダまでのポケモンセンターの無料宿泊施設は混み合っているのが当たり前らしい。

だからキキョウシティの宿泊施設も2段ベッドが2個づつ設置された狭い部屋に相部屋で泊まるのが普通だ。広い和室だと10人くらいが布団を並べて修学旅行状態になっている。

食事を済ませて割り当てられた部屋に向かった俺たちは、偶然にも見知ったを見つけて驚いた。

「失礼しまーす…あれ、ヒビキくん？」

「あー、リョウくんだ！」

「なに、お前らも知り合い？」

うん、そうだよ。とベッドに腰掛けたヒビキが答えると、正面に腰掛けた2人の短パン小僧がよかつたな、とはしゃぐように笑った。トレーナーたちに釣られるように、ヒノアラシ、ポツポ、コンパンにビードルがどこか嬉しそうな顔をする。コクーンだけは伺えなかつたけど。

「早かつたねー。もうジムは行った？」

「いや、今日着いたばかりだから。ヒビキは？」

隠しきれない喜びの笑顔でヒビキがバックを漁る。手のひらサイズのケースを開くと、そこには翼を模したウイングバッジが納められていた。

ヒビキとヒノアラシとポツポは得意そうに胸を張り、イーブイがおめでとうとでも言うように鳴いて、チコリータはぼかんと2人を見

つめていた。バツジがまだわからないのかな？

「おー、おめでとう！」

「えへへ、有り難うー」

「早いなあ、すごいよ。ヒノアラシだけで突破したの？」

「ううん。ポツポも頑張ってくれたよ。」

でも、ごめんな」

肩に止まっているポツポの首をかいてやるヒビキは苦笑いだ。瀕死にしちゃったのだろうか。

「相手はジムリだろ。しゃーないよ。」

ヒビキは下段使うのか？」

「うん。上だと落ちちやいそうだから」

「あはは、よっぽど寝相悪くなきゃ落ちないって」

下段のベッドに荷物があるのを見て問えば、なんとも可愛い答え。俺は笑いながら短い梯子を半分ほど昇り、自分の荷物を上段に置いて、中から風呂セットを取り出した。

「来たばっかで悪いけど、風呂行ってくる」

「え？もうそんな時間？」

「いや、まだ20分はあるけど」

ヒビキと虫取り少年のやりとりに、自分が知らない決まりがあることに気付いた。

「なに？風呂の時間って決まってるの？」

「ん？うん、そうだよ。泊まる人が多いから、部屋ごとに入れる時間決まってるんだ」

「へええ、知らなかった。教えてくれて有り難うな」

「えへへ、どう致しまして。リョウくんも一緒に話そうよ」

「んー、じゃ、お言葉に甘えて」

本当に修学旅行のようだ。なんか懐かしくて楽しくなっちゃうな。

鞆から予備のバスタオルを取り出しヒビキの隣に敷く。外で寝転んだり森を探索したから汚さないようにと考えてだ。

その上に腰をおろすと、イーブイが膝に飛び乗ってきて喉を鳴らした。未だ床にいるチコリータを手招いて、近付いたところを抱き上げて俺の隣に下ろした。

その際、嫌がるように叩かれたのは言うまでもないだろう。お兄さんはちょっと寂しいです、ワカナさん…

柔らかなバスタオルの上に乗ったチコリータへ、ヒビキの膝の上からヒノアラシが首を伸ばして挨拶するように鳴いた。嬉しそうにチコリータが答えてイーブイも鳴くと、ポッポやコンパンたちも短く鳴いた。それぞれ挨拶をしたらしい。

「挨拶できたか？」

「ぶいー」

「そうか、偉いぞ」

こう、和気あいあいとした雰囲気は凄く好きだ。猫の集会だとかドッグランを駆け回る犬たちとか、見るだけで和む。

初対面でもきちんと挨拶を交わせるよい子たちを褒めるつもりで撫でると、案の定チコリータには叩かれた。いつか届くといいね、俺の愛情。

「…お前、ポケモン好きクラブ？」

「え？」

「あはははは、確かに見えるかも」
「マジで言ってる?」

虫取り少年の言葉に笑ったヒビキは、ちよつとだけ、とまた笑った。
えええええ…あれと一緒にされるの嫌なんだけど!

「別に語ったりしないから安心していいよ」
「あ、うん」

やべえ、なんか引かれてる…?
自分とポケモンのやりとりを反芻しながら何が悪かったか考えていると、ヒビキがいいと思うよ、と切り出した。

「ポケモン好きだからそんな風にするんでしょ」
「え、ああ、うん。そんな風って?」

撫でるのは普通じゃね?叩かれても構うのが普通じゃなかったってこと?もしかして、チコリータは心底俺を嫌がってるように見えるんだらうか?

いやいや、でもほら、俺のこと心配してくるし木イチゴもくれたし、たまには普通に撫でさせてくれる時もあるし、そんな、大嫌いとか…ない、と…信じたい気持ちで一杯です…

あつという間にネガティブな方へ加速していく思考。それにストツプをかけてくれたのはヒビキだった。

「悪いわけじゃないと思うよ?タオル敷くの」
「へっ?」

……あー、これはポケモンのためじゃなくて、ヒビキの布団汚さないようにって。

俺たち結構汚れてるからさ」

部屋に入るなり風呂へ行こうとしたのもそこに起因している。一応、宿泊施設の玄関でチコリータたちの足は拭いてやったけど、人様のベッドに乗っかる格好じゃないかな、と思っ

「そうだったの？ありがとうー」

「…細けえ…」

「うっ。細かいのはわかってるよ！性分なんだから仕方ないだろ」

「しょうぶんて？」

「性格のこと」

少年たちの飾らない言葉がちょーっとだけ心に刺さった。これがジエネレーシヨンギャップか…？

「いいじゃん。僕はリヨウくんのそういうとこ好きだよ？」

「ありがとう。ハグしてキスしてやりたい気分だよ。悪魔のキス」

「あ、それはいいや。死にそう」

「そう嫌がられると、ほんとにぶちかましてたくなるな」

「え、じゃあしていいよ」

逃げられると追いたくなる。なら逃げなければいいんだ！
そんな単純な思考のヒビキに笑ってしまふ。可愛いね。

「おっしやわかった！存分に味わえ！」

「ええ！？やるの？」

わー！やめて、死んじゃうー！」

慰めてくれるヒビキに大丈夫だと言う気持ちを込めてふざけて返せば、打てば鳴るような答えが返ってくる。かわかれてもヒビキは楽しそうに笑った。無邪気だなー。

「お前ら仲良すぎだろ」

「兄弟、とか？」

呆れたような突っ込みと、自分でも半信半疑に思ってるような口調の問いに面食らってしまう。

「え？いや、会ったの3日前だけど」

「マジで!？」

「うん、ワカバタウンで会ったんだよね」

「ね」

小首を傾げて同意を求めてきたヒビキに、同じ様に俺も首を傾げてやると嬉しそうに笑った。やっぱ子犬っぽいなあ。

しかし むしとりしようねんたちは ひいている！

そんなテロップが頭に浮かぶような沈黙に耐えられず、今度は俺から問いかけた。

「兄弟っぽいか？」

「うーん……」

「ブラコンっぽい」

「それだ！」

「まじでか」

こくこく頷かれて、またもや俺は自分の行動を反芻した。

んー、じゃれ合う範囲としては普通だと思うんだけど。本気でキスとかハグとか言ってるわけじゃないし。

「僕は嬉しいけど」

「ん？」

「兄弟とか年の近い友達が居なかったから、嬉しいよ」

「…ヒビキくんは良い子だなあ」

「もっと誉めていいよ?」

「よーしよしよしわしゃしゃしゃしゃ」

「あはははは！ポケモン扱いじゃん！」

ヒビキの頭をクシャクシャに撫で回すとけらけらと笑い声をあげた。いつの間にかうとうととしていたヒノアラシとチコリータがびくつとして辺りを見回す中、イーブイは爆睡している。

「ほんと仲いいな」

「…恋人みてえ…」

「こいびとお!?今のは聞き捨てならない!」

「僕、女の子がいい」

ゲイ疑惑は全力で否定させて貰う。つつかこんくらいで疑ってたら社会人の飲み会なんぞ行つてられんわ。

「俺も女の子がいい。柔らかくて良い匂いがして、優しいし」

「すけべっ!」

「すけべがいるぞっ!」

「わー、リヨウくん、さすが年上…」

この夜、俺はエロス男爵の爵位を賜ることになった。10歳児のエロの基準とかもう遙か彼方だもの、えろえろでも仕方ないじゃねーか!

風呂に入って速攻寝落ちた翌朝、俺は筋肉痛に苦しんでいた。動く度に足と腕と尻が痛い。

ハヤトを背負って獣道を歩いたのが相当きてたらしい。大人のままだったら全然平気だったのによ……

詮無いことを考えながら荷物を抱えなおす。

「つしょつと……」

筋肉痛の俺は部屋の掃除を免除される代わりに、同室のやつらの洗濯物を抱えてランドリーへと向かっていた。

しっかしこれが結構重労働で、俺の筋肉痛はクライマックスを迎えていたりする。いてえー。

ポケモンセンターの無料宿泊施設は、青少年の家に似たシステムで運営されている。もしくは学生寮みたいな感じだ。

部屋にキッチンなんかなし、バストイレも共同で、毎朝掃除の時間がある。

シートなんかの備品の洗濯は雇いの人やってくれるけど、洗濯場に運ぶまでは宿泊者の仕事だ。

バスタオルだって持ち込みだし、服とか洗いたいものがある時はランドリーへ行って自分でやることになる。ランドリーも無料だからトレーナーはほぼ全員利用していて、いつ行っても混んでるのが困った所だ。

22時を過ぎると使えなくなるし。

だから大型の洗濯乾燥機が並ぶランドリーでは、シエアが当たり前

になっている。知らない者同士で、例え空きがあろうとも一つの洗濯乾燥機に限界まで放り込み、次の人のためを考えて洗濯するのだ。さすがに女の子は女の子同士でしかシェアしないけどな。

で、同室に泊まるとやはりそこで話が纏まるわけで。つか、虫取り少年たち溜め込み過ぎだろ。俺やヒビキの2倍はあるぞ。軽装のくせにさあ…あとパンツためるなよ！一週間ぶんくらいあるとかさすがに汚えよ。お兄さん引くわあ。

ちょうど空いていた洗濯乾燥機に片っ端から放り込む。満杯を少し越えてるけど、ちょっとくらいなら平気だろ。洗剤と柔軟剤をセットして…はい、あとは1時間待つだけだ。飯食いに行こう。

部屋に戻ると虫取り少年たちは既に居なかった。

「あれ、ヒビキだけ？」

「つつかもう掃除終わったんだ？」

「うん。食堂で席取りしてくれてるよ」

「そうか。連絡係りご苦労さん」

「どう致しまして」

ランドリー行ってから15分くらいしかたつてないつつつに。まー、小学校の掃除の時間を思い出せば納得の時間ではある。

「うし、行くぞー」

「ひのー！」

「ぶーいー！」

「ちっこ」

3匹が嬉しそうに飛び出して行く。特にヒノアラシとイーブイは早く早くと急かすように、振り向きながら先へと進んで行く。ヒノアラシも食いしん坊だったのか。

「僕たちねー、バイキングにするんだ！リョウくんは？」

「俺は和食A」

言いながらぴつと食券を出してみせる。定食の食券は前日の21時まで買っておくと、少しだけ安くなる上に9時までは絶対確保されるので、のんびりしたい人や混雑を避けたい人にはお勧めだ。

「準備万端だね」

「食券買うのに並んで受け取りで一回並ぶの、朝からだとめんどく
て」

「…賢い。僕も買っておけば良かった」

どうやら手間を考えていなかったようで、ヒビキは真顔で言った。

「いや、夜の内に並ぶか朝並ぶかの違いだし、そんな深く考えなくてもいいんじゃない？」

「そうだよな。うーん、でもやっぱり朝から並ぶより夜の方が良かったなー」

朝とか、なんかだるい」

穏やかながら元気なイメージのヒビキの意外な発言に俺は軽く吹き出した。

「だるいって、ヒビキくんもそんなこと言うんだ」

「え？言うよ。僕めんどくさがりだもん」

「そうは見えないけど。洗濯だって溜めてないし」

「それはさ、溜めた方が面倒だから。」

旅に出る前、母さんが1人で何でもできるようにしなさいって家事を任せてきたんだけど、洗濯でも何でも溜めるとすごい面倒になるんだもん」

その時のことを思い出したらしく、ヒビキは思いつ切り顔を顰めた。わかるわ、俺も独り暮らし長いからすげーわかる。

「洗い物はこびり付くし、大量の洗濯物は畳むのに時間かかるし、たまった埃ははたきかけても雑巾で何度も拭かなきゃ綺麗にならないし?」

「そう! そうなんだよー!

任されてわかったけど、僕、母さんに頭上がらないよ」

ヒビキの話しぶりからするに、ヒビキ母は本当に全部を息子に任せ、失敗から学ばせたようだ。

そこまでしてくれる母親って凄いと思うし、失敗からちゃんと学ぶヒビキも偉いと思う。

「いいお母さんだな。ヒビキもいい息子だし」

「えへへ、ありがとう」

はにかむヒビキは幸せそうだった。良い子に育った理由、少しだけわかった気がするよ。

朝食の時の話の流れで、俺とヒビキはキキョウシティを散策するこ

とになった。と言うのもヒビキがジム以外オールスルーしてた事が判明して、俺が案内することになったのだ。

始めて訪れた場所の案内とかおかしいだろ、という突っ込みは誰からも入らなかった。一晚同室で過ごしたただけだと言うのに、少年たちにはすっかり変わり者と認定されていたようだ。

なんつつか、子供の世界って結構厳しいよな…

「この近くだとアルフの遺跡で岩砕きすると欠片が手に入るわけ」「へえー。見かけたらとにかく砕きまくってやればいいんだね」

たまにポケモンが飛び出してくる事とハートの鱗の事は言わなかった。あんまり教えすぎて冒険心を砕いちゃ可哀想だし（というのは建て前で反応が楽しみなだけ）、ハートの鱗についてはやや廃人向けだ。初心者のヒビキに説明すると支障があるかもしれない。

忘れた技も後で思い出せるから、取り敢えず新しい技を覚えさせて試そう、なんてもし考えてしまったら、この世界では確実に詰む。つつかそれで詰みかけたのは俺です。ゲームだったからリセットしてなんとかなっただけだなー。

「片っ端からやってやれ。たしか欠片一つにつき、木の実3種詰め合わせて各5個づつくらいくれるはずだし、コガネまで行けばフラワーショップでプランター買えるから増やせるようになるよ」

「コガネかあ…ワカバに居た時はすつごく遠いって思ってたけど、ヒワダを越えたら次なんだよね」

「だな」

「なんかどきどきする！都会すぎて迷ったらどうしよう」

「いいじゃん、そのまま探検すれば」

「それもそつか。わくわくするね、ヒノノー！」

「ひのー！ひのー」

「ちーこちこ、ちっこ」

石畳を踏みしめながらきよろきよろしていたヒノアラシが楽しそうに同意して、チコリータに向かって何かを話す。チコリータも楽しそうに受け答えをしている。こう言うやり取りは昨晚からよく交わされていた。

やはり同じ研究所にいたせいか、2匹は気安くじゃれついて良く話す。気の強いところのあるチコリータに、ヒビキと同じく気性の穏やかなヒノアラシは合っているようで、2匹の仲はすごく良さそうだった。

「可愛いね」

「ああ。なんか、2匹とも電池で動いてそうだよね」

「ぶっ！あっははは、僕も同じ事考えてた！ぬいぐるみみたいだよね」

トイブードルとかティーカップブードルとかと一緒に、まるで愛らしいぬいぐるみみたいな容姿のポケモンがちまちま動くところを見ているとそう思ってしまう。

実際のところは俺らよりずっと遅しくて強い生き物なただけだな。

「ひのー？」

「ちっこ？」

何がつぼったのか爆笑するヒビキを、2匹が不思議そうに見上げた。

「何でもないよ。ただヒノノとワカナが可愛いって話」

「ひっの」

「ちこー！」

「痛っ」

照れたらしいヒノアラシの背から、ぽんつと炎が噴出される。と同時に俺は足をチコリータの頭の葉っぱに叩かれていた。褒めたのに。

「ワカナ、可愛いって言われるの嫌か？

痛いっ」

無言で叩かれた。それを見ていたヒビキはまた隣で吹き出した。

「ぶつくく、り、りようくんって、いがいと天然だね」

「え？そう？割とわかりやすい天然だと思うけど」

「あはははは！自覚あるの！？あははははは！」

いや、だってたまに言われるからさ…少し天ボケな部分があるの、自分でもわかってるわけよ。他人から見た時、どんな所がボケてみえるかはわからないけども。

「ヒビキ先輩にや負けるけどなー」

「えー？そうかな。僕、そんなに天然ボケじゃないと思うけど」

「知ってるか？本当に天然ボケの人ってそう言うんだぞ。」

酔っ払いが酔ってないって言うのと同じだな」

「えっ、まじで？じゃあ僕天然ボケ！天然ボケです！…やっぱやだ」

天然ボケを否定するために慌てて天然ボケ宣言をかますヒビキは間違いなく天然ボケだろう。笑わずにはいられない。

しかもやだってなんだよ。素直すぎて面白いぞ。

「ヒビキくんはそのままでいいと思うよ」

「えー」

「そんな不満そうにされても、どうにもなんないから」

「えー」

1度目は心底不満そうに、次はふざけて不満を装ったヒビキは、すぐに相手を崩した。

「まあいいや。嫌われるわけじゃないもんね」

「そうそう。ヒビキの天然っぷりは素直な証拠だから美徳だよ」

「ありがとー」

「ひのっ」

何故かヒノアラシがチコリータに叩かれていた。

「どうしたんだろ？」

「八つ当たりでしょ？」

「八つ当たりって、何かあったか？」

「ん？うんー。ほら、リヨウくんが僕を褒めたから」

「え、それってもしかして…痛い！痛いワカナさん！」

嫉妬してんの！？と言おうとしたらめっちゃ足を叩かれた。痛いよ、地味に痛いんだって。凶星だったらしくいつもより力が籠もってて痛い。

「あははははは。幸せの痛みだねー」

「ひのー」

「痛い痛い、そんな叩くなって」

「ヒビキくんも煽るようなこと言わないでくれよ」

「あはははは」

笑ってないで助けてください。あとドMみたいに言わないでくれ！

3・5 閑話2、性格補正と努力値の話（前書き）

設定資料集のようなものその2です。

これから4話使って、廃人初級レベルの解説っぽいものをしていきます。ゲームをしてない方や、性格補正・努力値などがまったくわからない方向けです。

この世界にもゲームの隠しステータスはございますのでそれを説明させて頂きますが、詳しい数値などは今後出す予定はございません。

HGSSの仕様をご存知の方には、そうじゃないだろ！と突っ込まれるくらい簡素なので、リョウはこういう認識でこの程度の廃人だのご理解頂ければ幸いです。

理解し辛いなどのご意見がありましたら、遠慮なく指摘して頂けると助かります。

3・5 閑話2、性格補正と努力値の話

ヒビキが特性の意味とか性格補正がわからないと言うので、ポケモン塾へ行くことになった。ジム戦前に塾講師のジヨバンニ先生に捕獲され、説明も受けたがイマイチわからなかったらしい。

「最初はそんなもんだよ」

「リョウくんもわからなかった？」

「ああ。性格だけでも25種類あるのに、特性なんて数え切れないほどあって、効果もいろいろだろ？」

「今だって有名どころしか覚えてないよ」

一応、病院にいる間に覚えてる限りの知識はノートに書き出してみただけど穴だらけだったんだよな。

「性格補正つてのは、ポケギアで確認できる。」

例えばワカナは意地っ張りだから、攻撃が上がりやすくして特攻は上がりにくい」

「へー。攻撃と特攻つてなに？」

あ、そっからか。

「うーん。じゃあまず技の種類についてだな。」

どんな技も、タイプに関係なく3つに分類される。

物理・特殊・変化の3つだ。

物理はそのまま、体当たりとか引っ搔くとか、あと葉っぱカッターは草タイプの物理技だな。

特殊は火の粉とか水鉄砲とか、それぞれ炎タイプと水タイプの特殊技。

変化つてのはちょっと変わってて、尻尾を振るで相手の防御を下げるとか、剣の舞をして自分の攻撃力をぐーんと上げるとか、毒の粉をまいて相手を毒状態にするとか、雨乞いで天気を雨にするとか、状態を変化させる技だな」

「…いっぱいあるね」

ヒビキは引け腰になっていた。最初から詰め込みすぎたか？

「とにかく、まずはこれ覚えればいいから。

物理技は攻撃の高さに比例する。

特殊技は特攻の高さに比例する」

「それなら覚えられるよ！」

最初から簡単にすべきだったみたいだなー。うし、なるべく省くか。

「じゃあ後はわかるな。防御と特防はなんだ？」

「うーんと、防御が高いと物理技を受けた時にダメージが少なくて、特防が高いと特殊技を受けた時にダメージが少なくてすむ」

「正解！」

偉い？とはにかむので偉い偉いと褒めてやる。素直だからやりやすいね。

「ステータスは他に素早さとHPがあるけど、これは説明しなくても大丈夫だよな？」

「うん。HPが0になるとポケモンは瀕死になる。だからHPが高いほど瀕死になりにくい。」

「んで、素早さが高いほどバトルの時に早く技をだせる」
「その通り」

基礎はこんくらいでいいか。次は性格だな。

「最初の話題に戻るぞ。」

ポケモンは性格によって上がりやすいステータスと上がりにくいステータスを1つずつ持つ」

「それが性格補正？」

「そう。上がりやすいのは1.1倍、上がりにくいのは0.9倍になる。」

最初は微々たる差だけど、最終的にはかなりでかくなる。

次の話はおおよその目安だと思って聞いてくれ」

いろいろ計算とかあるから本当はこんな単純じゃないけど、それは必要になった時に自分で調べればいい。今はとにかく、なんとなく知ってればいいだろう。」

「例えばLv50で素早さが100だとする。」

補正なしの性格はそのまま100で、1.1倍なら110、0.9倍なら90になるよな」

「へえ、かなり差が出るんだ。同じポケモンでも素早さが上がりやすい性格だったら先手が取れるんだね」

「だな」

補正の有る無しの重要ささえわかればいい。

本当はこんなもんじゃなくて、レベルが上がるほど、つまりステータスの値が大きくなるほど顕著になるんだけど、まあそれもその内でもいいだろ。今話しても、実感が沸くころには忘れちゃってそうだし。」

「さらにその長所を伸ばしたいなら、努力値を気にしなきゃいけない」

「どりよくち？」

あー、調べて無かったけど、努力値って名称あるのかな？ゲーム内では基礎ポイントって名前なんだよなあ。

「努力値ってのは俗称で、本当は基礎ポイントって言う。

タウリンとか、ポケモンを育てる使いきりのアイテム手に入れたら説明読んでみ。基礎ポイントが上がるって書いてあるはずだから」

傷薬とか人間が作ったアイテムの使い方はアイテムに書いてある。

元気の欠片についても、鞆探したら説明書出てきたしな。

「名称が違うだけで同じなんだ」

「そうだよ。俺は俗称の方がわかり安いから努力値って呼んでるけど」

「なんで？」

「努力して手に入れるもんだから」

「ふうん？」

よくわからないらしい。まあまだ説明してないからな。

「素早いポケモンを倒すと、自分のポケモンも素早くなるのはわかるか？」

「そうなの？」

「そうなんだよ」

まだ実感したことがないらしく、ヒビキはわからないと言った表情だ。

「コラッタばっか倒したら素早さが上がるし、オタチばっか倒すと

攻撃が上がる」

「へええ、へええ」

「ただし努力値がどのくらい溜まったかは、経験値みたいには見えない。」

実感できるのは、そうだな。レベルアップの時にステータスが4も5も上がった時か」

ステータスは普通0〜3づつしか上がらない。しかし自分よりずっとレベルが低いコラッタとかを倒しまくってからレベルアップすると、一気に5とか上がる時があつて、その時ばかりは努力値の存在を感じられる。

「そつか、頑張つたご褒美にステータスがいっぱいあがるから、努力値」

「そうだと思うよ」

最初に呼び始めたやつを知らないから、本当のところは知らないけどな。

まあいいや、次次。

「最初の話題に戻るぜ」。

性格補正だけど、ステータスで確認できる」

ポケギアでチコリータのステータスを参照すると、攻撃の文字は赤く、特攻の文字は青くなっている。

「この赤い方があがるやつ。青いのはあまり上がらない」

「へええ、じゃあ僕のヒノアラシは…あれ？」

ポケギアを覗き込んでクエスチョンマークを浮かべてるので補足し

てやる。

「ヒノアラシの性格は照れ屋だったよな」

「うん」

「25種の内、照れ屋を含む5種類はステータスに補正がかからない。後は各5種類づつ、HP以外に補正がかかるようになってる」

「HPは増えやすいとかないんだ」

「ああ。でもHPにも努力値は入るから、伸ばす事はできる」

ただし同じ種族でも個体によってステータスの伸びやすさは違う。

俗称で個体値と呼ばれる隠しステータスの存在があるからだ。

最低限の上昇しかしない0から、最高の成長率を見せる31（なぜかVと呼ばれている）までの32の値がそれぞれのステータスに設定されている。これはそのポケモンの才能みたいなものだ。人間で例えるなら、同じ野球選手でも足の速さが違う、みたいなものだろうか。

性格補正ほど重要ではないけれど、勝率を上げるには個体値も重要だと思う。ただし廃人要素が濃縮還元された話になるのは目に見えてるし、現実ではあまり気にしてもしょうがないものだと思う。ポケモン乱獲して強い個体値もつのを厳選するとかヒビキはしないだろうし。説明飛ばすか。

「あとは種族値な。」

「コラッタが素早いってのはもうわかってるよな」

「うん」

「他には、ホーホーはHPが多いとか、トランセルは防御が高いなんていうその種族のステータスの特徴、それを種族値って言う」

「ほつほつ」

ホーホーとほうほうかけた？とは聞かなかった。優しさのスルーだ。

「あとはー、なんだっけ」

「特性は？」

「あー、いっぱいあるから自分で経験してください」

「説明放棄ですか」

「放棄ですよ」

一口に特性つつつても様々な効果ある。あんまり教えても覚えきれないと思う。

「そーだなー。使い方次第ではバトルを有利にできる、そんな感じだよ。」

例えば俺らが貰ったヒノアラシ・チコリータ・ワニノコの特性は、それぞれ猛火・深緑・激流って名前だけど、実は効果が一緒だったりする」

「へー。そんなこともあるんだ」

ゲーフリ的に最初の3匹にはあまり差を付けたくなくてこうなったんじゃないかと思う。が、格差は確実に存在してんだよなー。例えばうちのチコリータ、ジョウトのジムはほとんど相性が悪かったりする。逆にワニノコはかなり良い。まあストーリーはレベルあげてごり押しすりゃーなんとかなるけどな！

「リョウくん？」

「あ、悪い、ぼーっとしてた。」

御三家の特性だったな。自分のHPが3分の1以下になると、自分のタイプの技の威力が1.5倍になる、って効果だ」

「へー！」

これは素早さが高いポケモンと相性が良い。シンオウ御三家のモウカザルがこの特性と先制技で猛威を奮ったし、対策が見つかった今でも十分強敵だ。猿こわい。

「後は、そうそう。特性を2つ持つポケモンもいる」

「お得だね」

「ん？あー、説明不足だった。

1匹が2つ持つんじゃないなくて、その種族全体がどちらか1つを持つてるんだよ。

ポツポだったら鋭い目か千鳥足、どっちかを持つてる。捕まえる度に違う訳だな。

ピチチの特性見して」

「いいよー」

ヒビキがポツポのステータスを見せてくれる。おー、やっぱり素早いなー。

「ピチチは千鳥足か。混乱状態になった時、回避率があがるって特性だな」

「便利なんだか不便なんだか」

「もしかしたらピンチを逆転できるかもしれない、そのくらいの気持ちでいいと思う」

「りょうかーい」

本当にね、たまに救われたりするからなー。ま、混乱自体はピンチの証拠だし、いったん引っ入れることも考えた方がいいと思うけど。

「ところでヒビキ」

「なあにー？」

「俺らどこ向かってんの？」

街の東側にあるポケモンセンターから歩いて住宅地に突入した俺たちは、遠くにマダツボミの塔を望みながらもそれを通り過ぎようとしていた。

「知らない。」

僕、リョウウくんに着いてきたただだよ

「そうか……」

「ごめん、戻る」

話すことに夢中で、いつの間にか塾を通り過ぎてたよ。

「あ、やっぱり？」

「気付いてたのかよ！」

「うん〜。」

なんかこっちに用事あるのかな？って思って

素直、天然、お馬鹿。どれを選ぶ？

「そうか。有り難うな。でも次からは教えてくれると助かる」

「うん、わかった」

無邪気に笑うヒビキを責められる奴が居たら知りたいと思う。

あ、ライバルは責めそうだな。ツンデレだし。

3・5 閑話3、基礎の授業（前書き）

タイプ相性と効果バツグンや半減の話です。

3・5 閑話3、基礎の授業

マダツボミの塔を目印に住宅地という迷路をなんとか抜け、ようやく辿り付いたポケモン塾はなかなか大きな施設だった。

「お邪魔しまーす」

「失礼しまーす」

「ひのー」

「ちこー」

観音開きの扉を開けるとそこはすぐに教室で、数人がかけられる長机と長椅子たちが並び、10歳くらいの子供たちがお喋りをしていった。押さえた扉をヒビキたちがくぐると、教卓で準備をしていた先生らしき人がこちらに向かってきた。人好きのする笑顔で出迎えてくれる。

「キミは一昨日の！」

「ジム戦は勝てましたかー？」

エセ外国人口調で太めというゲームのドットの特徴を体現したジヨバンニ先生だが、その顔の彫りの深いこと。外国人だったのか。

「はい、おかげさまで」

話よくわかんなかった、と言ったヒビキのお礼は、教えてくれた事に対するお礼なんだろうな。

「今日は俺もお話を伺いたくてお邪魔させて頂きました」

「オーウ！礼儀正しい子です。今から授業なので席に着くといいでーす」

「え、あの、入塾してませんけど…」

「この講義は塾生向けではありませんせん。遠慮せずに聞いていってくださいーい！」

そういうことなら。基礎は大切だからな。つうかゲームとこの世界の差異を確認したいし、是非とも拝聴させて貰いますかね。

「俺は受講してくけど、ヒビキはどうする？」

「僕も聞いてくよ」

「2人とも熱心ねー！いいトレーナーなれまーす」

にこにこ人が良さそうなジョバンニ先生は一際嬉しそうに笑った。

講義が終わり、授業中はボールに入ってもらった2匹を確認する。状態異常で眠りになってやんの。相当退屈だったんだなあ。しばらくそっとしておこう。

「リョウくん、わかった？」

「んー、だいたいは」

基礎の基礎しかやらなかったから、情報はあまり得られなかった。質疑応答タイムもあったから上等な部類に入るんだろうけど、圧倒的に時間が足りなかったなあ。

ちなみにヒビキはノートを取りながらぼかんとしていた。これは俺

が妙な質問を連発したからだと思う。他のやつもぼかんとしたしな。

「わかる範囲で説明しようか？」

「うん、お願い」

「ねえ、私も聞いていい？」

「え？ああ、いいけど」

声をかけてきた少女に答えれば、僕も私もと子供たちが集まってきた。てしまった。

「ええと、俺よりジヨバン二先生に聞いた方が…」

「ワタシもアナタの話に興味ありまーす。実際のトレーナーの話を聞くのはいいことです。」

「フォーしまーすので、話してください」

人集りに近付いてきたジヨバン二先生がそう告げたせいで、俺が講義をするはめになってしまった。人に物教えた経験なんかないんだが。

「ええと、じゃあ授業の復習みたいな感じでいい？わからないところを解説するよ」

いいよと頷かれて、いいのかよと内心突っ込んだ。つかそれなら先生に聞けばいいのに…そう思ってジヨバン二先生を見やると、実際にこやかに頷かれてしまった。俺がやれって事ですか。

「まずはバトルの時、ホルダーの右端や左端や一番上

今、ジヨウトでは連れ歩きキャンペーンを展開してるから、連れ歩いてるやつだな。

そいつが一番最初にバトルへ出るのはいいよな？」

これはみんな理解している。ゲームならメニューから設定するポケモンの並び順は、この世界ではホルダーの並び順をトレーナーカードが認識するようになってる。

左利き用ホルダーやチェーン型のお洒落ホルダー、両脇に付けるタイプと様々なホルダーに対応するため、右端・左端・一番上の内のどれを最初に出すか、その設定は変えられるようになってる。トレーナーカードやポケギアのメニューで一番上に表示されたやつを出すのが鉄則だ。

ちなみに一番上以外を出すこともできるが、対人戦ではその時点で負けとなるし、それを繰り返すとペナルティがあるので注意だ。

それから連れ歩きキャンペーンってのは、ジョウトのトレーナー向けにポケモンリーグが展開しているキャンペーンだ。たぶんけど、ウツギ博士が一枚噛んでると思う。

だって博士の研究内容とキャンペーンが一致するなんて出来すぎだろう。

「勝負をすると経験値が入る。

ポケモンを入れ替えると、一度でも戦闘に顔をだした奴にも経験値が入る。これもいいな？」

「はい！」

「なに？」

「トレーナー戦だと複数手持ちがいるけど、一回だけ出せばいいの？」

この一回だけってのは、たぶん相手の最初の1匹に対して出せば、相手の2匹目3匹目の経験値も分けて貰えるのか、って意味だろう。

「いや、一回ごとに出し直さないとだめだ。」

あと経験値は分割されるから、相手1匹に対してこちらが3匹も4匹も出すと、その分経験値は分散する。

ちなみに2匹だして1匹が瀕死になると、瀕死になった方に経験値は入らず残った方へ全部振られる。

次いくぞ」

「待つて！ノートとるから！」

質問がないので次に行こうとしたら引き止められた。軽い気持ちで集まったらしく最初は聞いてるだけだったのに、いつの間にかノートをとり始めている子が増えていた。ヒビキは最初からそのつもりだったらしく、すでに書き留めている。

あああ…なんだかちよつと大事になってきたような…

「そろそろいい？」

止められなかったので続けるとしますか。

「次は上手なバトルの仕方だな。

レベルに差があつても、タイプ相性によっては逆転する事もある。

これはいいな？」

ここにいるトレーナーは駆け出しではあるけど、基本は大丈夫そう
だ。

「じゃあその理由とかを説明するな。

まず、ポケモンがそれぞれタイプを持つてるのはわかるよな？草
とか炎とか水とか」

みんな頷いたけど、一応説明しておく。

「草は火に弱く、火は水に弱く、水は草に弱い。これがタイプ相性で、タイプ相性つてのは相手によって1/4〜4倍にまで変動して、さらに効果がないのもある。」

効果がないのは、ゴーストタイプにノーマルタイプの技を使った時や、その逆。あと格闘タイプの技はゴーストに利かないけど、ゴーストタイプの技は格闘タイプに等倍　1倍というか、まあ普通に効果がある。

あとは地面タイプに電気技も無効だし、飛行タイプに地面技も無効、鋼タイプに毒技も利かないな。

次行つていいか？」

「待つてー」

「はいよ」

かりかりとノートをとる音と、ひそひそ確認しあう声がある。手持ちぶたさなので俺もノートを手に取り、次に説明するプランをなんとなく立て始めた。

「次、攻撃技の効果についていこうぞ。」

通常、果拔群なら2倍、いまいちなら1/2だな。

さっき言った、じゃんけんみたいに3すくみを描く草と炎と水は、それぞれタイプ相性が良ければ効果が2倍、悪ければ1/2になる。4倍や1/4は、複合タイプのポケモンにだけ起こる現象だな。

例えば、ヒワダタウンへ向かう途中にいるウパーは水と地面の複合だ。水タイプも地面タイプも草に弱いから、草タイプの技は4倍になる。」

んで通常なら地面タイプは水タイプに弱いから2倍だけど、水タイプは水タイプを半減するだろ？だから複合タイプのウパーに水技で攻撃すると等倍になる。OK？」

みんなが顔を上げたところで、俺は問題を出すことにした。

教えると言った以上、一方的に説明しただけではだめだろう。説明を受けただけだと身に付かない。自分で考えて答えを出さなきゃ意味がない。

「んじゃここで問題。さっきの話を踏まえて考えてくれよ？」

まず、自分の手持ちに電気タイプがいるとしよう。で、相手はウパーだ。水タイプは電気タイプに弱いから電気技を出すとするが、地面タイプは電気技を無効にする。

この場合のダメージはどうなると思う？」

意見は3つ出た。

- 1．等倍になる
- 2．無効になる
- 3．基礎となるタイプに依存する。

正直、3の意見には驚かされた。発言した子は、進化すると複合タイプになるポケモンを知っていてその思考に至っただけらしい。

たとえば話が、コイキングの時は水タイプだから、ギャラドスに進化して水・飛行タイプになると、水が基本的なタイプになり、飛行は副次的なタイプになる。だから効果が弱くても地面技は利くんじやないか。ウパーもどちらかが基礎タイプなんじゃないのか。

なんつうか、目から鱗だった。ゲームシステムとして答えを知る俺なんかじゃ思い付かない、柔軟な思考だ。本当にここはゲームの世界なんかじゃなくてみんな生きてるんだなあ、と明後日な感想が浮かぶ。

つて、物思いに耽ってる場合じゃない。

「色々な意見が出たけど、答えは一つ。無効が正解になる」

当たり前外れを喜ぶ子供たちに言葉を重ねる。

「でも柔軟な思考は大切だよ。タイプ相性だけで判断すれば負けることもある。」

例えばノーマルタイプの嗅ぎ分けるや見破るって技は、本来なら効果のない技を相手に当てられるようにする。つまりゴーストタイプにノーマル技や格闘技が当たるようになる。

タイプ相性だけを信じるんじゃなくて、相手が何を思っただけケモンを出したか、どんな対策をするか。考えながらバトルするのは大事だと思う」

「つっても読み切れないのが当たり前だ。当たったら御の字ってところなんだよな」。

「一応外れた子のフォローのつもりだったが、居残りするほど真面目な子ばかりだったせいか、俺の言葉を書き留めている子が多く見られた。」

「やめる、恥ずかしいからやめる！とも言えずに、俺はひたすら耐えるしかない。」

「先生役なんて簡単に請け負うもんじゃないな！」

「えーと、そろそろお終いでいい？」

「まっつて、授業中に言っただダメージの計算式は？」

「そろそろ俺、限界です先生……」

「そう思っただジョバンニ先生を見ても、先生はにこにこ笑って頷くだけだった。」

「ああ、まさか確認のために聞いた何気ない質問が自分の首を絞めるとは！」

「計算式って言っても精密なもんじゃないんだけど……」

そうだな、まずは、タイプ一致がわかる人いる？」

「そんなの基礎じゃないか」

後ろからかけられた声に振り向くと、眼鏡をかけた塾生らしい男子がいた。

「タイプ一致と言うのは、ポケモンのタイプと技のタイプが同じ時に威力が上がる現象だよ。」

わかつたらさっさと出て行ってくれ。邪魔だよ」

邪険にされても何も言えなかった。確かに金を払って塾に通うような子からしたら、いつまでもたむろしてる俺たちは邪魔で邪魔でしようがないだろう。

「場所変え……」

「なんだよ偉そうに！頭でっかちのクセに！」

「基礎も知らないようなトレーナーにはなりたくないんでね」

場所移動を提案しかけた俺を遮って短パン小僧が短気を起こしてしまふ。もともとピリピリしていたらしい塾生は、挑発するように切り替えしてきた。見事なまでに売り言葉に買い言葉だ。

言い合いをどう止めようか迷ってる間に、姿を現し始めた塾生と非塾生の喧嘩になってしまった。つつか止めるよ、ジヨバンニ先生！

「ちようどいい！そこまで言うなら僕が知識の重要さを見せてあげるよ。」

その君」

ヒートアップしていく雑言の応酬を呆然と見ていた俺にお声がかかる。

「君がお山の大将だね？」

その鼻っばしら、僕が折ってあげるよ」

至極偉そうな物言いで挑発した塾生に、俺の周囲は益々ヒートアップしてしまった。

肝心な俺といえは、リアルでは聞いたことのない言葉に面食らって目をしばたかせていた。だってなあ、鼻っばしらって。普通に生きてたらそうそう言われる機会ないと思うぞ。

あとお山の大将もな。

「なあ、俺そんなに偉そうだったか？」

「え？うーん…ちよっとだけ」

「まじか」

視線が泳ぎ気味のヒビキの答えに驚いてしまった。そうか、俺、偉そうだったかあ。

「君も僕を舐めてるようだね？」

「え、いや、ごめん。そういうわけじゃ…」

ただ事態に思考がついて行かないだけです、と言つ言葉は発せられる事なく俺の喉に引つ掛かって消えた。

塾生はみなまで言わせずに表へ向かい始め、扉の前でこちらを振り向いた。

「早くしなよ、ノロマ」

「望むとこだ！やっちまってくれよ兄貴！」

「頑張ってお兄さん！」

分かり易い挑発に非塾生が爆発するような勢いで騒ぎ立てる。拒否
権はなさそうだ。
っていうかなんで俺が非塾生代表扱いされてんの？

3・5 閑話4、実践（前書き）

実践しつつ知識の確認していきます。

3・5 閑話4、実践

ジヨバンニ先生の提案で、俺はヒビキと組んで、塾生は眼鏡の女子と組んでのマルチバトルとなった。こんな時ばかり口だすんじゃないよと言いたかったが、周りが盛り上がってしまったって拒否できるような状態じゃなかった。いいように流されてるよな、俺。

使用ポケモンは各1匹づつ、レベルと種類を見せ合うバトル形式だ。相手は早々に決めてきた。オタチ（Lv11）とポツポ（Lv10）だ。即断というよりは、それぞれ1匹しか持ってないらしかった。

俺たちはまだお互いのポケモンのステータスを確認しあってる。

「ポツポは9、ヒノノは13か。」

火の粉・電光石火・煙幕・体当たりね」

ヒノアラシのステータスは特攻と素早さが抜きん出っていて、攻撃・防御・特防は普通、HPはちょっと低めだが、まあレベル上がったるからカバーできるはず。

「ワカナは6、体当たり・鳴き声・葉っぱカッターかあ」

「悪いな、上げてなくて。」

イーブイ出してもいいけど、遺伝技ばっかだから狡いってただこねられたら面倒だな」

禁止はされてないけど、新人トレーナーが持つポケモンとしては破格の技構成となってる。

「レベル10、じたばた、堪える、願い事、欠伸……ってなに？」

「じたばたはHPが減るほど攻撃力があがる技。」

堪えるはどんな攻撃も必ずHPを1残して耐える。

願い事は次のターンに最大HPの半分を回復するんだけど、交代もしくは自分が倒れて次のポケモンが場に出していたらそのポケモンを回復する。

欠伸は使った次のターンに100%相手を眠らせる」

「……なにそれ、強いつて言うか……」

うん、序盤ではチート気味なんだよ。もしくは催眠厨と言うか。

特性が逃げ足（野生のポケモンから必ず逃げられる）だから攻撃力はそこまで無いし、素早さが下がる性格補正のせいで先手も取りづらいけど、眠らせたらかつちのもんだからなあ。

「うーん、禁止されてはないけど……」

「ワカナで行った方が無難そう、だよな？」

計ったようなタイミングで、2人同時に相手方を見やる。いかにも優等生です真面目ですといった風で、あまり融通は利きそうにない。ましてまだ子供だ、妥協を知らなさそうというか。なるべく公平な条件じゃないと後が面倒そうだなあ。

「…最初に謝っておく。負けたらめんご」

「ううん、それで良いと思うよ。めんごはどうかと思うけど」

ヒビキが律儀に突っ込むのと同時に、腰のボールが負けるだなんて失礼なこと言わないでよ！とばかりに揺れた。

「ルールは2対2、どちらかが全滅するまでです。持ち物は禁止、トレーナーのアイテム使用もいけません。」

では、始めてください」

「行け、ヒノノ！」

「頼むぜ、ワカナ！」

「行け、オタチ！」

「行ってちょうだい、ポツポ！」

ヒビキと俺はヒノアラシ（Lv13）とチコリータ（Lv6）、相手の塾生はオタチ（Lv11）、塾生はポツポ（Lv10）を繰り出した。チコリータ以外はみなレベル10以上だ。風おこし超怖い。

「オタチ、チコリータに電光石火！」

「ポツポに葉っぱカッター！」

「煙幕だ、ヒノノ！」

「そんな相性の悪い技利かないわ！チコリータに風おこしよ、ポツポ！」

レベルの低いチコリータに攻撃が集中するのは予想通りだ。

技には優先度があり、優先度が高い技は素早さに関係なく先に出すことができる。電光石火を最大HPの1/5ほど残してなんとか耐えると、素早さが秀でているヒノアラシの煙幕が相手の視界を奪い、見事風おこしはそらされた。

助かった！相手のポツポの特性が千鳥足で良かった！鋭い目だったら命中率下げられなくて、今ので決まっていた。そんなの落ちもいところだ。

こちらの視界は良好なので、チコリータは難なく葉っぱカッターを相手に当てる。一気に1/3ほどポツポの体力が削られた。たぶん急所きたなっ！

「ナイスワカナ！」

タイプ一致で急所に当たると技の威力は3倍になる。ただし飛行タイプは草技を半減するので、実質は1.5倍だ。けれども草タイプのチコリータがノーマルタイプの体当たりを出した時の威力は35で、葉っぱカッターはタイプ一致補正と元の威力が高いために41となる。葉っぱカッターの元の威力が55なのを考えると下がってるが、体当たりよりかマシだ。

それに急所に当たる確率が1/16じゃなく1/8なのが美味しい。上手い具合に引き当てたしな！

煙幕が薄れていく。しかし効果が消えたわけじゃない。相手のポケモンは目をしばたかせている。煙幕ってこういう効果なのか。

「電光石火だヒノノ！」

「オタチ、電光石火！」

「ポツポに葉っぱカッター！」

「つかわして風おこしよっ！ポツポ！きゃあっ」

優先度が同じ技を出した時は素早さが高い方が優先される。ヒノアラシの電光石火が一番に決まり、ポツポはあえなく倒れてボールに戻された。このターンでチコリータも落とされるかと思っていたが、オタチはなぜかヒノアラシに電光石火を決めている。なら標的変更だ！

「オタチに当てる！」

チコリータの周りに浮いていた葉がオタチに向かう。が、急な目標

変更だったせいか、それとも命中率95%の罫か、はたまた一発目に急所引き当てたツケか。なんにせよ外してしまった。くっそー。

「ヒノノ、火の粉！」

「捨て身タツクル！」

「なっ…葉っぱカッターだっ」

遺伝技持ちのオタチかよっ！

火の粉が当たり、オタチのHPが2/3ほどになる。耐えるなー。煙幕のおかげで捨て身タツクルの命中率は100%から75%に下がっていたが、威力120のそれはヒノアラシに当たってしまった。タイプ一致のおかげで火力はインフレをおこしていて、防御とHPの低いヒノアラシはあえなく倒れた。

しかしこの手の技にはリスクがつき物。高い命中率と高威力を両立させる代わりに、反動として相手に与えたダメージの1/3がオタチに跳ね返る。ポケギアを見ればHPはレッドゾーン、1/3を下回っていた。

「ヒノノ！戻って！」

「当てるよワカナ！」

「ちいっこー！」

「よけるっ！」

反動によるめく僅かな硬直時間を狙ったかのように、立ち止まったオタチへ葉っぱカッターが決まる。ポケギアに表示されたオタチのHPは綺麗に削りきられた。

「ワカナっ」

「ちこっ」

勝った勝った！嬉しくて思わずチコリータに駆け寄る俺の耳にジヨバンニ先生の声が聞こえてきた。

「そこまでです！この勝負、リョウ・ヒビキチームの勝ちです！」

わ、とギャラリーの非塾生側が沸いて、俺とヒビキは取り囲まれた。恥ずかしいぞ。年甲斐もなくはしゃいだと見られた。衆人環視の中ってこと一瞬吹っ飛んでたんだよチクシヨウ顔が熱い！

3・5 閑話5、バトルの後(前書き)

しつこくバトルの解説です。

3・5 閑話5、バトルの後

瀕死になった3体はもちろん、傷付いたチコリータを回復するため
にポケモンセンターへ向かったのは、塾を手伝っていると言う青年
だった。おかげで俺たちは興奮覚めやらぬ非塾生に囲まれていた。
つて言うか囲まれて抜け出せない雰囲気だったから青年がパシリを
買って出てくれたんだけど、余計なお世話だよ。
居心地わりいよ。

「知識の強さ、見せてくれるんじゃないっけー？」

からかう調子で告げられた短パン小僧の言葉に、塾生 コンビは
顔を赤らめた。

「お前、何もしてないだろ」

非塾生のキャンプボーイらしき少年がたしなめる。もっと言ってや
つてくれ。

「短気起こすなよ。」

知識の強さなら俺が見せただろ」

「は？」

「なあ、なんで俺が飛行タイプのポツポ相手に、効果が半減される
葉っぱカッター出したかわかるか？」

「え、それはあ……」

「体当たりより葉っぱカッターの強いからですよね？」

年長らしい塾生の1人が口を挟んできた。その通りだったので頷くと、塾生が説明を続ける。

「まず技には数値化された威力があります。

パーセンテージで表されるので、技の威力が50だったなら50%だと言う意味だと思ってください。

なおこの数値は、攻撃力とイコールではありません。技を使うポケモンの攻撃力と技の威力、相手の防御力を計算した数値が、最終的な攻撃の威力になります。

「ここまではいいですね？」

塾生は頷いたけど、非塾生はぼかんとしてるのが大半だ。まーいきなり威力とか計算とか言われてもわかんないよなあ。

「今から話す話は、おおよその攻撃力の話だから、なんとなくわかればいいよ。わからないなら説明入れるから。

で、いいよな？」

「はい、助かります。僕はどうも噛み砕いて説明するのが得意ではないので」

頭いいやつってそうなりがちだよな。難しい話でも難なく理解できるってのは、分かりやすく説明してもらわないと必要がないってことだから、どうも説明ベタになりがちだ。

「おおよその話だと思って聞いてください。

体当たりの威力は35、葉っぱカッターの威力は55とされています。しかしチコリータは草タイプなので、体当たりは35のままですが葉っぱカッターは1.5倍され、おおよそ82の威力になります。

先ほどの相手は飛行タイプのポッポなので威力が半減されますが、

82の半分は41ですから、体当たりより葉っぱカッターの方がダメージを与えられます」

「わかったか？」

つまり、タイプ一致補正のおかげで、体当たりより葉っぱカッターの方が威力があるって話だ」

まとめると一言で済むんだけど、答えだけ知っててもトレーナーとして成長はしないからな。簡単な説明は必要だろ。

「じゃあ苦手なタイプでもタイプ一致技出せばいいんだ」

「それは違う。葉っぱカッターと体当たりでは元々威力が段違いだからそうなるんだ。」

そうだな：例えば同じ威力のタイプ一致技とタイプ不一致技なら、タイプ一致だけど半減される技より、タイプ不一致でも半減されない技の方が威力がある」

「タイプ一致は1.5倍だけど苦手タイプじゃ半減されるから、本来の75%しか威力が出ないんだ。だから100%の威力を出せるタイプ不一致の方がいいんだよ」

俺と他の塾生がフォローをいれると非塾生は理解できたようだった。

「さらに言うなら、葉っぱカッターは急所に入る確率が高い。普通は16回に1回でるとされてるけど、葉っぱカッターは8回に1回だ。」

絶対じゃないけど、勝率も少しは上がる」

運頼みばかりは良くないけど、でもギャンブルみたいな運任せのバトルはロマンもある。命中率30の一撃必殺技が当たると楽しいんだよな！。

どんな技が出るかわからない指を振るとかも楽しい。運ゲもたまに

はいいもんだ。

「君は見事に引き当ててましたね」

「頑張ってくれたのはワカナだけだね」

ゲームで急所にあたるのは、確率でありソフトが計算するものだった。でもこの世界では違うような気がする。

例えば今回、急に目標を変えた後に葉っぱカッターを外したが、オチチが攻撃あとに隙を見せた時は当てた。そういうタイミングみたいなのも大事なんじゃないかな。調べてみようか。

静かにしていたヒビキが顔を引きつらせ気味に言った。

「バトル中にそんなこと考えてたの!？」

「へ? いやいや、違う違う。事前に知ってたの。」

チコリータの技の威力とか、苦手タイプへのダメージの通り具合は把握してるんだよ」

ゲームでも対人戦をする時に計算なんかしてる暇はない。だから苦手タイプなどで仮想敵を作り、自分の手持ちの技と効果と威力は把握しておくのは大事だ。

まー想像通りになることなんかまずないけどな! 急所はランダムだし、技の威力も1回出すごとに微妙に上下する。要素はまだまだたくさんあるんだから。」

「やはり実践は大事ですね。僕もあなたたちと手合わせしたくなりました。」

「良かったらバトルしませんか?」

「俺はとりあえずワカナが戻ってから考えるよ」

「僕もパスー」

「では、今日は交流と言うことで、皆さんバトルしてみる、という

のはどうです」

塾生もトレーナー、ポケモンバトル好きだ。実践を躊躇するやつなんか居るはずもなく、あつと言う間にそこで路上バトルが展開され、声援と歓声上がる。

「うー、うずうずする」

「ヒビキもバトル好きだなあ」

「当たり前だよ。だって楽しいでしょ？」

ゲームでも十分楽しかったけど、実際はもっと手に汗握る。テレビ越しに格闘技を見ると会場で観戦するみたいに、全然違うことだと思っ。

「そうだな。応援行こうか？」

「うん！」

肩にポツポを止まらせたヒビキと並んで近くのバトルに声援を送る。勝手にボールから出たイーブイも楽しげに歓声を上げた。さっきの塾生も短パン小僧も、みんな険悪さなんて忘れて応援をしている。昨日の敵は今日の友ってか。

「ね、僕らもバトルしようか」

「あつ！バトルで思い出した。」

俺、ヒビキさんに賞金渡し忘れてたんだよ！」

「え、そうだったか？」

ヒビキも忘れてたのは予想外でした。

3・5 閑話5、バトルの後（後書き）

ひたすら解説が続いてすみません。お疲れ様でした！

追記

こういう機械的な話は読み物として浮いてしまう、とご指摘頂いてもつともだと感じたので、作者から説明（というか意図というか言い訳）を入れさせて頂きますね。

まず最初に。ステータスの話は必要だと思ったので入れました。

この話はモンスターボールの独自設定と書いていいのかなに関わってきます。モンスターボールはポケモンがダメージを受けると縮む、その際にいったんデータ化されるといいう性質を利用してボールにポケモンを拘束します。

本来の大きさ ダメージでピンチ それ以上のダメージを避けるために隠れようとする（小さくなるようにする） データになる（この状態は無防備で外からの干渉を受け易い） 圧縮される 縮んで実体化（小さい状態だがある程度まわりに干渉できる）という過程を経ているわけです。

で、捕獲の時はボールが外部から働きかけてデータ化させ、それをボールが解析し、データをボールに書き込む事でボールに閉じ込めます。この時に種族やなんやが解析され、性格や個体値なども判明します。

さらにボール越しにそのデータに干渉することで実体にも影響を及ぼすという設定です。デジモンちつくですな。

これはポケモンセンターで一瞬で回復することや、初代でマサキがポケモンと混じったことからこういう設定にしました。怪我を治すというよりはデータの修復をするイメージです。が、やはりポケモンは生き物なので、死んだものを蘇らせたりはできません。干渉できる範囲はあまり広くありません。

この物体をデータとして圧縮する技術は広く応用され、パソコンに道具を預けることが出来たり、短距離ならば人間もワープできたり、自転車や何百個もの道具をしまうことのできる四次元鞆が売られているわけです。

このステータスの話はちよいちよい本編へ関わってきましたが、その時に詳しい説明はしないと思います。ですのでこのような形で掲載させて頂きました。もしその時に疑問を感じれば、閑話を読み直して頂いてご理解を得たいと、そういう魂胆でございます。

説明を先行させましたのは、モンスターボールの話は研究者のウツギ博士、ステータスの話は塾が適当かな、と思ったからだったので、現時点では無意味に思えますよね。説明不足ですみませんでした。

一人称で時系列順に進めると決めておりますので、無意味に思われる話もあると思います。ですから分からない事がありましたら遠慮なくお尋ねください。私からご説明させて頂くか、作中でフォローを入れさせて頂きます。

こんなところまでお読み下さって有り難うございました！

ヒビキにウツギ博士から連絡が来た。ヒビキがお使いの時に研究所へ持ち帰ったポケモンのタマゴ、それをヒビキに持ち歩いてほしいとのことだ。トゲピーのタマゴイベントに他ならない。

いきなりファイヤーやロケット団に遭遇するもんだから、ストーリーがずれてるんじゃないかと内心ヒヤヒヤしていたけど、ヒビキは順調みたいだ。

もしかしたらヒビキに同行すればゲームと同じ進行をするのかもしれない。一緒に行こうなんて言ったらそれこそストーリーを変えてしまいそうだから言わないけど、たまに確認していこう。

「またね、ワカナ」

「ちこー」

ポケモンセンターのすぐ近く、フレンドリーショップの前。しゃがんで手を伸ばしたヒビキに、チコリータは気持ちよさそうに撫でられていた。

「…ヒビキくん相手だと大人しいな」

「あはは」

「ま、いいや。ヒノノ、またな」

「ひーによー」

「……ワカナさん、俺の足踏んでますよ」

ヒノアラシに手を振った俺の足にチコリータが前足を乗つけて来た。知らん顔してるけど、頭の葉がぴくりと動いた。嫉妬ですかー？可愛いことしちゃって。

指摘したらぶたれるから言わないでおくけど、懐いてきてくれる

ようで嬉しいね。

「じゃ、ばいばい」

「おー、またなー」

「ひのっ」

「ちっこー」

ポケモンセンターのすぐ近く、フレンドリーショップの前でヒビキと別れた。タマゴは助手に持たせたからキキョウシティのフレンドリーショップで受け取って欲しい、と指定があったのだ。

タマゴを見たい気もしたが、コンビニのように狭いフレンドリーショップで男3人顔を突き合わせるなんてむさくて寒い。

俺はとあるアイテムを回収しようとポケモンセンターに向かった。

ポケモンセンターの地下、Wi-Fiルーム前。

「すみません、初めて利用する者ですが」

「はい！ではご説明させて頂きますね。こちらのパンフレットをご覧ください」

俺は通信相手もいないくせに、はきはき喋るお姉さんから通信システムの説明を受けていた。カウンターに乗つけたチコリータは一緒になってカラフルなパンフレットを覗き込んでいるが、理解できないように首を傾げている。

「それではこちらがリョウ様の友達手帳になります。いってらっし

やいませ！」

「有り難うございます。ワカナ、有り難うって」

「ちーちこっ」

微笑ましそうにチコリータにも手を振ってくれるお姉さん。その横を通り過ぎてWi-Fiルームに入る。

「ちこっ!？」

「ん？びっくりしちゃったか？」

大丈夫、あれも人だよ」

「ちー？」

「遠くから通信してる人の姿なんだよ。だから大丈夫」

ホログラムを見てびっくりしたチコリータを宥めるように説明する。もはや見慣れてきた虫取り少年や短パン小僧はもちろん、エリートトレーナーやスキンヘッズ、ジェントルマンなど大人の姿もあったが（女の子は残念ながらいないみたいだ）、その姿は半透明で後ろの景色が透けていて、頭上にトレーナーの情報が出していた。

それらは部屋に仕掛けられたホログラムであり、ここではないポケモンセンターから通信しているはずの誰かだった。

透けてない数名は、このキキョウシティから通信している奴らだ。

ってゆーか結構人多いな。壁際の案内係のお姉さんも他のやつに説明してて、ぼっちの俺はやることがない。

「座ろうか」

「ちこ」

壁際に並ぶソファに身を沈める。ふかふかのそれに飛び乗ったチコリータはご満悦で踏みしめた。

そうやって暫く寛いでいると、ホログラムの一つ、空手王っぽい胴

着の人がこちらに向かってきた。ナイスガチムチ。

『待ち合わせかい？』

「いえ、使ったことないから説明だけ受けに…あなたは？」

『僕はジョウトに交換相手が居てくれたらな、と思っただけで交流しに来たんだ。隣いいかい？』

ホログラムと声はちぐはぐだった。幼いほどに若い、まだ少年の声。頭上を見上げて人物の情報を確認する。そこにはエリートトレーナーのユウキ、と、称号と名前だけがあつて、他の情報は伏せてあつた。

「すみません、俺じゃお役に立てないかと思えます」

『なんでだい？』

「俺、野生のポケモンを捕獲する気がないので」

『え？どういふことか聞いてもいい？』

あれ、なんか逆に興味を引いてしまったか？

空手王はチコリータを挟んで隣の席に座ってしまった。んー、個人の事情話してもしようがないし、適当にごまかすか。

「多くのポケモンを育てられるような財力がなくて。2匹が限界だから、捕獲も交換もする気はないんです」

えっ、そんなに貧乏なの！？とびつくりしたらしいチコリータが見上げてくる。安心しろ、そこまで貧窮してないし飯をけちるつもりはないから。

『ふうん、大変なんだね』

「いえ、好きでトレーナーになりましたから」

こっちは割と本音だったりする。子供の頃、本気でポケモントレーナーに憧れていたんだよな。不思議な生き物と冒険の旅に出て、最強のトレーナーになるなんて凄くわくわくしたし、ウィンディとかギャロップとかカイリユールとかラプラスとか、乗れたら楽しいだろうと思っていた。

『そうか。なんだか君には好感が持てるな』

「そうですか？」

『ポケモンのこと、ちゃんと考えてるんだね』

「あはは、自分の身の程を知ってるだけですよ」

本当にポケモンの事を思うなら、俺はレンジャーか里親の元に行くべきだった。

もし俺が元の世界へ帰ることになれば、その別れはポケモンたちを傷付けることになる。一緒に頑張ってくれた仲間を捨てる、そういうことになるのだから。

『お近付きの印にこれをどうぞ』

「へ？え？なに？なんで？」

どう、どう、どう、どう、と例の音楽が流れて勝手に交換（？）が始まってしまった。マシンを使ったわけじゃないのに何故？

慌てる俺の手に、上から何かが降ってきた。が、咄嗟にキャッチなんかできるはずもなく、跳ねて床に落ちてしまっ。

『あははははは』

さもおかしいと笑う空手王は一旦放置して、転がっていつてしまっ

た何かを拾う。それはパチンコ玉くらいの、金色の玉だった。

「……………うえっ!?!」

『あはははは!いい反応するね!』

「こ、これって」

『本物だよ』

金の玉!?換金アイテム(5000円也)じゃねーか!!

「いやいやいやむりむりむり。頂けませんから、こんな高価なもの」

『駆け出しだと高価に思えるよな。でも大丈夫、段々はした金に見えてくるから』

その言葉にトレーナー歴の長さを感じた。

タウリンとかリゾチウムとか、ポケモンを育てる使い切りのアイテムは1つ9800円だ。そのくせ1匹につき20個くらい使う。だから新しく育成しようとなると、スゲー金がかかる。

そうなると金銭感覚麻痺してくるんだよな。

「エリートて言うか、廃人…」

『んー?なんだって?』

「なんでもありませんよー」

空手王のごつつい顔で睨まれて反射的に顔が引きつる。中身は少年だと分かっているけど、ガチムチに睨まれると身構えちまう。

チコリータが呆れたようにため息をついた。仕方ないじゃん、怖いもんは怖い。

「それより、どうやって通信したんです?」

『道具の通信は部屋に居ればどこでもできるよ。』

ポケナビ…じゃないか。ジヨウトだとポケギアだっけ？それにツールをインストールすれば出来るはず』

返そうと一応ポケギアを確認するが、それらしき項目はない。やっぱりインストールしなきゃだめか。

『余らせてるから持っていてよ』

さらつと男前なこと言う相手に、あまり遠慮したら失礼な気がした。厚意は有り難く受け取るべきだろう。

ふと、もしや相手は未来の金の玉おじさんかな、と思った。

「…じゃあ、有り難く頂いておきます。でも俺は誉めて貰えるような人間じゃ…」

『誰しも隠したいことの1つや2つ、持ってるものじゃないか？』

なんか見透かされてる！？と固まった俺に、たたみかけるように金の玉少年は言った。

『やっぱりそうかー』

かまかけたのかよ。

「…はあー。お人が悪い」

『あはは、悪い。新人らしくないから、ちょっかいかけたくなっちゃったんだ』

悪びれもせず笑う相手に、今更ながら変な人に捕まったと感じた。

『さて、ID交換しようか』

「えっ」

『別に邪魔にはならないだろ？登録しとけよ』

なんか口調変わってない？

内心突っ込みを入れてる間に金の玉少年は部屋に何台も設置してある、ゲーセンのゲーム機みたいな通信マシンに着席した。頑なに断る事もないかと、手招きされるまま俺も席に着く。通帳みたいな友達手帳を機会に入れると、暫くして相手の情報が書き込まれて出てきた。

「へえ、フレンドリストってこんな風に……はぁー？」

『そうそう、その顔が見たかったんだよ』

いつの間にか隣に立ち、にやーつと口角を上げて笑う空手王のホログラムと、フレンドリストの情報の間を視線が往復してしまう。非公開になっていた情報はフレンドリストに登録する事で開示されていた。ホウエン地方在住、12才、男。ついでに称号も変化していた。ホウエンリーグチャンピオン、ユウキ、と。

「……抹消しておきます」

『あ？いい度胸だな』

「むしろあなたを登録しておく方が度胸いりそう」

『生意気な！あれ、2コ上だ』

被っていた猫をかなぐり捨てたらしい金の玉少年、もといユウキは俺の情報を見て驚いていた。

『以外と年近かったか』

「いくつだと思ってたんですか」

『もっと上。16くらい』

「はあ。俺も彼のユウキさんが変人だとは思いませんでした」
『変人って、失礼だな!』

話しながら通信マシンから離れ、再びソファに腰掛ける。
ユウキつてのは確か、ポケモンシリーズの3作目、ルビー・サファ
イア・エメラルドの主人公のデフォルトネームだったはずだ。姿
は確認出来ないけど、たぶんその人に違いないだろう。

「だってそうでしょ。こんなところで油売ってないで仕事してくださ
い」

『いいんだよ、挑戦者こなきゃ仕事ないんだから。リーグの外じゃ
俺、普通のトレーナーだもん』

もーんじゃねーよチャンピオン。人からかって遊んでる場合か。な
んかこう、やることないのかよ!

「バトロフロでも行けばいいのに」

『行ってるよ。ここへは全国図鑑完成のために来たんだ』

「ああ、なるほど。」

「だったら友達紹介しましょうか」

『お前の友達?』

「はい。ヒビキって言って、ウツギ博士からヒノアラシを譲り受け
て旅を始めた子です。」

「図鑑を持つてるから、交換に応じてくれると思いますよ」

『へえ、アンタは?チコリータは御三家の1匹だろ?』

「よくご存知で」

『そりゃあな。博士からポケモンを貰うって、今は一種のステータ
スだから』

「ステータス?」

なんじゃそりゃ、と目を見開いてしまった。ステータスって、つまり自慢出来るような事って意味だよな？

『知らないで貰ったのかよ。あー、でも先入観ない方がいいか』

一人で納得してからユウキは説明してくれた。

『カントー、ハウエンって立て続けに旅立ったばかりの子供がチャンピオンになっただろ？で、その子供はどちらも各地方の有名な博士から御三家の1匹を貰って旅立った。』

だから今の新人トレーナーにとって、博士から御三家を貰って旅立つのは憧れなんだ』
「なるほど」

それもそうかと納得した。ポケモンシリーズは毎回その流れなもんだから、当たり前になりすぎててそれがどうという事かなんて考えてなかった。

『お前みたいなのだから、博士も御三家渡したんだろ』

微笑ましそうに笑われて微妙な気持ちになる。絶対に勘違いされると思うんだけど、訂正するには身の上話をしなきゃいけない。つまり訂正は不可能なことだ。

「ユウキさん、わかってますか？それって、博士からしたらあなたも俺みたいに思われてるかもしれないって」

『……あの博士なら有り得る……』

せめてもの反撃の言葉だったが、お互い微妙な顔を突き合わせる事になっただけだった。

4 (後書き)

道具の交換は部屋のどこからでも、ポケモンの交換はマシンを使わないと出来ないようになっていきます。生き物の遣り取りは慎重に、という方針と、マシンの台数の少なさからこうなっております。

追記

複数の方からご質問頂いたのでちょっと説明を入れさせて頂きます。この話でリヨウが手持ちを増やさない、というようなことを言っておりますが、2匹だけで旅を続けるわけではございません。

リヨウは野生の捕獲はしませんが、チコリータとイーブイを譲って頂いたように一方的に貰い受けることは致します。

それから作中で金銭的に2匹が限界と申しておりますが、これは嘘です。実際のところはそこまで財政が逼迫している訳ではなく、捕獲しないことへの言い訳です。

リヨウには捕獲をしたくない理由があり、更に今の手持ちを手放す気もございません(従って交換には応じられません)。

しかしそれらの理由は出会って間もない人間に話すような物ではないので、ユウキに対してもっともらしい嘘をつきました。

図らずも読者さまを混乱させてしまい申し訳ありませんが、リヨウは隠し事をしたり嘘を付くことを躊躇わない性格なのだ、とご理解下さると幸いです。

なお捕獲しない理由につきましては、後日作中で説明が入る予定ですので、もう暫くお待ちください。

ハヤトの意識が回復したと連絡を受けて、俺は病院に向かった。話したいことがあるそうだ。

院内の特定エリアはポケモンの連れ歩きが禁止されている。俺は1人廊下を進み、名札のわからない部屋の前で足を止めた。聞いていた部屋番号だ。スライドドアを軽くノックする。

「連絡を頂いたりヨウです。入ってもいいですか？」

「鍵は開いているよ。どうぞ」

若いながら落ち着いた声に入室を勧められる。

「失礼します。お加減は如何ですか？」

「だいいいよ。」

初めまして、俺はキキヨウジムのジムリーダー、ハヤトだ。助けられて有り難う」

ハヤトと一緒に事情聴取かと身構えていたのだが、病室にいたのは本人とお弟子さんらしき青年が1人だけだった。ちなみにハヤトは病院の素っ気ない甚平を着ていた。たぶん備品。自前じゃないよな？

「初めまして、新人トレーナーのリョウです。お口に合うかわかりませんが、どうぞ。」

少しでも手助けできたなら良かったです」

「聞いてた通り礼儀正しい子だね。そう硬くならないで、座ってくれ」

芸がないとは思いつつも、土産のクッキー詰め合わせを渡す。受け取った弟子（仮）は、準備していたらしい急須と菓子箱を持って病室を出て行った。

「では、失礼して。」

「敬語はどうかお気になさらず」

「そうかい」

苦笑されても態度を崩すことは出来ない。入院患者ではあるが相手はジムリーダーとしてそこに居るはずだ。トレーナーとしての大先輩は年齢関係なく敬うのが当然だろう。

「君は大丈夫だったかい？」

「はい。ハヤトさん、お話と言うのは？」

病み上がりの人に負担をかけたくない。

性急に話を促した俺に目を丸くしたものの、ハヤトは気を悪くするでもなく切り出した。

「こんな姿で悪いが、君にこれを渡そうと思ってね」

俺の死角からケースを取り出して中身を見せてくれる。それは昨夜ヒビキが見せてくれた物とまったく同じ、翼を象ったウィングバツジだった。

「あの、ジム戦してませんけど」

「なにもジム戦だけがジムバツジを得る道じゃない。

街への功労者に送られる場合もあるんだよ」

「街への功労って、俺、ハヤトさんを見つけただけですよ」

キキョウシティへは来たばかりだし、何かしたとしたらそれくらいだ。もつと言わせてもらえば大半は気絶していたワケで、とても功労者とは言えない。

受け取らないと感じたのか、ハヤトは一旦バッジを引っ込める。

「不思議そうな顔だね。君は知らないだろうが、俺もピジヨットもキキョウシティも君に救われたんだよ」

「はい？」

「今から説明しよう。聞いてくれるね？」

是非とも納得のいく説明してほしい、と頷けばハヤトは話し出した。

「まずはロケット団の狙いから話そう。あいつらはカントーの伝説のポケモン、ファイヤーを狙っていた。」

「知ってるかい？あのファイヤーは春を告げる渡り鳥なんだ。」

あー、どのバージョンかは忘れたけど、図鑑に春を告げる鳥だと書かれていたな。てつきり冬ごもりでもして春に顔出すのかと思っていたけど、渡り鳥なのか。カントーの伝説ポケモンなのにカントーにずっと居るわけじゃないんだな。

「春になると南から北へ海を渡り、カントーへ行く。」

その通り道にキキョウシティがあつて、あの森で最後の休憩を取ると、後はシロガネ山まで一気に飛んで行くんだ。

あの森に着く頃には、いかに伝説ポケモンと言えど長旅の疲労が溜まっている。ロケット団はそこを狙って違法な捕獲を企んだ」

へええ、なんか以外だな。HGSSのロケット団って悪事がマイルドと言うか、幹部からしてヤドンの尻尾を切り取るだけの仕事してたり（生きたままって言や残酷だけど、ヤドンは痛覚が鈍いのが救

いだ）行方不明のボスに迷子案内を出すためにラジオ局乗っ取った
りしかしてない。

3年前にガラガラ乱獲して殺しまくってた組織とは思えないくらい
小さな悪事なんだよな！

「ただあのファイヤーは、今は野生だけど、一時期人間と共に居て
ね。とても強いんだ。レベルは70を越えてる」

「70越え？野生で!？」

ひええ、ギラティナとかレックウザとか、一部の伝説ポケモンより
上じゃねえか！

ノックの音に話を一時中断する。弟子が戻って来た。

「どうぞ」

「有り難うございます」

菓子皿をサイドテーブルに置き、湯飲みを渡してくれた弟子は窓際
のイスに戻る。

今更だけどチョコとクッキーと湯飲みって、お土産の選択誤ったか。

「続きだ。」

あの時、一度は捕まってしまったファイヤーをなんとか解放でき
た。そのまま逃げてくれたから助かったけど、正直なところ危険な
賭だったんだ。

怒り任せに暴れられては、森に囲まれている上に木造住宅の多い
キキョウシティは、あつと言う間に炎に囲まれていただろう」

顔が引きつった。なにそれ怖い。ファイヤーさんてそんな強いの？
実はガメラなの？

「ハヤトさんはもしもの時を考慮して、町に俺たちジムトレーナーを残していました。」

ポケモンレンジャーのお二方だけを連れてファイヤーの捕獲阻止に向かったのです」

昨日会ったポケモンレンジャーのお姉さんたちと協力したんですね、わかります。

「けれど途中で分断されてしまっただね。情けない話だが、ファイヤーを逃がしたところで力尽きてしまった」

はあ、なんか大変だったんだな。

「いくつか疑問があるんですけど」

「なんだい？」

「立ち入り禁止は誰が指示したんですか？」

「指示したのは俺だけど、その前からロケット団が封鎖していたね」

「どんな風に立ち入り禁止を知らせたんですか？」

「街中はスピーカーで放送を入れて、道路は警察が見回って、俺たちも確認しながら進んだ」

ゴロウと電話した時からずっと引っかかっていたんだけど、俺は全然立ち入り禁止になったことに気付かなかった。おまけに封鎖だった？

「俺がロケット団に会ったのは森に入ってからです。道路を歩いていても封鎖してるロケット団には会いませんでした」

「それは…」

ハヤトはお弟子さんを見たが、お弟子さんは首を振った。

「キキヨウでもヨシノでも、警察の方はロケット団と接触していません。」

ロケット団の見張りと思われる姿が視認出来る場所まで近付いて、周りに人が居ないのを確認して街へ戻られたそうです」

「俺がロケット団に会ったのは、獣道に入るずっと手前だ。そこから獣道まで蹴散らして、ヨシノ側に潜んでるかもしれない奴らはレンジャーの1人に任せた」

んー、じゃあ、ハヤトとレンジャーの急襲にロケット団は対応して、さらにレンジャーの1人がヨシノ側を殲滅したから、俺は運良く会わなかったって事なのかな。タイミングが良すぎるような……って待てよ？

「ハヤトさん、その時、野生のポケモンって出現してましたか？」

「いや、途中からぱったり出なくなっただな」

「俺も暗闇の洞窟まで、1時間くらい遭遇しませんでした」

ハヤトが顔をしかめた。

「途中で休憩は？」

「してません」

弟子改めジムトレーナーがしゃがみ込む。ベッドに紙のタウンマップを広げた。

覗き込むとそれがキキヨウ・ヨシノ間の詳しい地図だとわかる。赤い×印を中心に道へはみ出るような青い円が広がり、更に4色の矢印があちこちに引いてある。矢印は所々で黒い×印とぶつかっていた。

「赤い×印はファイヤーがいた場所、黒い×印はロケット団と交戦になった場所、青い円はポケモンが出現しなかった区域、並びに通信機器が使えなかった範囲だ。」

4色の矢印は俺たちがそれぞれ辿ったルートだ」

矢印の横に、雑だけど名前の頭文字が書いてある。赤青黄色の3本はキキョウから伸びる31番道路を通り、暗闇の洞窟のしばらく手前で黄色が別れ、ヨシノ側の森や草むらで交戦している。

獣道に入った後に赤が別れて、黒い×印を引きつけるように森を転々としていく。

ファイヤーの元に辿り着いているのは青と白の2色だ。白は俺だろ。う。(リ)と書いてあるし、白い矢印はヨシノから30番道路を通り、獣道の途中で黒い×と交錯し、そこに(敗)と書かれている。手持ちが全滅して、首絞められた場所だな。

時間が書き込まれていないのでよくわからないが、俺の通ったルートにもかなり黒い×がある。ついでに黄色の矢印と一部交わっていた。

すべてを回避ってすくくないか。

「この青い範囲は正確だと聞いている。」

君が青い範囲に入ってから暗闇の洞窟までは、子供の足でも30分ほどだ」

「いや、青い範囲の前からポケモンに会ってないはずですよ」

短パン小僧のアキラはヨシノの近くにいた。

自分の記憶を頼りに、ゲームでのマップと目の前の地図を摺り合わせる。

「ここに緑ボングリの木がある民家がありませんか？」

「ああ、あるな」

「じゃあこの突き当たりがポケモン爺さんの家」

「そうだ」

「こちら辺にトレーナーがたむろしていて」

「ああ」

「ここに段差が、ヨシノから数えて……3つめ」

「ああ。一度しか通っていないのに、よく覚えているな」

笑って誤魔化す。実際はゲームで何度も通ってるし、見下ろす視点に慣れているから正確に当てられるんだけど、そんなことを言ったら俺まで入院になるだろう。

「この3つめの段差のところでトレーナーと戦って、それからエンカウント無しです」

「自転車を持つてるのかい？」

「いいえ」

こんな序盤で持つてるわけがない。4つめのジムバッジがあるコガネシティまでは徒歩だ。ランニングシューズ様々だな。

「ここから、ここまで」

ハヤトが短パン小僧のアキラが居た場所から暗闇の洞窟を指差す。

「歩きなら3時間ほどかかる」

「……え？」

どくと心臓が嫌な風に跳ねた。

ハヤトと顔を見合わせるが、その目にふざけた色はない。

本当に？本当に言ってるのか？
俺の記憶がおかしいのかよ？

「時間を勘違いしたんじゃないか？」

「そんな、朝、ヨシノを出て……」

必死に記憶を辿る。

7時半ぐらいにポケモンセンターを出て、ゴロウやアキラとバトルして雑談して、ポケギアは9時くらいだった。で、歩いて暗闇の洞窟の手前の草むらで、10時くらいだったんだよな。

ファイヤーを見たのは、10時過ぎくらいだろう。それから森に入っつて、気絶させられて、ハヤトを見つけて病院に連絡しようとしたのが、15時。

「大丈夫か？真っ青だが」

「……ええっと……」

大丈夫なわけない。心臓がうるさくて仕方なかった。ああ、でも確かめないわけにはいかない。

「ファイヤーが逃げた時刻、わかりますか」

「はい、街から観察されたので。14時3分にカントーの方へ飛び立ちました」

……4時間もずれてる……

「おい、リヨウ。本当に大丈夫なのか？」

まずいまずいまずい、なにこれ、記憶の混濁？病院に戻らなきゃ行けないのか？

「リヨウ?」

「……俺、記憶がおかしいみたいです」

混乱しながらも4時間のずれを話す。隠しておける事じゃない。だってゴロウやアキラに聞けば、俺が2人の前を通った時間はすぐにわかる。

「……この、青い範囲に君が時間を確認したと思われる草むらがある」

話す気力がなくて、微かな吐き気を感じながらハヤトの話に耳を傾ける。

「ポケギアの時計は電波時計だ。阻害されて狂っていた可能性がある」

「……本当に?」

「ああ。だからそんな顔をするな」

身乗り出したハヤトが俺の肩を励ますように叩いた。

「警察の見回りにも偶然見落とされたただけだろう」

慰められてる。すげー慰められてる。ハヤトの顔には子供を慰める笑顔が浮かんでいた。

非難勧告が出ていて、警察が見回りをしていて、偶然人を見落としたりなんて不祥事になるんじゃないか?もしくは俺が侵入したってことで咎められるとか。

「そんなに青ざめなくていい。君は正常だ」

無責任な慰めだと知っていても、その言葉に俺はどっしりもたない。安堵を覚えた。

ジムバッジを断った俺は、診察を受けるためヨシノシティまで戻った。ついでにゴールドスプレーを使って徒歩での時間を計ってみたけど、ハヤトの言う通り暗闇の洞窟からヨシノ近郊までは3時間ほどかかった。

「…こんな長かったかなあ。疲れも、今日の方が感じてるような気がする」

「ぶいー？」

先を歩いていたイーブイが首を傾げて見上げて来る。危ないから前向けよ、と言う間もなくつんのめった。

診察結果は特に問題ないとの事で、俺たちはヨシノシティの近くでレベル上げをして、そのままヨシノシティのポケモンセンターに泊まることにした。

「1日で上がるもんなんだな」

ベッドの上、胡座をかいた俺の足に乗っかって喉をならすイーブイを撫でながらポケギアでステータスを見ていく。

レベル上げをしたので、朝と晩でステータスの数値が目に見えて増加している。

チコリータの種族値は防御と特防が高く、次いで攻撃と特攻とHP、素早さとなっている。耐久向きなんだが、ウチのワカナさんは性格補正で攻撃が上がりやすく特攻は上がりにくくなってるし、努力値を振り始めたのでHPと攻撃が伸び始めている。

イーブイの種族値は特防が高く、次いでHPと攻撃と素早さ、防御と特攻となっている。モチヅキは防御が上がりやすく素早さが上がりにくいから耐久型に育てようとしているんだが、何に進化させるか迷ってるため取り敢えずHPに振ってる状態だ。

……でもなあ、良く考えたらこのメンツでキキョウジム突破は厳しい。

まず2匹とも先手とれない。そしてチコリータは相性悪い。イーブイは1匹は落とせるだろうが、2匹目を倒すのは厳しそうだ。この先もチコリータが相性の悪いジムは多いから、イーブイは攻撃にも振りたいんだよね……どうしよう。

レベルでゴリ押し、は却下だ。そんなのはノープランと一緒にゲームならCPUが相手でリセットできるから良いけど、ノーリセットで生活の生命線がかかった賞金付きの対人バトルなんだ。レベルに依存したら絶対どっかで躓く。

ゲームと言えばバージョン毎に出現ポケモンが違うが、この世界ではバージョンなんて概念がないため出現が限定されるなんて事はない。

それが、努力値を気にしながらのレベル上げを煩わしくさせる。チコリータもイーブイもとりあえずはHPを伸ばしたい。そのためにはキヤタピーだけを狩る必要があるんだけど、色んな種類がいればそれだけ目当てのポケモンの出現率も下がるんだよね。

仕方ないけど面倒くさい。

前々から少しずつ経験値が貯まっていたのと2匹が頑張ってくれた

おかげで、本日イーブイは11レベル、チコリータは8レベルになった。
でもヒビキが僅か2日(3日かな?)でジムバッジ入手した事を考えると、やっぱ上がるの遅いよな。
あー、これ以上は考えても仕方ない。良い案浮かばないし、とりあえず寝るかね。

「今日も頑張ってくれて有り難うな、モチツキ、ワカナ。
……寝てる?」

枕を座布団代わりに寛いでいたチコリータは目を瞑り、その背中がゆっくりと上下運動を繰り返していた。本格的なレベル上げは始めてだったから疲れたんだろう。

「俺らも寝るか」
「ぶいー」
「先に休むな。お休みー」
「お休みー」
「お休みー」
「お休みー」

ベッドに取り付けられたカーテンを閉める前に同室の奴らに挨拶する。ポケモンたちも慣れたもので、それぞれお休みの挨拶と思しき鳴き声を上げた。

イーブイをいったん下ろして、枕元に置いてある鞆からバスタオルを2枚出した。重ねてチコリータにかけてやる。春とはいえまだ冷えるからな。

枕が使えなくてちょっと寝辛いけど、寝返りを打とうにもイーブイが腹の上に乗っかってしまって身動きが取れない。けれどそれが逆に寝付きを良くしてくれる事は既に知っている。

目を瞑って腹の温もりを撫でる。暖かな重みと喉を鳴らす振動を感じながら、俺は穏やかな眠りに落ちていった。

キキョウシテイまで戻る道すがら、キャタピーとマダツボミを狩りまくった。

マダツボミを倒して得られる努力値は攻撃だ。タイプ相性は良くないが、物理アタッカーとして育てたいチコリータに頑張っつて貰った。おかげで踏破に時間かかったけどな。

ついでにマダツボミの塔もチコリータで突破することに決めた。

「ちょっとレベルは不安だけど、傷薬買ったし大丈夫かな」

「ちっこー！」

「いたっ。」

「ごめん。ワカナのことは頼りにしてるよ。ただ塔の中は連戦になるから。」

「疲れたら教えてくれよ」

不満そうに鼻を鳴らしたチコリータは、ヨシノとキキョウを往復する間にもうすぐ10レベルになるうとしていた。

しかし草タイプは草技半減だし、マダツボミは攻撃が中々高い。

「うし、気合い入れて行こうぜ！」

「ちっこー！」

たしたしと足を踏みしめて意気込みを表してくれたチコリータだったけど、まあ予想通り草タイプ同士の泥かけ試合が続いた。レベル

差でごり押ししたけどな。

傷薬を使うことなく余裕で最上階まで辿りつき、もう少しレベル高かったらよかったのになんて思ってたら綺麗に足元をすくわれた。

「ほうほう」

「ホーホー!？」

「ちこー!」

塔の最上階で待ち構えてる3人中2人がホーホー持ちだったのすっかり忘れてた。

茶色の丸いポケモンがホバリングで起こす風が微かに届く。さすがに塔の最上階に控えている坊さん、手持ちのレベルもそこそこある。いくら相手が攻撃力ないからって相性を無視する訳にはいかない。だからワカナさん、やるぞーって顔して足踏みしめないで!

「ワカナさん交代交代!頼むぞモチヅキ!」

ここまでチコリータで突破したからイーブイは無傷だ。ホーホーは飛行タイプにしちや足が遅いし、防御もないから大丈夫だろう。と思っただけどなあ。

「催眠術!」

「うえっ!？」

交代したターンは何も出来ない。

ホーホーの目が怪しく光ったと思ったら、イーブイはふらりと傾いで座り込んでしまった。

全然大丈夫じゃなかった!

「モチツキ！起きろ！」

「さあ、今の内に鳴き声です」

わあ、マジですか。

2倍近いレベル差があるから大丈夫だと思っけど、まずい。なにがまずいって催眠術と飛行タイプだよ。

眠り状態はターン経過で解除されるんだけど、いったんボールに戻すとまた始めからカウントになる。

鳴き声の攻撃低下の効果はいったん交代すれば消えるけど、交代を狙って飛行技食らったらチコリータが落ちるかもしれない。ここまて来るのにHPが2/3くらいに減ってるし。

交代したくねえな。

「起きろモチツキ！」

「体当たりです！」

「モチツキ！……ってあれ？」

あんまりダメージ入ってない。せいぜい1/6くらい。レベル差って偉大だな。

「モチツキ、起きてじたばたするんだ！」

「鳴き声です！」

これで攻撃2段階ダウンだ。やめてくれ、あんまり下げられると今度はノーマルタイプ同士（ホーホーはノーマル・飛行の複合タイプ）の泥かけ試合が始まっちゃうから。

攻撃上げられつつも最後の坊主をなんとか突破し、長老に挑む。相手の先鋒はマダツボミだろうと予想（って言うか希望的観測）して先頭はチコリータのまま行ったら、当たったけど、やはり2体目は

ホーホーが出てきた。

ああ、なんでこの世界って入れ替え制のバトルじゃないんだろう。

「行きなさい、ホーホー。催眠術です」

「ほうほー」

「交代だモチツキ！寝るなよモチツキ、モチツキー！」

願い虚しくイーブイは夢の世界へ旅立つ。飛行技を食らいたくないし、眠り状態はいつたん引っ込めても治らないのでひたすら待つ。待つ。待つ。鳴き声3回された。起きた瞬間に欠伸を打ち込んだが、その直後に催眠術食らってまた寝る。モチツキー！と叫ぶが起きる素振りもない。

ホーホーは特性：不眠で眠らなかった……忘れてた……忘れてたよ、不眠の存在。

アホか俺。

また待つ、待つ、攻撃食らったし暇なのでHPを回復してやる、待つ、起きた！

しまった、HP回復したからじたばたの威力弱いかもしれない。鳴き声食らってるし。

ノープラン過ぎだ俺。

でも攻撃手段1つしかないんだよ！

「じたばた！」

「催眠術です」

削りきれずにまた夢の中へ引きずり込まれた。

まあ傷薬とレベル差で耐えて催眠術外してくれた隙になんとか倒したワケですが、当然長老には呆れられたよね。

「待つばかりではチャンスを逃しますぞ」

「はい…でもウチのパーティ、イーブイ以外はチコリータだけで」

「ははあ。」

私どものホーホーは飛行技をしませんぞ」

なんですと!？

「駆け出しトレーナーの立ち寄る修行場ですからな、相性が悪くとも勝ち抜けるように調節しているのですよ。」

つきやすい弱点を持つと言っ点ではジムと一緒にすなあ」

ぐったりする俺の前で、長老はほっほっほ、とのんきに笑ったのだ。
った。

俺に足りない物、それはあ！

情報、思考、頭脳、根気、戦術、先見性、勤勉さ！

そして何よりもー！

（手持ちに）速さが足りない！！

一晩寝てスッキリした頭で思いついたのは、ステータス&技とキキヨウ周辺で集められる努力値の把握、なによりヒビキからハヤトの情報聞いて戦術を立ててみようと言う至ってシンプルなものだった。

ヒビキは俺がキキヨウシティ周辺でもたついでる間に、ヒワダタウンへ到着してサラサラつとロケット団トライバルをいなしたようだった。詳しくはわからない。俺もヒビキも金欠病だから通話は最低限だし、メールもあまりする質じゃなかったから。

そんな中でヒビキから話したいことがあるってメールが来たのは渡りに船だった。

ハヤトの情報だけでなくロケット団の動向も知りたかったし、ユウキにヒビキ紹介するって言ったしな。

つうワケで、俺ら3人は無料で通信できるWi-Fiルームに集合する運びとなった。

一番乗りで壁際の椅子に待機する俺の側にポケモンは居ない。理由は一目でジョウトの新人だと、しかも物慣れない人間だとバレるからだ。

ユウキになんで俺に声かけたか理由を聞いたんだけど、いわく。Wi-Fiルームで未進化のポケモンを連れたやつは一目でジョウ

トの新人だと分かる。これからポケモンを集めるだろうし変にプライドも無いだろうから声をかけた。
でも気を付ける、新人騙そうとする奴らも居るからな。
との返答を貰った。

図らずも頭をよぎったのは、イタイケな小学生の頃のコイキング500円事件。

初代のコイキングは、何も起こらない技代表の跳ねると、素早さ以外軒並み低ステータスのせいでボロクソな威力の体当たりしか覚えない。特性もないしな。

そんなのに500円出すなんて小学生の俺にとっては大事件だった。当時の俺にとって500円は大金だった。なんせ100円5枚分の価値。コインがでかくて重い。お年玉は500円で貰った方が嬉しかった。

そんな時代にゲームとは言え500円を騙し取られたのはショックが大きかった。お月見山を越えた辺りで進化させる事なく即BOXに預けたのも今では良い思い出。
なんて笑えるのもゲームだからで、間違っても現実で詐欺には会いたくない。

だから今後はボールに入って貰おうと決めている。

余り間をおかずにヒビキが入室して来た。聞いていた通りのホログラムに頭上に浮かぶトレーナー情報。

「よう、こないだぶり、ヒビキ！」

『こないだぶりー！』

「ちゃんと空手王に見える？」

「めっちゃムキムキマツチヨ。格闘ゲームみたいなナイスガチムチ！」

『むーきーむーきー』

「いえーフウーフウー！」

『マッチョメーン！』

「キヤーステキー超兄貴ー！ビンタして下さい！」

ヒビキのホログラム、空手王がぐっとマッスルポーズを決めたので拍手と声援を送る。嬉しそうで何よりです。

『リョウくんは虫取り少年なんだね』

「え、そうなのか？」

『え、そうだよ？』

「自分のホログラムの設定見てもないから知らなかつ、た…と、ちよいまち」

『うん』

話してる途中でポケギアが震える。ユウキからの着信だ。

基本的にポケギアはジョウトとカントーでしか使えず、ぽけ、ぽけ、ポケッチはシンオウだよ。えーつとなんだっけ、ハウエンのポケギアみたいなの。

えーつと、まあなんだ、トレーナー御用達の通信機器って他の地方の通信機器と互換性がないんだよな。

ポケギアが地域限定でしか通信出来ないのは、他地方の通信機器との互換性のなさから来るものらしい。昔、他社の携帯へ写メールを送るのにアドレスに一工夫必要だったようなもんだろうか。

これは拡張データをインストールすれば互換性を持たせられる。

しかし拡張データって結構高くて、俺はユウキの厚意に甘える形で格安でインストールした。

1つのデータカードで複数のユーザーが使えるやつをユウキが購入したのだ。1人で1ユーザー分買うよりずっと高いが、人数集める

と安上がりになる。

が、現時点ではウウキ1人に負担がかかっている。これくらい負担にもならない、と太っ腹な発言してたけど、いつか何かの形でお礼しなきゃな！。

「はいはいこちら虫取り少年のリヨウです」

「悪い、なんか通信トラブルで弾かれた」

「それはご愁傷様です」

「最近はなかったのに、ついてない」

最近はってことは昔はよくあったんだろうか。

『アクセスポイント変えてみるから、もう少し待っていてくれ』

「了解。急がなくていいから気を付けてな」

『ああ。じゃ』

通話の終了を見計らって空手王が首を傾げた。ウワァー鳥肌立ったぞ！

『遅れるって？』

「ああ、なんか弾かれたって」

『そっか。しょうがないね』

「な」。地方が離れてると大変なんだな。

なあ、暇だしヒワダの話聞かせてよ

『いいよー。んーとね、やあん』

ヤドンの鳴き真似をしたつきりヒビキは黙ってしまっ。もしかして突っ込み待ちですか。

「ヤドンだけかよー！」

『やあん？』

「疑問系になっただけじゃん」

『だってさー、ヤドンだらけなんだよ。』

あ、そういえばカモネギに会ったよ！本当にネギ持っててめっちや美味しそうだった！』

ひでえ感想だな！いや確かにカモネギ美味そうだけどさ。

「もつとさ、ボングリ職人のガンテツさんとか、名物の木炭とか、虫タイプのジムとか、ヤドンの井戸とか、ウバメの森とか、いつも雨降ってる道路とかたくさんあるだろ？」

『現地になくても詳しいねー。リョウくんの旅したら迷子にならなくて済みそう』

「ん？迷子になったのか？」

『うん。なんかね、洞窟入ったら行き止まりだらけで、おんなじとこ回ってるみたいになって。』

山男のおじさん居なかったら出れなかったかも』

「案内して貰ったの？」

『ううん、洞窟の地図貰ったんだ。』

でもね、見方わからなかったから適当に歩いてたら出れた！』

なにそれ主人公補正？ってゆーか地図意味ねえー。

「そうか、良かったなー」

『うん！』

途中でお腹すいたって言うたらヒノノがポケモンフード分けてくれたんだけど、食べる事にならなくて本当によかったよ』

「優しい子だな」

『うん、いいこだよー。気持ちだけ貰った』

「それがいいよ。』

…あれ？分けて貰ったって言った？」

『え？うん。』

洞窟内でヒノノたちはちょっとだけ食事したから、その時にわけてもらったんだよ』

「それどうしたんだ？」

『ビニール袋に入れといて、夜にこっそりヒノノのご飯に混ぜた』

「はは、異物混入みたいに言っただよ」

『あははは。異物混入って、僕犯罪者みたいじゃん』

壁際のソファでヒビキとのアホな雑談が続く。ソファに置いたポケギアはなかなか鳴らない。

アクセスポイント変えるって時間かかるのかな。

入る直前に連絡して貰えるようメールを送り、ヒビキの本題を切り出した。

「ヒビキ、話って？」

『あー、うん』

歯切れ悪く唸ると、少し眉を顰めてから話し出した。

『アイツに会ったよ』

「アイツって、シルバー？」

『そう。洞窟抜けてようやく町に着いたら、いきなり勝負しかけてきやがった』

きやがった！？ヒビキの乱暴な口調に内心呆気にとられる。

「お疲れ様。どうなったんだ？」

『アイツ全然話聞かない。なんか一方的に色々言われて、バトルすることになった。』

「こっちは疲れてるしPPPもないのにお構いなしで」

幾分低く、険悪な雰囲気の声。これは…

「…怒ってる？」

『んー、どうだろ。ちょっとイラッとしてる、くらいかな』

出会ってそんなになつてないけど、明らかな悪態をつくヒビキは初めてだ。俺の知るヒビキは笑ってて穏やかで天然で元気、そういう印象だった。

一度だけ危ないことをしたコトネに対して悪態っばいものと言ったけど、あれは心配混じりの呆れだったと思う。

今回は次元が違うだろう。

「ヒビキくんも怒るんだなあ…」

『たまにはね。でもあんまり怒らない方だと思うよ。怒るの疲れるし』

そういう理由で怒らないのかよ。

「確かに疲れるな」

『でしょ？』

『……ワニノコ、アリゲイツになつてた』

やっぱりゲーム通りに進行してるんだな、としか思わない俺と違い、ヒビキは少し俯いて困り果てていた。

普段元気な子犬がうなだれてるようだ。

「まだチャンスはあるよ」

『でも、悪い人に育てられると悪いポケモンになるって』

あ、そういやそんな話あったっけな。
うーん、たぶんライバルは根は悪い子じゃないと思うけど、これは
ストーリークリアした俺の意見だしなあ。

「…ワカナとヒノノ、いい子だよな」
「？」

『そうだね』

「こいつらと一緒に居たんだから、ワニノコもいい子なんだろうな」

着地点の見えない話にはビキが首を傾げる。鳥肌は無視だ。

「ワニノコのこと、信じたらいんじゃないか？」

『ん？』

「悪い奴に育てられても、悪いポケモンにならないってさ」

ヒキはぼかんと口を開けた。

『リヨウくんって、恥ずかしい』

……あー、そうかも。気取りすぎたかな。

『ありがとー。なんか元気出てきた！』

逆に俺が元気なくなってきたよ。恥ずかしくて。

「どう致しまして。次のチャンス待とうぜ」

『そうだねー』

「頑張れ！」

『頑張る！』

にこりと空手王のホログラムが笑う。ちゃんとヒビキの笑い方なのが不思議だ。

「あとはなんかあったか？」

「んーとね。ロケット団に会ったよ」

「大丈夫だったか？」

今ここに居るってことは無事だったことだけど、なんかこの世界のロケット団凶悪だから心配だったんだよな。

「うん、平気。」

「ただヤドンが、尻尾切られて…」

「え…」

なに、え、死んだとかじゃないよな？

「うまく泳げないからってポケセンに溢れかえってて、若干生臭いんだよね」

ちよっと困る、と頬を掻くヒビキ。びっくりさせんなよ。

「ご愁傷様です。早く尻尾生えるといいな」

「ほんとだよー」

俺が行くまでになんとかなってるといいけど。というコメントは差し控えさせて貰った。薄情すぎるだろ。

「なあ、ロケット団は強かったか？」

「んーん、そんな事なかったよ。僕1人でなんとかかったし」

そうなのか。何だろう、俺の運が悪くて凶悪なのに当たったってことなのかな。

「そっか。危ないことするなよ？」

なんかあれば、誰でもいいから助け求めるんだぞ。

俺も出来る限り力になるから」

『うん、ありがと！』

ジュンサーさんと同じ事言うんだね』

そりゃー子供の心配するさ、中身は大人だし。なんて言えないから、適当な事を言っとく。

「ロケット団って言ったら、3年前だっけ？」

ガラガラ乱獲とかタウンジャックとか色々やらかしたじゃん。

心配は当たり前だろ」

『あー、そっか』

「気を付ける、無理すんなよ」

『わかった！』

にっこり朗らかに空手王が笑う。

なあヒビキ、気に入ってるのはわかるんだが、ホログラム変えてくれるとお兄さんは嬉しいよ。

20分くらい雑談した頃にメールが来た。相手はもちろんユウキで、今入る、と書かれていた。

「来るってさ」

『もしかして、あれ、かな？』

エリートトレーナーのユウキ、と頭上に書かれた空手王のホログラムがこちらにやってくる。なにこのガチムチ祭り。パンツレスリング始まるの？
立ち上がって挨拶を交わす。

「こないだぶりです。ユウキさん」

『待たせて悪かったな。』

初めまして、ミシロタウンのユウキだ』

『初めまして、ワカバタウンのヒビキです。よろしく』

『ああ』

軽く頭を下げ合う2人。空手王ヒビキがにっこり人好きのする笑顔を浮かべ、空手王ユウキはクールな笑みを浮かべた。同じ見た目のに表示一つでえらい違いが出ている。

つうかこのホログラムといい転送システムといい、ほんととオーバーテクノロジーだよな。

「取り敢えず座ろっか」

『うん』

ソファに並んで座る。俺が真ん中がなったために、なんつうか筋肉

の圧迫が凄まじいです。いや、透けてるしホログラムだと分かっているから実物よりは暑苦しくないんだけど、心理的圧迫といいますか。

「無事入れて良かったですね」

『ああ』

『すぐに通信回復して良かったね』

『ああ』

「で、ユウキさんはどんなポケモンが欲しいんですか？」

懐からユウキが図鑑を出して広げる。見慣れないデザインだ。俺、ルビー・サファイア・エメラルドはやってないからなあ。

『博士に聞いたんだけど、図鑑同士は通信できるらしい。先にデータ交換しよう』

『へえー、どうやって?』

ヒビキも図鑑を広げる。赤と黒のそれは画面越しに何度も見たデザインで、奇妙な感じがした。

図鑑がおかしいとかじゃなくて、図鑑が手元にない事が違和感の原因だ。ポケモンをプレイする時必ず持つてる物がなくて、それを他人が持つてる事への違和感。

『このボタンを押すんだけど』

『どれー?』

自分の思考に耽りそうになったが、ガチムチが俺を挟んで会話してる光景に引き戻された。勢いがちよつと強すぎて顔が引きつりそう

だ。
つつかお互いの手元を覗き合うもんだから、なんか、もう、マッス

ルがひしめき合って、目が合ったら死んでしまいそうだぜ。

日常でまず有り得ない状態だけど、俺がどけば解決すんだよな。ホログラムだからぶつかるって事もないし、立ち上がるか。

「俺、どこうか」

『もう終わるからいいよ』

『リョウくんも図鑑見る？』

もたもたしてる間に通信し終えて空手王たちが離れる。うん、ガチムチの間から逃げるチャンス逃したね。

「せっかくだし見させて貰おうかな」

『すごいよ、ユウキくんの図鑑見たことないポケモンばかり！』

ユウキとデータを交換したヒビキの図鑑は、凄まじい数のポケモンが出会ったことのあるポケモンとして登録されていた。

ただしヒビキのは全国図鑑にバージョンアップする前のジョウト図鑑だから、ナンバーなんかは確認出来ない。捕まえてもいないから詳細なデータも登録されていない。

『ふあー、なんか目が回りそう……』

「すげー数だな。」

「……ん？フシギダネ！？」

『あれ？フシギダネって、カントーじゃなかったけ』

『カントーの人に交換して貰ったんだよ』

あ、そうだよな。御三家つたって主人公しか持って無いわけじゃないんだよな。俺だって連れてるし、ゲームにだって御三家持つてるトレーナー居るんだ。そんな驚く事じゃないか。

「あー、エネコ可愛い。グラエナ格好いいな」

『詳しいの?』

「いや、ハウエンはあんまり」

流し見しつつユウキを横目で伺うと、まだ少ないであろうデータをじっくり見ているようだった。

ヒビキが気になるポケモンのページで手を止める度に、どんなポケモンか知ってる限り説明し、ユウキが見終わるのを待つ。

「何か欲しいやつ居ました?」

『取り敢えず、メリープかな』

『じゃあ捕まえておくれ』

『ああ。ヒビキは?』

『んー…』

「こつ多いと目移りしちゃうよなあ」

『そーなんす!』

ヒビキ、ちょいちょいネタ挟んでくるんだよな。ジヨウトっ子だからだろうか。

『じゃあ後でメールしてくればいい。ポケギアにデータある?』

『なんのデータ?』

『ポケナビとポケギア通信できるようにするやつ』

あ、そうだ、ポケナビだ。

つてそんな事はどうでもよくて、またもや始まったガチムチサンドイッチが厳しいです。

なんでこんな席順になったんだらう。そんなの2人を仲介したのが俺だからに決まってるよなあ…

現実逃避気味の俺を挟んで、ユウキがヒビキにデータカードを送り、受け取ったヒビキがインストールした。

ユウキの許可を貰って、アドレスと番号は俺がメールで送る。これで次からは俺抜きでも通信できるな。

……今更だけど、これって良かったのかな。

いや、まあ、パルパークの代わりと思えば。うん、これで未来変わったりしないよな？ポケモン交換くらい大丈夫だよな、きっと。

『リヨウ？』

「なんですか？」

『ぼーっとしてたけど大丈夫？』

「ああ、ちよっと考え事してただけだから」

『そっかー』

「そそ。」

「……ユウキさん？」

ユウキはなんだか訝しげな表情で腕を組み、俺を見ている。

見つめ合ったら死んでしまいそうだぜって言ったけど、クールな眼差しは子供らしからぬ迫力だ。ガチムチだからかな？

「どうしたんです？」

『……なんでもない』

「？」

「ならいいですけど」

『ヒビキ、俺のことはユウキでいいよ』

『わかったー』

『フレンド登録しようぜ』

『フレンド登録？』

席を立つたユウキは友達手帳を開き、説明しながら通信マシンへ向かった。

あの視線はなんだったんだろう？

前後のやり取りを思い返してもなんだか分からない。ぼんやりと遠ざかったガチムチを見ながら考えてると、マシンから取り出した友達手帳を確認してヒビキが固まった。

ぱちぱちと瞬いてからきよとんとユウキを見やる。ユウキはにやにや人の悪い笑みを浮かべていたが、ヒビキが屈託のない笑顔で何事かを告げると顔を逸らしてこちらに戻ってきた。

『ヒビキど天然だな』

「ああ、面白いでしょう？」

『え、なにその反応。僕、変なことしてないよ？』

「素直だつて話。変わった事はしてないかもしれないけど」

『それが変わってるんだよ』

『ふーん：よくわかんないや』

ユウキの口振りとその間の話からするに、やっぱりチャンピオンと知れば態度が改まるものなんだろう。

トレーナーで在りながら妬んだり羨んだりせずに態度を変えないヒビキは貴重な存在なんだと思う。

「まあいいじゃん、友達増えたんだし」

『うん！』

『…そんな話の流れだっけ？』

『ボケ』

『ボケじゃないよ！』

「天然ですよ！」

『……それもボケってことじゃん』

「だってなあ」
『事実だろう』

すぱっと言い切られてヒビキはむっと膨れたけど、言い返さなかったのは2対1が不利だったからだろうか。

「そっだ、ユウキさん、頼みたい事があるんですけど」
『なんだ？』

「ちよつとジム戦に向けて準備をしたくて。

ヒビキにも聞きたい事があるんだけど」

『いいよ、なにになー？』

なぜかにここにご嬉しそうに笑うヒビキと、クールながらも親切なユウキに、俺は借りを作ったのだった。

お礼、何がいいだろうなあ…

ヒビキ・ユウキのガチムチに情報やアイテムを提供して貰ってから2日。

素早く攻撃力もあって回復までこなしちゃう飛行ポケモンのジム。俺が取った対策は、レベルを上げて殴る、という単純明快なごり押しだった。

とりあえず2匹のHP強化して、後はそれぞれチコリータは攻撃、イーブイは素早さを強化した。イーブイは性格補正でプラマイ0っぽいけど、たぶんポツポくらいなら抜けるだろ。つつか抜いて下さい頼みますよモチツキさん。

ゲームと違って回復アイテム禁止なのが痛い。チャレンジャーだけ持ち物OKなのがせめてもの救いだろっか。

ジムトレーナー倒した後にポケモンセンターで回復したり、ユウキに融通して貰った持ち物持たせたりした。けど不安は尽きない。

ジムの奥に位置する大きなバトルフィールドでハヤトと向かいながら、俺はひしひしと運ゲタイムな予感に緊張を募らせていた。

「よく来たな、リョウ。改めて挨拶しよう。

俺はキキョウジムのジムリーダー、ハヤト。

鳥ポケモンのエキスパートだ」

あれ、飛行タイプのエキスパートじゃないのか？

あ、そうか。飛行って言ったらギャラドスやカイリユウなんか含まれるのか。その辺はドラゴン使いの領域だもんな。

「改めまして、新人トレーナーのリョウです。よろしく願います」

帽子をとって頭を下げる。チコリータは頭を下げるかわりに葉を揺らして鳴いた。

「さあ、いつでもかかってこいよ！」

「っし、頼むぜ、ワカナ！」

「ちっこー！」

「ぽっぽー！」

たしんと足を踏みしめ、チコリータがフィールドへ飛び込んで行く。ハヤトの肩からポツポが飛び上がる。

宙に浮かぶバトルフィールドは床も遠いが天井も遠い。高く飛び上がったポツポが上空で羽ばたく。

こっちが草タイプだから突っ込んでくるつもりなんだろう。

「交代だ、モチツキ！」

「砂かけ！」

えっ、そこは体当たりじゃないんすか！？その予備動作はフェイントですか！？

急降下したポツポは出てきたばかりのイーブイの手前で急停止し、ホバリングした。するとどこからか現れた砂が舞い上がりイーブイにぶつかる。

イーブイはぶるぶると体を震わせて砂を払ったが、煙幕と同様に命中率ダウンの効果は残ってるはずだ。

チコリータを出せば補助技使わずに攻めてくるだろうと思ってた。だからその攻撃をイーブイに受けて貰ってじたばたの威力を上げるつもりだったんだけど、見事失敗だ。

さらに言うならハヤトは、モンスターボールホルダーに手をかけた俺を見て急遽技を切り替えた、ようには見えなかった。初めから砂かけを狙っていたのだろう。交代読まれてたのかなあ。

「あくび！」

「砂かけ！」

指示はほぼ同時でも、相手の方が素早いから砂かけが先に命中する。くありと大口開けたイーブイの口からほわんと白い煙が立ち上り、それはまるで意志があるかのようにポツポへ向かった。どうなってるのあの煙！

砂かけ重ね掛けのせいで2段階ダウン、60%まで下がった命中率だったが、イーブイは見事に欠伸を当ててくれた。

同じく命中率60%まで下げられたじたばただが、HPが下がる程に威力を増すため、HP満タンの現状だと威力は20しかない。

しかも命中率60%の技が2回連続で当たる確率は40%くらいだったはずだ。

相手も俺もまだ控えがいるのに、こんなところでハイリスク・ローリターンな賭けに出れるワケがない。

「交代だ、ピジョン！」

「交代、ワカナ！」

欠伸は即効性がない。使用した次のターンが終了してやっと効果が出る。

実質2ターン相手の攻撃を受け切らないといけないし、効果が出る前に交代されれば技は無効となってしまう。

それを知っていたのだらうハヤトは交換して来た。想定内なのでそれに合わせてこちらも交換だ。

「ぴじょー！」

「電光石火だ」

「じよっ」

「急所には食らうなよワカナ！毒の粉をお見舞いしてやれ」

「ちっこー！」

回避するために走り出したチコリータの胴体に、横からピジョンが素早く体当たりを決める。

ばん！と衝突が響いたが、多少よろめいた程度でチコリータは受けきった。

ピジョンのレベルは13、攻撃力も高いが、チコリータのレベルは14まで上げてあるしHPの努力値もそれなりに集めた。おかげでHPは半分より多め、3/5程残っている。

良い感じだ。毒の粉も当たれよ！

「ちー…こっ」

頭の葉が毒々しい紫の靄をまとう。それはくるりと回転する葉に導かれ、素早く離脱しようとしていたピジョンのへ飛んでいった。

ポケギアで確認すればピジョンは毒状態。これでピジョンは毎ターン最大HPの1/8を削られる。

攻撃で削りきれなくても、ターン終了時に止めをさせるかもしれないってことだ。

レベルが均衡してるとこっという補助技は馬鹿にできない。

「風起こした、ピジョン」

「ぴっ」

「良く当てた！戻ってくれ。」

頼むぞイーブイ」

「じょっ」

「ぶいっ」

ピジョンが力強くホバリングして、交代したてのイーブイに風起こしが決まる。

こちらもHPの努力値を集めただけあって、半分より上、3/5ほど残して止まった。これでじたばたの威力は40になったかな？

「電光石火！」

「じよっ」

「かわしてくれ！じたばただ！」

ピジョンは一度飛び上がると素早く反転し、風を切って急降下。勢いをつけたまま地上すれすれを飛翔し、イーブイの正面から突撃してきた。イーブイは右斜め前方へ飛び込むように駆け出している。

風起こしと電光石火の威力は同じだが、ピジョンのステータスなら電光石火の方が威力がある。そして特防より防御が低いイーブイは、特殊技の風起こしより物理技の電光石火の方が被ダメージが多い。

これで瀕死になるかも知れない。

だから、かわすのなんか無理だっただけわかってても、少しでもダメージを軽減して欲しくてかわせと言ってしまった。

今ならサトシの気持ちが変わりそうだ。

ぱあん！と、チコリータの時より軽めの衝突音が響いた。お互いの胴体がかすめるようにぶつかり、それぞれ左右に弾かれつつも前進

してく。

ポケギアのHPバーはイーブイのだけが一方的にぐんぐん減って行く。グリーンだったのがイエローになり、レッドゾーンに突入……残り3ドットで止まった。

ウワアアア、危なかったんでないかい！？心臓ばくばくしたぞっ！イーブイが前方へ踏み出してた事で衝突のタイミングと狙いがずれて威力が削がれたのか？

ぶつかったイーブイは右斜め前にころりと一回転して、それだけで体制を整えた。とても後ちよつとで瀕死には思えない俊敏さで反転して駆け出す。

その間にイーブイの首輪に付いた持ち物ケースが輝いたのが見えた。HPが1/4を下回った事で、持たせていたチイラの実が発動したのだ。

これで攻撃力が1段階アップだ。じたばたの威力も100か150になってるはず！

一方イーブイの左横を抜けたピジョンは、ざざざ、と痛そうな音を立て、やや右に傾く形で体制を崩しながら地面に降りた。

翼を2、3度羽ばたかせて体勢を立て直すとすぐに舞い上がろうとしたが、羽ばたきと共に地面を蹴りつけたところでイーブイが追いつがってくる。

逃がさないとばかりに背後から首筋へ噛みつき、間を置かず手足を振り回し始める。

ばし、ばし、ばしばしばし！と滅茶苦茶に振り回される手足は、ピジョンが全力でもがいてイーブイを振り落とすまで当たり続けた。ピジョンのHPは半分より少し下まで削られ、さらに毒状態のせいで半分以上下回り、残り2/5程になった。それでもまだイエロ

ゾーン 30%以上は残ってる。

思ったよりダメージが入らない。

おまけにポッポは無傷なのにこちらは2体とも傷付いている。

そしてイーブイは次のターンを耐えられないし、交代しても先手を取れないチコリータなら、結果は同じ。1ターンで敗北するか2ターンで敗北になるか、違いはそれだけだ。

状況はすこぶる悪い。

「リョウ、ジムバトルに降参はないぞ」

「わかってます」

面白そうな笑顔を浮かべるハヤト、その近くにピジョンが舞い降りる。それに向かってイーブイは姿勢を低くし、踏ん張って指示を待たせてくれる。

ユウキに聞いたんだけど、ジムリーダーってのはトレーナーの指標であり、チャレンジャーをただ全力で叩き潰すのではなく、チャレンジャーに合わせて必ず勝利のチャンスを作るらしい。

きっとそれは今、この待たせてくれる時間。ここまでされて、負けたくない。

考える、考える、突破口は在るはずだから！

ピジョンは、後一度なら十分に毒を耐えられるだけHPを残してる。交代すれば止めを差しに来るだろう。素早さで優るピジョンの攻撃は、たぶん風起こし。

ならば1つ、仕掛けてみよう。賭けるならきつとそこしか、チャンスは1回しかない。

「こないのか？終わらせてしまっぞ」

ばさりとピジョンが舞い上がる。
とっさに俺はイーブイをボールに戻す。

「交代だ。行け、ワカナ！」

「ふ…」

大空を華麗に舞う鳥ポケモンの凄さを見せてやる。ピジョン」

余裕の仕草ですつとこちらを指差すハヤトに従っい、ピジョンがこちらに飛んで来る。

「風起こしだ」

バトルフィールドの端、俺のすぐ目の前に出てきたチコリータは足を踏ん張り、俺まで煽られる強力な突風を耐える。

手首に付けたポケギアを窺えば、みるみるHPが減って行く。

腕で庇った狭い視界の中でちかりと小さな光が見えた。

倒れてもおかしくない攻撃に曝されても、1/4程のHPを残してチコリータは耐えきって見せる。

「バコウの実か」

「当たったり、さすがジムリ。」

「さあワカナ、反撃するぞ！突っ込め！」

「ちこー！」

「風に乗ってきたところだったが、羽休めだ」

ピジョンは毒でHPが30%を割り込んだのだろう。さっきのターンでレッドゾーンに突入していた。体当たりにしる葉っぱカッターにしる、流石にチコリータの攻撃を耐えきれない。

ハヤトの近くに舞い降りたピジョンは、ばさりと羽ばたいた。幻の白い羽が舞い落ちて地面に積もる。羽休めは最大HPの半分を回復する技。白い羽が舞い落ちることにピジョンのHPが回復していく。

いいよっしゅ、テンション上がった来たああああ！！

「葉っぱカッターだ、ワカナ！」

「ちこっ！？」

「何！？」

突っ込めと言ったから体当たりだと思ったのだらう。チコリータとハヤトが驚くが、それぞれすぐに行動に移る。

チコリータは急停止して頭の葉を一回転。緑の光を纏う葉っぱを宙に浮かべる。

ハヤトは素早く指示を出す。

「ピジョン、受けて立て！」

「じよっ」

ハヤトの指示に従い、ピジョンは翼をたたんだまま足を踏ん張る。

技には様々なルールとリスクがある。

例えばHP回復技の眠るは、HP全回復する代わりに3ターン眠り状態になる。その間にできる事は少なく、さらに3ターン経過は、アイテムを使わない限り絶対に架されるルールだ。

羽休めのリスクは、1ターンでHPを半分回復する代わりに、そのターンが終わるまで飛行タイプではなくなる事。そのルールは1ターン、自分と相手の技が出し終える、その瞬間まで。

つまり、このターンだけは草タイプ半減じゃなくなるワケだ！

「思いつきりやってやれワカナ！」
「ちー、こっ！」

ぶん、と、頭の葉が音を立てて回転する。それに操られるように葉が勢いよく飛び出して行き、目標を達えることなくピジョンに命中して行く。

ポケギアに表示されたHPがみるみる削れて行く。
ハヤトがボールに手を伸ばした。

「お疲れ、ピジョン。良くやってくれた」

ピジョンがふらりと傾いで尻餅をつく寸前、ボールへ吸い込まれてゆく。

いよっしゃああああ！マダツボミ倒しまくった甲斐があつたぜえええええー！！

「いやつたー！ナイスだワカナ！愛してる！」

「ちこっ！？」

「もうまじ大好きっ！」

「……ちこー……」

フィールドの中央でチコリータが気まずそうに顔を伏せたけれどそんなの関係ないぜ。今すぐ抱き締めてキスしてやりたい気分だ。

「おい、もう一体いるのを忘れてないか」

「あ」

しまった、狙い通りに展開運べたもんだから嬉し過ぎて、なんかもう終わった気がしてた。

ハヤトは苦笑を浮かべながらため息を付く。 気まずいです。

「はあー」

「すみません。ワカナ、交代だ」

「ちこー」

「これくらいで勝った気になられちゃ困る。

まだまだ、これからだよ」

放られたボールから無傷のポツポが現れる。

…シマツタ。イーブイがポツポに先手取れるか確認してねえ！

ああでももう出しちまつたし、チコリータに交代して死に出したところで結局は素早さが高い方が先手だし、イーブイを切り捨ててチコリータ出してもポツポより早い保証ないし、やれることは一つしかねえ！

「ポツポ、風起こし」

「じたばただ！先手取って倒してくれー！」

祈るように指示を出す。

2匹は同時に動き出した。が、風起こしは射程圏が広めの、いわゆる遠距離攻撃だから、ポツポの方が先に攻撃体勢へ入る。

ホバリングで羽ばたきを重ねる度に風が強くなる。吹き始めた風の中でイーブイが体を縮こめたと思うと、思い切りフィールドを蹴りつけて果敢に飛びかかっていった。

正面からのしかかるように飛び付いてポツポを地面に引きずり落とす。背中から落ちたポツポに乗り上げて、イーブイが滅茶苦茶に手

足を振り始めた。

ばし、ばし、どすばし、と攻撃が当たる。ポツポのHPが削れて行く。

「ポツポ、振り払うんだ！」

ハヤトの声に応えるようにポツポがもがいたが、激しい攻撃に抜ける事は叶わない。

イーブイの攻勢が弱くなったところ、小さな鳴き声が聞こえた。

「ほ……」

「ぶういつ」

反撃を警戒したのか飛び退こうとしたイーブイだったが、足をもつれさせてよろめき、さほど距離はとれなかった。転倒こそしなかったが、瀕死間際のHPと全力での攻撃のせいか、限界が近いようだ。次はない。

ポツポが震えながら体を起こそうとする。

頼むから起きるな、イーブイもチコリータももう一撃だって耐えられないんだ。

これが俺たちの全力なんだから、頼む。

ちらりと横目で見たポケギアのHPバーは、瀕死を示す左に振れきっているようだ。たまりに1ドット分残ってる時がある。そしてそれはよくよく見ないとわからないものだ。

しかし今はポケギアを矯めつ眇めつしている余裕がない。負けるとしても最後まで戦況を見て足掻かなければ。

ふらり、とポツポが立ち上がる。残っちまったか!?

焦りが湧き上がった次の瞬間、ポツポはその場に座り込み、目を開けたままころりと転がった。

「……仕方ない、俺も大人しく地に降りよう」

「あ……やった、やった！」

モチヅキ偉いっ！先手取った！倒した！偉いぞっ！」

「ぶいー」

フィールドに駆け出して、膝を付いてイーブイを抱き締める。こんなちっこい体で良く頑張ってくれたよ！

「お疲れ様、有り難うモチヅキ」

背中や頭を撫でると、ぐるぐると喉を鳴らしたイーブイが首を伸ばして顔に鼻を押し当てて来た。顔を寄せると目を細め、頭や頬を顔中に擦り付けてくる。

ベロベロ舐めてくるイーブイを片腕で抱いて、腰からもう一つのポールを放る。

「勝ったぞ、ワカナ、有り難うな！」

「ちこ……ちこ」

撫でるとチコリータは気持ちよさそうに目を細めて短い尾を振った。叩かれないのを良いことに抱き上げても、チコリータは大人しく腕に収まってくれた。

しかしイーブイが舐める標的をチコリータに変えると、慌てて頭の葉を振り回して、べっちゃん！と、俺を巻き込んでイーブイを思い切り叩いたのだった。

「だっ」

「ぶっ」

「モチツキ、大丈夫か!？」

「ぶいー」

俺の胸に頭を預けたイーブイは、尻尾を振って喉を鳴らした。

はあー、今の一撃で、まさかのバトル外瀕死になったかと思った。

「ち、ちこ」

「ぶいー」

さすがに今のはマズいと思ったのか、チコリータは申し訳無さそうに頭の葉を寝かせてイーブイに向かって鳴いた。イーブイは目を細め、笑顔で穏やかに返事をした。

「モチツキ、戻るか？」

疲れてるだろうにイーブイは服に爪をたて首を伸ばし、俺の顎に頭を何度もすり付けた。

そうだよな、嬉しいよな、頑張つて勝つたんだ。

今は一緒に喜ぼう。

「ほら、じゃれるのはその辺にして」

俺たちの所まで歩み寄ったハヤトが言葉とは裏腹な笑顔を浮かべ、小さなケースを差し出す。立ち上がって見やれば、開かれたケースに納まるのは羽を象った小さなバッジ。

「さあ、ジムを突破した証だ。改めて受け取ってくれ。

キキョウジムから君に贈るのは、ウイングバッジだ」

「今度こそ、遠慮なく。ワカナ」

ハヤトが蓋を閉める。その小さな青いケースをワカナが蔓で受け取った。

「そのバッジがあれば人から貰ったポケモンでも、レベル20までなら言うことを聞くようになる。」

更に秘伝技の岩砕きが使えるようになるんだ。

そして俺からはこの技マシンを贈ろう。」

51とナンバーが書かれた技マシンは8ミリCDの形をしていて、無料配布や付録CDなんかが入ってるような薄い布袋に入っていた。これ、どうやって使うんだろう。」

「いいんですか？」

「何がだ？」

「いえ、これヒビキにも上げてますよね」

「そうだけど……」

ニヤリとハヤトが笑った。

「どうも対策を取られてると思えば、なるほど。あいつから俺の話聞いて作戦を立ててきたんだな」

「あはは、まあそんな感じですよ」

「新人らしくないトレーナーだな。駆け出しには手が届かない道具を用意したばかりか、使い方も良く知っていた。」

スクール生か？」

「いえ、ネットや本なんかで、独学ですよ」

「感心だな」

あ、やめて、心が痛い。攻略本やネットで学ぶように、学生の頃も

つと勉強しとけば良かった、と我に返る事がある俺には耳も心も痛い話だ。

「この技マシンは羽休めが入ってる。

君は利点も弱点も解っているようだし、大いに役立ててくれよ」
「はい」

使いどころを考えれば羽休めはかなり便利だ。後攻で出せば飛行タイプが消えて困る事もないしな。

いつか飛行タイプ手に入れたら使いたいなあ。無理そうだったら売り払って旅費の足しにしよう。

「技マシンを使えば一瞬でポケモンに技を教える事ができる。

ただし一度使いきりだから良く考えてな」
「はい。」

これはどうやって使います?」

「ああ、それはCDROMだから、技マシン用のハードを買う必要がある。」

フレンドリーショップにあるから見に行くといい。

それからこれは賞金だ」

トレーナーカードを出して通信する。さっすがジムリーダー、1560円だなんて序盤じゃ破格の額だな!

勝って安心したら、御守り小判があつたら2倍貰えたのに、と欲が出た。そんなん持たせてバトルしてたら負けてたと思うけどさ。

でもなあ、がめついいと思うが、トレーナーとして生活する上で賞金が生命線なんだからなりふり構ってらんねーのも現実だ。

「君は次はどの街へ行くんだ?」

「ヒワダに行こうと思ってます」

「そうか、頑張れよ」

「はい。」

「ハヤトさん、病み上がりにも関わらず試合して下さって有り難うございました」

両手が塞がってるから帽子は取れないが、軽く頭を下げる。

呆気にとられたらしいハヤトだったが、破顔一笑、声を上げて笑い出した。

「ははははは、君には驚かされてばかりだ。

礼を言うのは俺の方だよ、そうだろ？」

俺とキキヨウシテイは君に助けられた。バトルも楽しめたよ。

有り難う」

「いえ、俺こそ沢山学ばせて貰いました。

ところでハヤトさん、俺が街を助けたってどういう事なんです？」

病室では俺が混乱しちゃって詳しく聞けず終いだっただから、気になつてたんだよな。

別にファイヤーやロケット団を追い払ったワケでもなく、ただたんにハヤトを見つけただけの俺が街を助けた功労者なんて変な話だ。

「話してなかったか？」

「はい。俺はハヤトさんを見つけただけですよね」

「それだよ」

え、どゆこと？ハヤトの命「キキヨウシテイぐらいの扱いなの？王様なの？キキヨウシテイだと思つてたけどハヤト帝国なの？住民は鳥ポケ所持が義務付けられてるの？」

「君は関わってしまったから教えるが、口外はするなよ」

「はい」

人の口に戸は建てられないと思うんだけど、先を知りたいから黙っとく。

「地下に潜っていたロケット団の残党が復活を企んでる。

奴らはポケモントレーナーの集団だ。一定の訓練しか受けていない警察では抑えきれない事もある。

だから今、ポケモンバトルのエキスパートであるジムの人間を失う訳にはいかなかった」

いったん言葉を切ったハヤトは睨むように鋭い目をした。

「例えそれが、敗北した人間でもだ」

俺を睨むと言うよりは、自分の不甲斐なさに憤っているらしい。そんなハヤトにかける言葉を、俺は持たない。

あの日、俺は初めて死を感じた。

色んな事があつて慌ただしく過ぎる日々だけど、ふと空いた時間で徐々に積もった思いがある。

俺は死にたくないし、他人を死なせたくもない。

出来ればポケモンだって死なせたくない。

生存本能があつて平和な国に暮らしていれば、死に対して漠然とした忌避感があるのは当然だと思う。それがあの日、死が身近にあると思ひ知って明確な形を持ち始めた。

あの敗北で、ハヤトも何か強い思いを抱いたんだろうか。

「……負けるのは、悔しいです。

あんな奴らに、負けたくはない」

やっと出た言葉はありきたりなものだったけれど、紛れもなく本心だった。

死は怖い。負けは悔しい。当たり前前の感情だけれど、それを上回る感情がある。

恐怖を感じた自分が、あんな奴らに負けた、自分の取るに足りなさが一番悔しかった。

「ああ。

リヨウ、無理はするな」

「したくても出来ませんよ」

ロケット団は毒・悪タイプが多い。毒は飛行や虫との複合タイプだったり、悪は炎や氷との複合タイプがいる。アタッカーとして育て始めたチコリータでは相性が悪い。かと言ってイーブイをアタッカーにするには問題が多いと今さっき痛感したし、今の俺では太刀打ち出来ない。

相手は悪の組織だ。ハヤトみたいにバトルを楽しむ事も、ジムリみためにチャレンジャーを育てるつもりもない。

バトルはただのつぶし合いになるだろう。

「君はもちろん俺もまだまだ強くなる。次は負けない」

「そうですね」

強気に笑って自信あり気に言うハヤトに俺は笑った。

ロケット団の凶悪さを考えれば根拠のない自信だと思つのに、その向上心と前向きさに元気付けられた。

次がいつになるかわからないけど、俺も出来るだけの事はしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0597y/>

俺とポケモンと冒険

2012年1月14日00時17分発行